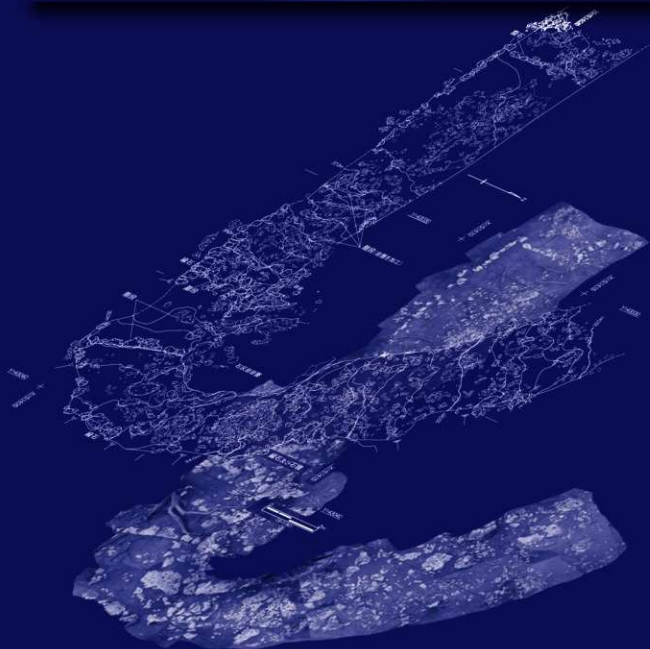


町内埋蔵文化財予備調査報告書

億首川周辺(平成18～20年度)

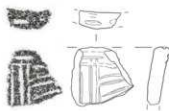


2010(平成22)年3月

金武町教育委員会

町内埋蔵文化財予備調査報告書

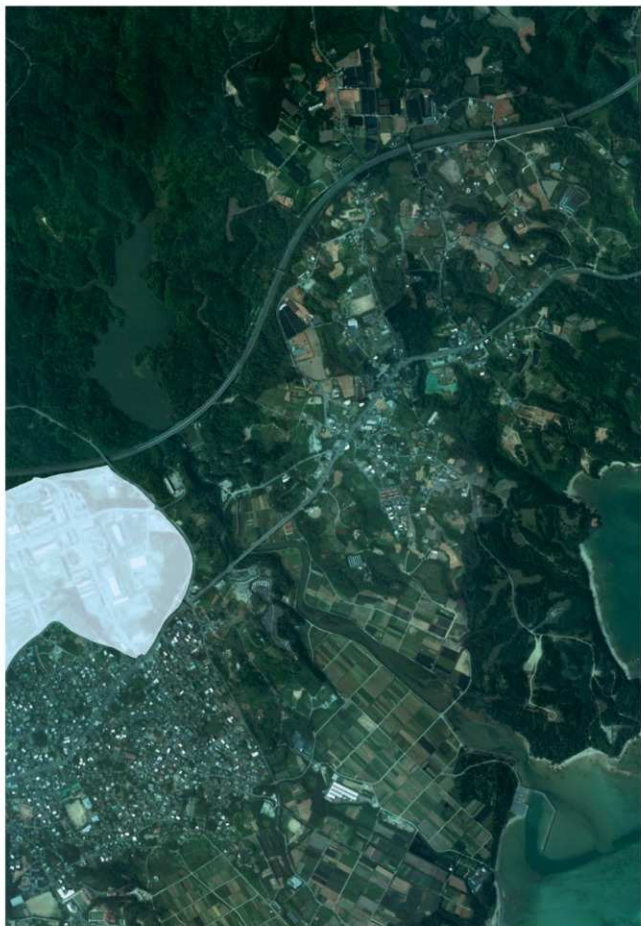
億首川周辺（平成 18 ～ 20 年度）



西光池原遺物散布地採集の土器
（左順天来土器 縄文時代の副産品）

2010（平成 22）年 3 月

金武町教育委員会



巻頭写真1 調査対象地域（徳首川周辺）航空写真



巻頭写真2 徳首川上流域生産遺跡群の予備調査（1）

i 沢利用耕地跡周辺の環境測量風景
ii 堰堤状石積み遺構



巻頭写真3 徳首川上流域生産遺跡群の予備調査(2)

i 丘陵斜面を利用した階段状耕跡跡
ii 方形状壁穴石地施設



国頭方東海道跡 道構模出状況

巻頭写真4 奥首の交通道跡群（1）



巻頭写真 5 奥首の交通遺跡群（2）

i 大正期村道跡 検出状況
ii 昭和戦前期 旧徳宮橋 確認状況



巻頭写真 6 億首川下流周辺の予備調査

i 西先附原遺物散布地 試掘調査
ii 億首川周辺古墓分布調査（比嘉原地区）

序 文

本報告書は、金武町教育委員会が平成 18 ～ 20 年度に実施した町内埋蔵文化財予備調査（億首川周辺地域）の成果をまとめたものです。本調査は、昭和 57 年度及び昭和 63 ～ 平成元年度の調査成果を踏まえながら、より適切な埋蔵文化財保護を図るために文化庁国庫補助を受けて実施している継続事業であります。

今回報告する平成 18 ～ 20 年度の調査では、「やんばる」の地において力強く生きた先人達とヤマの関わりを物語る生産遺跡群、明治期の文献に描かれる姿で現れた国頭方東海道跡（宿道）をはじめとする各時代の道路遺構群などを確認することができました。さらに下流周辺に分布する遺跡や遺物散布地から遙か先史古代より億首川周辺が生活域として選択され続けた状況がうかがえます。

本報告書が対象地域における今後の諸開発に係る協議調整等の資料、学術的な調査研究の基礎資料として、また広く町民が郷土に残された文化財とその保護の重要性について理解を深め、薫り高い教育文化のまちづくりのための一助としてご活用頂けることを願います。

末尾になりましたが、現場調査から報告書刊行に至るまで指導助言を賜りました文化庁文化財部記念物課、沖縄県教育庁文化課、金武町文化財保護審議会並びに関係各位、事業実施及び現地調査の円滑化に多大なる御協力を賜りました内閣府沖縄総合事務局北部ダム事務所、在沖米国海兵隊環境保全課並びに関係各位、そして並里区・中川区をはじめ町民の皆様により感謝申し上げます。

2010 年（平成 22 年）3 月

沖縄県金武町教育委員会

教育長 仲 間 一

例 言

1. 本報告書は、平成 18～20 年度に文化庁国庫補助を受けて億首川周辺地域を主要な調査対象に実施した、町内埋蔵文化財予備調査（遺跡詳細分布調査・開発区域詳細）の成果を収録したものである。
2. 調査地は、沖縄県国頭郡金武町字金武に所在する。
3. 億首川上流周辺（億首ダム建設予定地）の現地調査に際しては、在沖米海兵隊環境保全課並びに内閣府沖縄総合事務局北部ダム事務所開発調査課、同億首出張所の協力を得た。
また、詳細踏査等における植物貴重種の有無確認や取扱に関しては、同事務所環境課及び（社）沖縄建設弘済会に情報提供・現地確認等の協力を頂いた。
4. 町内埋蔵文化財予備調査の実施にあたり、町内所在の遺跡名称について、過去の調査成果や所在地（小字）、地名等を勘案しながら整理を行った（第Ⅲ章第2節）。
5. 本書掲載の地形図は、金武町役場作成 1/25,000 地形図及び沖縄総合事務局北部ダム事務所作成の地形図を適宜調製して使用した。
6. 本書掲載の米軍撮影航空写真は金武区入会権者会、米軍作成地形測量図は並里区事務所より提供頂いたものを適宜調製して使用した。
7. 本書掲載の遺物写真は、その撮影工程を琉埋蔵文化財サポートシステムに委託し、安座間が監修した。
8. 本書の編集は、仲間淳一・岸本利枝・金城忍の協力を得て、安座間充が担当した。
9. 本書の執筆は、安座間充・仲間淳一・岸本利枝・富山勇で行った（執筆分担は目次に記載）。本書掲載の図・表は安座間・仲間・岸本のほか金城忍・武智方寛・屋比久美香子（以上、町史編纂・文化財係スタッフ）で作成し、表紙デザインは仲間淳一が担当した。
10. 本町文化財保護審議会会長の池原隆氏には常々指導頂くとともに貴重な玉稿を賜り（第Ⅲ章第3節）、堤浩一朗氏・知花一正氏（琉埋蔵文化財サポートシステム）には一部図面の作成過程でご協力を頂いた。記して篤く感謝申し上げます。
11. 調査で得た図面・写真等各種記録及び遺物はすべて金武町教育委員会（町史編纂・文化財係）に保管している。

凡 例

1. 本書掲載の現況測量図等における座標軸は平面直角座標第ⅩⅤ系（世界測地系）を使用している。断面図等における基準高は海拔高を用いている。
2. 本書掲載の図・写真及び表の番号は、「章番号＋連の番号」という構成となっている。

例 図 2.4 → 第Ⅱ章で4番目に掲載する図

写真 4.5 → 第Ⅳ章で5番目の写真のグループ

3. 現況測量図や遺構実測図・土層図等の縮尺は、適宜設定している。遺物実測図の縮尺は1/3を基本としたが、小破片が多い土器類は縮尺1/2としている（遺物写真も実測図の縮尺に同じ）。
4. 土層観察等で使用した色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『標準土色帖』を使用した。
5. 本書における先史時代の時代区分は、財団法人沖縄県文化振興会公文書管理部史料編集室編『沖縄県史各論編第二巻 考古』等を参考にした。
6. ハル名称等は必要に応じて初出時にルビを付した。また方言の表記はカタカナを用いた。
7. 引用・参考文献は、巻末に記載した。
8. 本書の執筆要領は、日本エディタースクール編『標準編集必携』から適宜適用した。

本文目次

巻頭写真	i
はじめに	vii
例言・凡例	viii
第I章 調査の目的及び経緯	1
第1節 調査の目的及び経緯	1
第2節 調査体制	2
第3節 調査経過	4
第II章 調査地域の位置と環境	7
第1節 金武町の位置と概要	7
第2節 調査地周辺の地理的・歴史的環境	9
第3節 億首川周辺と与那原の海上交通	11
第III章 調査手法及び遺跡名称の整理	15
第1節 地区設定、調査及び資料整理の手法	15
第2節 遺跡名称の整理	16
第IV章 億首川下流周辺における予備調査	20
第1節 先謝原遺物散布地	20
第2節 西先謝原遺物散布地	20
第3節 飛留喜田原A遺跡	27
第4節 飛留喜田原B遺跡	30
第5節 宮城原遺物散布地	32
第7節 美里原遺物散布地	35
第V章 億首川上流周辺における生産遺跡群の予備調査	37
第1節 生産遺跡群の概要及び分布状況	37
第2節 幸地原地区の生産遺跡	42
第3節 木登代原地区の生産遺跡	64
第4節 比嘉原地区の生産遺跡	68
第5節 富名田原地区の生産遺跡	72
付 節 遺構理士の自然科学分析	81
第VI章 奥首周辺における交通遺跡群の予備調査	83
第1節 調査の概要及び経過	83
第2節 国頭方東海道跡	84
第3節 大正期村道跡	98
第4節 昭和戦前期アーチ橋(旧億首橋)	103
第VII章 億首川流域における古墓調査	104
第1節 調査概要と墓分布状況	104
第2節 比嘉原地区	105
第3節 奥首原地区・甘喜原地区	109
第4節 飛留喜田原・頭呂地原地区	111
第VIII章 総括	118
第1節 億首川下流周辺の先史時代遺跡	
第2節 億首川上流域生産遺跡群の予備調査	
第3節 奥首の交通遺跡群	
第4節 億首川周辺における古墓分布調査	
引用・参考文献	120
報告書抄録	123

図・写真・表 目 次

図目次

図 1.1	億首川周辺整備構想イメージ図	1
図 1.2	平成 18 年度調査工程実績	4
図 1.3	平成 19 年度調査工程実績	5
図 1.4	平成 20 年度調査工程実績	6
図 2.1	神淵島及び金武町位置図	7
図 2.2	金武町域	8
図 2.3	調査地域周辺の表層地質分類図	9
図 2.4	調査地域周辺の地形分類図	9
図 2.5	億首川周辺のハル(小字)及び古地名	14
図 3.1	調査対象地域の地区区分	15
図 3.2	遺跡名称の整理	16
図 3.3	金武町内における遺跡名称の変遷	17
図 3.4	町内における遺跡の分布状況	18
図 3.5	調査対象地域(億首川流域)の 遺跡・遺物散布地	19
図 4.1	西先謝原遺物散布地試掘調査地点及び 試掘坑断面図	21
図 4.2	西先謝原遺物散布地 採集・出土遺物(土器)	24
図 4.3	西先謝原遺物散布地 採集・出土遺物(石器)	25
図 4.4	西先謝原遺物散布地 採集・出土遺物(石器)	26
図 4.5	飛留喜田原A遺跡周辺 試掘調査地点	27
図 4.6	飛留喜田原A遺跡周辺 試掘坑壁面	29
図 4.7	飛留喜田原A遺跡周辺 出土遺物	29
図 4.8	飛留喜田原B遺跡周辺 試掘調査地点	30
図 4.9	飛留喜田原B遺跡周辺 試掘坑壁面	31
図 4.10	飛留喜田原B遺跡周辺 出土遺物	32
図 4.11	宮城原遺物散布地 採集遺物	33
図 4.12	宮城原遺物散布地 採集遺物	34
図 4.13	美里原遺物散布地 採集遺物	35
図 5.1	調査対象地域の位置	38
図 5.2	億首川上流周辺における生産遺跡分布状況	39
図 5.3	調査対象地域(億首川上流周辺)の 古地名分布	40
図 5.4	ウヤギのカーラ近くの堰堤状石積【1地点】 周辺 平面図	42
図 5.5	同 堰堤状石積 立面図・断面図	42
図 5.6	ウヤギの耕地跡【2地点】平面図及び 石積遺構立面図	43
図 5.7	ウヤギの堰堤状石積【3地点】周辺 平面図	45
図 5.8	ウヤギの堰堤状石積【3地点】立面図・ 断面図	46
図 5.9	ウヤギ一帯で確認された生産遺跡分布図	

図 5.10	コーチャマ(幸地山)一帯で確認された 生産遺跡	46
図 5.11	コーチャマの沢利用耕地跡【5地点】 平面図(全体)各部断面図	48
図 5.12	同地点採集遺物	48+
図 5.13	コーチャマの沢利用耕地跡 平面図(1/3)	50
図 5.14	コーチャマの沢利用耕地跡 平面図(2/3)	51
図 5.15	コーチャマの沢利用耕地跡 平面図(3/3)	53
図 5.16	上ゴーチの耕地跡【6地点】及び 棚田跡【7地点】平面図	55
図 5.17	同地点 方形状堅穴石組施設 平面図・各部立面図	57
図 5.18	同地点 集石土坑 平面図	58
図 5.19	同地点(方形状堅穴石組施設周辺) 採集遺物	58
図 5.20	上ゴーチの棚田跡【7地点】及び 幸地原の遊離塚群【8地点】	60
図 5.21	幸地原の遊離塚群【8地点】各塚略測図 (平面・断面)	61
図 5.22	木登代原の平場跡【9地点】周辺平面図	62
図 5.23	木登代原の耕地跡【10地点】平面図	64
図 5.24	同地点 石積遺構 立面図・断面図	67
図 5.25	比嘉原の道跡及び土塁【12地点】平面図	67
図 5.26	同地点 各試掘坑断面図	69
図 5.27	富名田原の階段状耕地跡【13地点】平面図	71
図 5.28	同地点 土塁及び平場跡 平面図・断面図	73
図 5.29	同地点 方形状堅穴石組施設 平面図・断面図	75
図 5.30	富名田原の階段状耕地跡 採集遺物	77
図 5.31	富名田原の土塁【14地点】平面図	78
図 5.32	同地点近くの道跡 断面図	79
図 5.33	方形状堅穴石組施設内埋土から確認された 花粉化石	80
図 5.34	方形状堅穴石組施設内埋土から確認された 種実遺体	82
図 6.1	ウクビ(奥首)周辺における調査実施地点	82
図 6.2	国頭方東海道跡 遺構確認状況 (オルソ補正画像)	83
図 6.3	国頭方東海道跡 遺構確認状況 (位置図・平面図)	86
図 6.4	国頭方東海道跡周辺 採集遺物	87
図 6.5	宿道遺構検出地点及び丘陵斜面地区 試掘地点	88
図 6.6	試掘坑 01 壁面	89
図 6.7	試掘坑 02 遺構検出状況及び試掘坑壁面	89
図 6.8	試掘坑 03 遺構検出状況及び試掘坑壁面	90

図 6.9 試掘坑 04 掘削状況及び試掘坑壁面	91	近景	27
図 6.10 宿道周辺試掘調査(丘陵斜面地区)	92	写真 4.6 飛留喜田原A遺跡周辺試掘調査風景	28
出土遺物	93	写真 4.7 飛留喜田原A遺跡周辺 出土遺物	29
図 6.11 宿道西側地区 旧道検出状況及び試掘調査地点	94	写真 4.8 飛留喜田原B遺跡周辺試掘調査地点及び作業風景	30
図 6.12 試掘坑 05 遺構検出状況及び試掘坑壁面	95	写真 4.9 飛留喜田原B遺跡周辺 試掘坑壁面	31
図 6.13 試掘坑 06 遺構検出状況及び試掘坑壁面	95	写真 4.10 飛留喜田原B遺跡周辺 出土遺物	32
図 6.14 試掘坑 07 遺構確認状況及び試掘坑壁面	97	写真 4.11 宮城原遺物散布地 現況近景	32
図 6.15 試掘坑 08・09 壁面	97	写真 4.12 美里原遺物散布地 現況近景	35
図 6.16 宿道周辺試掘調査(宿道西側地区)	98	写真 4.13 調査メンバー、作業風景	36
出土遺物	98	写真 5.1 調査対象地域(億首川上流周辺)	37
図 6.17 大正期村道跡(現況平面図及び試掘調査地点)	99	写真 5.2 ウヤギのカーラ近くの堰堤状石積	42
図 6.18 大正期村道跡 各試掘坑壁面(試掘坑 11～13)	101	写真 5.3 ウヤギの耕地跡【2地点】	44
図 6.19 試掘坑 14 壁面、試掘坑 15 壁面及び旧道確認状況	102	写真 5.4 ウヤギの堰堤状石積【3地点】	45
図 7.1 億首川下流の墓分布状況(地籍図との重ね図)	104	写真 5.5 炭焼窯確認地点周辺現況	47
図 7.2 比嘉原地区 墓分布状況	105	写真 5.6 幸地原の炭焼窯跡【4地点】	47
図 7.3 飛留喜田原・頭呂地原地区 墓分布状況	111	写真 5.7 コーチヤマ(幸地山) 一帯における踏査風景	48
図 7.4 HS-05-06 号墓周辺 採集遺物	114	写真 5.8 コーチヤマの沢利用耕地跡における遺構確認状況(1/3)	49
写真目次		写真 5.9 遺物散布状況(離壇状平坦面及び石積付近)	50
巻頭写真1 調査対象地域(億首川周辺) 航空写真	i	写真 5.10 コーチヤマの沢利用耕地跡における遺構確認状況(2/3)	52
巻頭写真2 億首川上流域生産遺跡群の予備調査(1)	ii	写真 5.11 コーチヤマの沢利用耕地跡における遺構確認状況(3/3)	54
巻頭写真3 億首川上流域生産遺跡群の予備調査(2)	iii	写真 5.12 上ゴーチの耕地跡【6地点】における遺構確認状況	56
巻頭写真4 奥首の交通遺跡群(1)	iv	写真 5.13 同地点 方形状堅穴石組施設	59
巻頭写真5 奥首の交通遺跡群(2)	v	写真 5.14 同地点 集石土坑	60
巻頭写真6 億首川下流周辺の予備調査	vi	写真 5.15 遺物散布状況(方形状堅穴石組施設周辺)	60
写真 1.1 平成 18 年度調査風景	4	写真 5.16 上ゴーチの棚田跡【7地点】	61
写真 1.2 平成 19 年度調査風景	5	写真 5.17 各塚の確認状況	63
写真 1.3 平成 20 年度調査風景	6	写真 5.18 木登代原の平場跡における遺構確認状況	65
写真 2.1 調査対象地域遠景	9	写真 5.19 木登代原の耕地跡【10地点】における遺構確認状況	66
写真 3.1 調査風景	15	写真 5.20 ヒージャーガの護岸状石積【11地点】	68
写真 4.1 先謝原遺物散布地現況近景	20	写真 5.21 比嘉原の道路及び土塁 踏査作業風景	68
写真 4.2 西先謝原遺物散布地 近景及び踏査風景	20	写真 5.22 比嘉原の道路及び土塁【12地点】遺構確認状況及び各試掘坑壁面	70
写真 4.3 西先謝原遺物散布地周辺 試掘調査風景	22	写真 5.23 富名田原の階段状耕地跡 遺構確認状況	72
写真 4.4 西先謝原遺物散布地 遺物出土状況	23	写真 5.24 同地点 土塁及び平場跡 遺構確認状況	74
写真 4.5 頭呂地原遺物散布地、飛留喜田原A遺跡	23	写真 5.25 同地点 方形状堅穴石組施設	76
		写真 5.26 富名田原の土塁 遺構確認状況	79
		写真 5.27 富名田原の土塁近くで確認された道路	80
		写真 5.28 その他上流周辺で確認した遺構及び	

調査風景	80
写真 5.29 試料採取位置 (方形状堅穴石組施設内埋土)	81
写真 6.1 金武ダム建設前のウクビ (奥首) 一帯	83
写真 6.2 国頭方東海道路検出地点における 踏査風景	84
写真 6.3 国頭方東海道路 遺構確認状況	85
写真 6.4 試掘坑 01 (東壁)	89
写真 6.5 丘陵斜面地区の試掘調査 (試掘坑 02)	90
写真 6.6 丘陵斜面地区の試掘調査 (試掘坑 03)	91
写真 6.7 丘陵斜面地区の試掘調査 (試掘坑 04)	92
写真 6.8 遺物出土状況 (試掘坑 03、4 層)	93
写真 6.9 宿道西側地区 現況及び旧道確認状況	94
写真 6.10 宿道西側地区における試掘調査風景及び 遺構確認状況	96
写真 6.11 大正期村道路周辺現況	98
写真 6.12 大正期村道路ほか試掘調査 (試掘坑 11 ~ 13 及び試掘坑 15)	100
写真 6.13 戦前の旧億首橋	103
写真 6.14 旧億首橋確認状況及び試掘調査	103
写真 7.1 比嘉原地区遠景	105
写真 7.2 H-01 号墓	105
写真 7.3 H-02 号墓	106
写真 7.4 H-03 号墓	106
写真 7.5 H-04 号墓	107
写真 7.6 H-05 号墓	107
写真 7.7 H-06 号墓	108
写真 7.8 H-07 号墓	108
写真 7.9 H-08 号墓	109
写真 7.10 奥首原及び甘喜原地区遠景	109
写真 7.11 O-01 号墓	110
写真 7.12 A-01 号墓	110
写真 7.13 飛留喜田原・頭呂地原地区遠景	111
写真 7.14 HS-01 号墓	111
写真 7.15 HS-02 号墓	112
写真 7.16 HS-03 号墓	112
写真 7.17 HS-04 号墓	113
写真 7.18 HS-05 号墓	113
写真 7.19 HS-06 号墓	114
写真 7.20 HS-07 号墓	115
写真 7.21 HS-08 号墓	115
写真 7.22 HS-09 号墓	116
写真 7.23 HS-10 号墓	116
写真 7.24 HS-11 号墓	117
写真 7.25 億首川下流右岸 遠景	117

表目次

表 4.1 西先謝原遺物散布地 採集・出土遺物 観察表 (土器)	23
表 4.2 西先謝原遺物散布地 採集・出土遺物 観察表 (石器)	25
表 4.3 飛留喜田原A遺跡 周辺出土遺物観察表	29
表 4.4 飛留喜田原B遺跡 周辺出土遺物観察表	32
表 4.5 宮城原遺物散布地 採集遺物観察表	33
表 4.6 美里原遺物散布地 採集遺物観察表	36
表 5.1 調査対象地域 (億首川上流周辺) に残る古地名	41
表 5.2 コーチャマの沢利用耕地跡 採集遺物観察表	50
表 5.3 同地点 採集遺物観察表	60
表 5.4 富名田原の階段状耕地跡 採集遺物観察表	78
表 5.5 方形状堅穴石組施設内埋土の 土壌理化学分析結果	81
表 5.6 方形状堅穴石組施設内埋土の 花粉・寄生虫卵・植物珪酸体分析結果	81
表 5.7 方形状堅穴石組施設内埋土の 種実分析結果	81
表 6.1 国頭方東海道路周辺採集遺物観察表	89
表 6.2 宿道周辺試掘調査 (丘陵斜面地区) 出土遺物観察表	93
表 6.3 宿道西側地区 出土遺物観察表	98
表 7.1 H-05・06 号墓周辺 採集遺物観察表	114

第1章 調査の目的及び経緯

第1節 調査の目的及び経緯

本町域内の埋蔵文化財は、1970年代まで金武鍾乳洞遺跡ほか数カ所が把握されていたが*、1982年（昭和57）の県内大学考古学研究会による踏査、1988～1989（昭和63～平成元）年度の遺跡詳細分布調査（以下、前者は「82年踏査」、後者を「旧予備調査」という。）の結果、計28カ所の遺跡や遺物散布地を確認、現在に至っている†。

以来約20年近くの歳月が経過しているが、今後の諸開発行為との円滑な調整及び埋蔵文化財の保護を図るため、従前の予備調査で把握される遺跡・遺物散布地の残存範囲や埋蔵状態、帰属時期、遺跡の性格等について、より実態的な把握及び資料整備が今後必要である。

特に、本町の東部を流れる億首川周辺では、1996年（平成8）の沖縄に関する特別行動委員会（SACO）最終報告で条件付き返還合意されたギンバル訓練場の跡地利用計画、県管理金武ダム再開発（億首ダム建設）事業、国道329号線金武バイパス建設計画等、今後の町勢発展を図る上で重要施策に位置づけられる諸開発が予定されている（図1.1）。

億首川下流周辺では、町内最古となる縄文時代前

期相当（約5,000年前）の土器片が採集された西先謝原遺物散布地をはじめ、計7カ所の遺跡・遺物散布地があるが、いずれも採集遺物による範囲設定であり、より詳細な予備調査とその成果を踏まえた適切な保護調整が求められている。

また、本町には町面積の約60%を占める在沖米軍基地が存在するが、埋蔵文化財の分布状況について現行の遺跡地図上では空白となっているのが実際である。億首ダム建設を控えた億首川上流周辺（現金武ダム湛水城周辺）も米軍演習区域であり、埋蔵文化財に関する基礎情報の収集・整理も緊要の課題である。

以上の状況から、本町では2005（平成17）年度以降、調査体制の整備・充実を図るとともに、2006（平成18）年度より文化庁国庫補助を得て、諸開発の集中区域化が予想される億首川周辺を主要な調査対象として、いわゆる周知の遺跡の現況確認と試掘等による実態把握及び過去の未踏査区域における基礎情報の収集を主な柱とした予備調査に着手した。



図1.1 億首川周辺整備構想イメージ図（金武町役場企画課提供）

* 例えば、多和田真淳「琉球列島の貝塚分布と偏年の概念補遺」（琉球政府文化財保護委員会編『文化財要覧』1960年所収）ほか

† 金武町教育委員会『金武町の遺跡－遺跡詳細分布調査報告書－』1990年

第2節 調査体制

本報告書で対象とする予備調査の実施年度は2006(平成18)～2008(平成20)年度であり、資料整理及び報告書作成は2009(平成21)年度まで実施した。調査体制は以下の通りである。

2006(平成18)年度

事業主体 金武町教育委員会(所管:社会教育課)
事業責任者 教育長 比嘉邊利
事業総括 社会教育課長 仲田 實
事業事務 社会教育係長 金城米子
町史編纂・文化財係主任 仲間淳一
調査担当者 町史編纂・文化財係主事 安座間充
調査補助員 文化財調査嘱託員 岸本利枝
発掘調査作業員

池原 隆・池原徳次・浦崎初子・大城 貢・小橋川京子・富山 武・仲間光正・仲間孝雄・比嘉梅子・屋比久武夫(氏名五十音順/以下同じ)

委託業務

磁気探査業務: 株式会社沖縄探査開発

2007(平成19)年度

事業主体 金武町教育委員会
事業責任者 教育長 比嘉邊利
〃 仲間 一
事業総括 社会教育課長 仲田 實
事業事務 社会教育係長 金城米子
町史編纂・文化財係 主任 仲間淳一
調査担当者 町史編纂・文化財係 主事 安座間充
調査補助員 文化財調査嘱託員 岸本利枝
発掘調査作業員

池原徳次・井上浩彰・浦崎初子・大城 貢・黒沢健明・小橋川京子・富山 武・仲間哲也・比嘉梅子・山城洋一・山田政義

資料整理作業員

浦崎初子・小橋川京子

調査協力

宮平盛晃・金城 忍・安里由紀子(町史編纂・文

化財係嘱託職員、同賃金職員)

委託業務

遺構写真測量図化業務: 株式会社文化財サービス

2008(平成20)年度

事業主体 金武町教育委員会
事業責任者 教育長 仲間 一
事業総括 社会教育課長 仲田 實
事業事務 社会教育係長 金城 健
町史編纂・文化財係 主任 仲間淳一
調査担当者 町史編纂・文化財係 主事 安座間充
調査補助員 文化財調査嘱託員 岸本利枝
発掘調査作業員

浦崎初子・大城 貢・大城政幸・観川和也・小橋川京子・富山 武・仲間 靖・仲間 勝

調査協力

富山 勇・武智方寛・金城 忍・屋比久美香子(町史編纂・文化財係嘱託職員、同賃金職員)

2009(平成21)年度

事業主体 金武町教育委員会
事業責任者 教育長 仲間 一
事業総括 社会教育課長 仲田 實
事業事務 社会教育係長 金城 健
町史編纂・文化財係 主任 仲間淳一
整理担当 町史編纂・文化財係 主事 安座間充
文化財調査嘱託員 岸本利枝

資料整理作業員

浦崎初子・小橋川京子

資料整理協力

富山 勇・武智方寛・金城 忍・屋比久美香子(町史編纂・文化財係嘱託職員、同賃金職員)

委託業務

自然科学分析業務委託:

パリオ・サーヴェイ株式会社

資料整理支援業務委託(遺物写真撮影等):

株式会社埋蔵文化財サポートシステム

現場調査及び資料整理指導及び調査協力

本業務における現場調査及び資料整理、報告書作成業務に際し、以下の方々並びに関係機関に指導助言や協力を頂いた。(順不同・敬称略/所属等は当時)

調査指導

文化庁文化財部記念物課	福豆田佳男
	水之江和同
	清野孝之
	山下信一郎
沖縄県教育庁文化課	島袋 洋
	盛本 勲
	瀬戸哲也
	新垣 力
	久高 健
沖縄県立埋蔵文化財センター	岸本義彦
	金城亀信
	中山 晋
	片桐千亜紀
在沖米海兵隊環境保全課	與那覇政之
宜野座村教育委員会	知名定順
	田里一寿
恩納村博物館	知念 勇
恩納村教育委員会	崎原恒寿
うるま市教育委員会	大城 剛
沖縄市教育委員会	比嘉清和
宜野湾市教育委員会	城間 肇
沖縄国際大学総合文化学部	上原 静
グスク研究所	富真嗣一
慶応義塾大学大学院博士課程	名島弥生
金武町文化財保護審議会	池原 隆

資料整理指導・類例調査等協力

沖縄県立埋蔵文化財センター	西銘 章
	大堀皓平
名護市教育委員会	比嘉 久
今帰仁村教育委員会	宮城弘樹
沖縄市教育委員会	縄田雅重
那覇市立壺屋焼物博物館	栗山初美
鹿児島県伊仙町教育委員会	新里亮人
株式会社イーエーシー	赤嶺信哉
埋蔵文化財サポートシステム株式会社	知花一正
	堤 浩一朗

あわせて現場調査の実施に際し、地元並里区・中川区事務所並びに関係機関、そして試掘地点地権者の方々や多くの町民の皆様よりご理解とご協力を得た。

並里区	区長 與那城直也
	並里区事務所職員の皆様
中川区	区長 宜志富 司
	中川区事務所職員の皆様
試掘調査地点地権者	池原 弘
	池原迪夫
	仲田文三
	仲田千代
	仲間忠三
聞き取り調査協力者	池原善光
	前田真一
	與那城 剛
調査協力	内閣府沖縄総合事務局北 部ダム事務所開発調査課
	同事務所億首出張所
	社団法人沖縄建設弘済会

第3節 調査経過

調査実施年度における作業経過を以下に整理する。

2006（平成 18）年度

概要 初年度ではまず旧予備調査で確認された西先謝原遺物散布地ほか億首川周辺に所在する遺跡・遺物散布地の現況把握に努めた。同年9月、開発予定区域である億首川上流周辺（現金武ダム湛水域周辺）において伐採を伴わず踏査・目視が可能な範囲での概要踏査を実施、沢周辺を利用した生産関連遺構や道跡、古墓群を確認した。同年10月1日から作業員を動員、概要踏査で要伐採と判断した地点や堤体建設予定地周辺の詳細踏査、試掘調査を実施する。10月下旬、大正期村道や昭和戦前期の旧橋につづき、国頭方東海道跡（以下、宿道）の一部とみられる道路遺構を確認した。川幅が最も狭い地形的特徴や古地名から陸上・海上交通上の要所でもあり、付近一帯における交通遺構に留意した調査内容に変更、同年12月中旬まで現場調査を行った。作業員動員数は383.0人/日。平成19年2月4日～6日、宿道をはじめとする各時期の道路遺構を中心に現場一般見学会を実施し、約800名の来跡があった。

日誌抄

- 07.01～ 億首川周辺を対象に予備調査スタート
億首川下流周辺の遺跡現況確認
- 09.01～ 億首川上流周辺を対象とした概要踏査
生産関連遺構や道跡、古墓などを確認
- 10.01～ 発掘作業員を加えて詳細踏査に着手
- 10月下旬 国頭方東海道跡（宿道）の一部を確認
- 12.12 当該年度の現場調査終了
- 02.04-02.06 宿道ほか現場一般公開
- 02.22 文化庁調査官、県専門員現場指導
- 02.23-03.01 追補測量、古墓群の再踏査など



001 億首川上流周辺の踏査風景
002 旧億首橋対岸における試掘調査風景
003 現場一般見学会の様子
写真 1.1 平成 18 年度調査風景

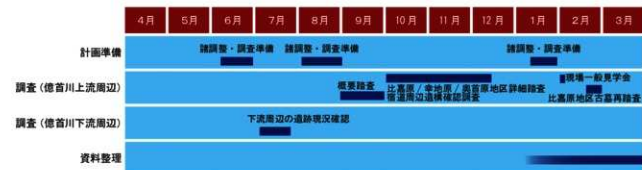


図 1.2 平成 18 年度調査工程実績

2007 (平成 19) 年度

概要 前年度につづき億首川上流周辺の生産遺跡分布調査、宿道ほか各時期道路遺構の確認目的の踏査及び試掘、そして西先謝原遺物散布地の踏査・試掘を実施した。平成 19 年 6 月、億首川上流の木登代原・幸地原地区を対象に踏査を行い、耕地跡や堰堤状石積など沢周辺を利用した生産関連遺構を確認、現況測量を行った。幸地原地区では避難壕跡とみられる掘削坑群も確認した。宿道以降各時期の道路遺構の残存範囲確認も重要な調査項目とし、二段階方式で取り組んだ。同年 9 月、町指定史跡ナコオガのイヅミほか町内の宿道に関わる伝承地等を現地確認し、遺構検出地点の周辺では里道確認を行った。一方、周知の遺跡の詳細把握のため西先謝原遺物散布地の踏査・試掘を行った。この事前調査及び地籍図等から試掘地点を設定し、同年 11 月 1 日より試掘調査を実施した結果、宿道西側地区の里道で溝状遺構や石列を検出した。検出遺構は図面等の記録作業後、砂や土嚢で保護して埋め戻した。翌年 1 月、西先謝原遺物散布地周辺の試掘調査に移り、埋蔵状態等の把握に努めた。2 月、補足測量等を行い、当該年度の調査工程を終えた。作業員 385.5 人 / 日。

日誌抄

- 06.04-29 億首川上流周辺 / 木登代原・幸地原地区の生産遺跡分布調査 (一部詳細踏査)
- 09.03-28 億首川下流周辺の詳細踏査及び先行試掘
- 11.01 ~ 宿道ほか各時期道路遺構の範囲確認調査
比嘉原地区の道跡現況測量及び試掘
- 01.07-18 西先謝原遺物散布地周辺の試掘調査
- 01.16 比嘉原地区古墓の人骨有無確認等
- 02.18-29 補足測量、土壌洗浄 (フローテーション)



004 億首川上流域生産遺跡群の調査風景
005 宿道検出地点の周辺での試掘調査風景 (宿道西側地区)
006 西先謝原遺物散布地における踏査風景

写真 1.2 平成 19 年度調査風景



図 1.3 平成 19 年度調査工程実績

2008 (平成 20) 年度

概要 億首川上流周辺では急傾斜地等の踏査未実施区域のうちダム関連工事が間近な地点について、植生調査～伐採段階での踏査を断続的に実施した。その結果、木登代原及び富名田原地区で米軍接収以前の道跡や耕地跡等を新たに確認したため、写真撮影や現況測量等の基礎的な記録作成に努めた。同年 12 月より作業員を動員し、宿道ほか各時期道路遺構の確認調査、下流域に所在する西先謝原遺物散布地、飛留喜田原A遺跡、同B遺跡において踏査・試掘調査を行った。下流周辺ではあわせて古墓分布踏査も実施した。当該年度で渡河地点周辺における宿道ほか交通遺跡の追跡調査(踏査・試掘)をひとまず終える事ができた。古墓分布調査では、頭呂地原～飛留喜田原地区において主に岩陰墓から構成される墓群を新たに確認した。次年度以降の堤体工事本格化により殊に上流周辺の景観変貌が予測されるため、高所作業車による遠景写真撮影を行い、当該年度の調査工程を終えた。作業員 133.5 人 / 日。

日誌抄

- 08.20 上流周辺 / 幸地原地区の一部詳細踏査
- 09.10 上流周辺 / 比嘉原地区の一部詳細踏査
- 11.13-12.03 上流周辺 / 富名田原地区の一部詳細踏査
生産関連遺構の写真撮影、現況測量等
- 12.04-11 道路遺構の追跡調査(踏査及び試掘)
- 12.12-01.08 池原遺物散布地ほかの踏査及び試掘
億首川下流周辺の古墓分布調査
- 01.27 飛留喜田原遺跡ほか試掘地点補足測量
- 01.28-02.13 上流周辺 / 幸地原地区の一部詳細踏査
生産関連遺構の写真撮影、現況測量等



007 億首川上流周辺での生産遺跡調査風景
008 飛留喜田原B遺跡周辺における試掘調査風景
009 確認した交通遺跡に関する聞き取り調査風景
写真 1.3 平成 20 年度調査風景



図 1.4 平成 20 年度調査工程実績

第1節 金武町の位置と概要

位置と地勢 金武町は沖縄本島東岸のほぼ中央にあって、県都那覇市から約35km、名護市から約28kmに位置する国頭郡の町である。東に宜野座村、北は恩納村、西はうるま市に接し、南は金武湾に面して勝連半島及び平安座島・宮城島・伊計島を望む。東西距離は約12km、南北は町東部で約7km、西部で約3kmの三角形に近いびつな菱形を呈する。

面積は約37.75平方kmだが、内陸側の大部分をはじめ約60%が在沖米軍基地であり、町土利用が大幅に制限されている。地目別面積比では、宅地9.1%、田・畑30.1%、山林・原野その他60.8%となっている（平成18年1月現在）。人口約11,200人、世帯数は約4,870を数え（平成22年1月末現在）、字金武の金武区・並里区及び中川区、字伊芸の伊芸区、字屋嘉の屋嘉区の3字・5行政区から構成されている。本島北部と中南部地域の結節地にあたり、主要幹道として国道329号線及び沖縄自動車道が東西に横断し、県道

88・104号線が西岸部へのアクセス道路として展開している。

地形と地質 本町の地形を概観すると、恩納岳（標高362.8m）以下島軸に連なる山々の稜線から概ね南東方向へ緩やかな低丘陵と琉球石灰岩からなる台地が続き、金武湾岸に臨む。町域の東半で顕著に認めるが西半では台地の形成発達は殆どみられず、金武区以東の3部落は台地上に、伊芸及び屋嘉区部落は海岸線に近い丘陵裾の低地に立地している。そして、島軸の脊梁山地を源とする億首川ほか大小の河川が金武湾へ南流しながら周辺の地形に変化を加えている。

表層地質は、粘板岩・千枚岩・片岩類からなる中生代後期の名護層、砂岩・砂岩粘板岩互層で構成される新生代古第三紀の嘉陽層を基盤とし、第四紀琉球層群と呼ばれる国頭礫層及び琉球石灰岩が不整合に覆う。



図2.1 沖縄島及び金武町位置図

気候 気候は、亜熱帯海洋性に属する。沖縄気象台公表の金武地区観測データをもとに過去5年間（平成15～19年）の平均値算出でみれば、年間平均気温22.8℃、平均気温が20℃超の月が計8ヵ月と温暖である。年間降水量は5年平均算出で2189.9mm、降雨は梅雨期と台風期に概ね集中する傾向にある。

沿革 金武という地名がいつ頃発生したのか定かではないが、首里王家の陵墓・玉陵の碑文に「きんのあんし（金武の按司）」、沖縄最古の歌謡集『おもろさうし』に「きんのよのぬし（金武の世の主）」が登場することから、少なくとも初源は15世紀末以前に遡るものと推測される。そして古琉球における「金武の世の主」の支配領域が「間切・シマ制度」とも称される近世地方行政区分における金武間切城の形成に関係していると考えられる。17世紀中頃まで金武間切は、現在の名護市域の一部、恩納村域の一部及び宜野座村域までを含む広大な領域であったが、1673年の久志間切、恩納間切新設に伴う分割を経て、現金武町・宜野座村の範囲に縮小した。地域に伝わる琉歌「金武節」「仲間節」の一節にも分割縮小前の金武間切の姿を窺える。

沖縄県設置後、1899（明治32）年の土地整理法施行、1908（明治41）年の沖縄県及島嶼町村制施行により旧慣制度は刷新され、金武間切は金武村に、各ムラは字に再編成された。当時激動する社会情勢において、金武村出身の當山久三（1868-1910）が沖縄海外移民の先駆をなしたことが、その後県下において本町が「海外雄飛の里」「移民発祥の地」と呼ばれてきた由縁でもある。

「鉄の暴風」と形容される凄惨な沖縄戦が終結して間もない1946（昭和21）年、漢那・宜野座・惣慶・古知屋（現松田）の4字が分離し宜野座村が成立、金武村は現在の3字・5行政区となる。その後、米軍施政下において、基地建設や朝鮮戦争・ベトナム戦争等を背景に基地依存的消費経済はピークを迎えたが、1972（昭和47）年の本土復帰を経て、1980（昭和55）年の町制施行、1977（昭和52）年の振興計画基本構想の策定以来、基地経済からの脱却を図るべく諸公共事業が推進されてきた。現在、「心豊かな明るい健康文化のまち」を町の将来像に掲げ、各種施策の実現に努めているところである。



図2.2 金武町域

2.2 歴史的環境

先史時代～グスク時代 考古資料にみる環金武湾地域における人類活動の痕跡は藪地島藪地洞穴遺跡(うま市)出土の爪形土器(縄文時代早期頃に比定)が現在最も古く、以後時期が下るにつれ前原貝塚(宜野座村)や古我地原貝塚(うま市)、伊計島仲原遺跡(同左)、宇堅貝塚群(同左)などに、先史時代各時期の集落様相や奄美・九州の遠隔地との交流を証する遺構・遺物が確認されている。

本町で最古の痕跡は億首川河口に近い西先謝原遺物散布地で採集された、縄文時代前期(約5,000年前)の条痕文土器であるが、当該期の遺跡は本島北部の東海岸ではまだ報告されていない。

その後も、ii. 縄文時代後・晩期相当、iii. 弥生～古墳時代並行期、iv. 古代並行期(奈良～平安時代並行)及びv. グスク時代初期頃の各時期の遺物が億首川下流～河口周辺の低地や兩岸の台地部周辺における複数の地点で確認されている。先史時代において当該地域が集落適地として選択され続けたことが窺えるが、旧予備調査まで得られた遺物の年代等から導かれるもので、各時代・各時期の営為を直接証し得る住居跡等の遺構検出例はまだない。

「きんのよのぬし(金武の世の主)」といった地方支配者や城塞的グスクが本島各地に現れる13世紀後半以降(概ね古琉球と通称される時期)、本町でも現在集落地に近い内陸側に遺跡や遺物散布地を認めるようになる。琉球石灰岩層による台地形成が顕著な町域の東側では、内陸側に位置する金武鍾乳洞遺跡やトウムスズ御嶽、金武グスク等において、12～14世紀頃の中国産青磁・白磁の碗・皿やカムイヤキ壺等の舶載陶磁器類が在地の土器とともに採集されており、当該時期には内陸部への集落展開、支配者の出現があったと考えられる。

近世 文献史料に本町の関連記事を認めるのは、16世紀以降である。なお最古の文字資料は弘治十四年(1501年)の年紀がある玉陵碑文である。金武間切以降の行政区域の沿革については既に述べたので割愛するが、近世前期(17世紀中頃)の琉球王府版図内の間切・村々について記した『絵図郷村帳』、『琉球国高覧帳』、王府編述の歴史書『球陽』等の

文献には、現在町域内に残る村名以外に、つぶた村(慶武田村)・平田村・前田村等の村名が登場し、なかには「当時之無」の注記から文献成立時には既に存在しなかった集落もある。また、琉球最古の総合地誌『琉球国由来記』に記載される間切城内の御嶽(ウタキ)も集落形成を考える際に多くの示唆を与えてくれる。これまでの踏査でも町内各地で近世の遺物採集地点を確認しており、古島遺跡や鍛冶屋跡等として報告しているが、なかには『由来記』にある御嶽やその隣接地で遺物散布を確認した箇所もある。しかし、前代のグスク時代もあわせて現集落以前の古集落の様相に関する情報・資料はまだ断片的であり、今後の調査研究に委ねられる部分も多い。

一方、山地や丘陵地が顕著で「やんばる(山原)」とも通称される本島北部地域において、18世紀前半～中頃に確立した^{キヌ}山^{タテ}の存在は無視できない。金武間切域において杉・イタジイ・松等を植林した仕立山の面積は本島北部でも有数の規模であったことが明治期の統計資料等から窺え、後にも触れるように、億首川周辺においてもその名残を認める*。

明治以降 近世末～明治期では、幕末に来琉したペリー艦隊一行の探險記録や廃藩置県直後1881・82(明治14・15)年の上杉県令の地方巡察時の記録『上杉県令沖繩県巡回日誌』、1893(明治26)年の旧津軽藩士笹森儀助の探訪記録『南嶋探検』等に詳細な記述があり、当時の金武間切や億首川周辺の諸様相も垣間見ることができる。近年、恩納村山中や名護市久志大川流域など本島北部の丘陵地帯における諸生産活動の痕跡(生産遺跡)も報告されており、本町でも調査情報の蓄積が望まれる。

太平洋戦争末期の1945(昭和20)年3月、米軍による空爆の本格化で本島中南部から多数の避難民が北部へ移動、4月米軍が本島上陸後、国内最大規模の地上戦(沖縄戦)が展開され、金武村でも少なからぬ戦禍を被った†。

終戦後、恩納岳周辺をはじめ内陸側一帯が軍用地に接収、基地建設で景観は著しく変貌したが、住民の努力で戦後復興及び産業基盤の整備は進み、基地関連産業の活況等により人口も急増した。その後本土復帰を経て、1980(昭和55)年に町制施行され、現在に至る。

第3節 億首川周辺と与那原の海上交通

金武町文化財保護審議会 池原 隆

3.1 はじめに

柚木制度の確立期にあたる18世紀前半、国頭地域諸間切の林材移入のため与那原港が整備された。首里那覇を後背地とする与那原と「やんばる」（本島北部）の海上交通は、金武・久志及び国頭間切域の東海岸の各村の津口との間で行われた。そのひとつが金武間切の億首川流域である。

億首川中流域の億首では琉球王府時代には丸木橋が、昭和戦前期にはコンクリートブロックを用いたアーチ橋が架かり、戦後は鉄橋、コンクリート製桁橋が架かって陸上交通の要衝としての役割を果たしてきた。この川が近世以来、本島南部の与那原地域との海上交通の拠点であった事実はわずかに口碑に残るだけである。

本稿では、文献資料や伝承される古地名及び民俗情報を手掛かりに、億首川流域と与那原との海上交通についての事例を記述することを通じ、第V章の生産遺跡群や第VI章の交通遺跡群では触れることのない億首川流域と人々との関わり方を補足する。

3.2 文献にみる海上交通と山林政策

3.2.1 戦前新聞資料にみる与那原との関係

—「久志金武両村対与那原民対抗」『琉球新報』
明治41年5月11/13/23/24日—

島尻郡与那原の人びとは旧藩時代から今日まで金武、久志、国頭と物資の交換をなし利便を図ってきた。ところがその関係が最近おかしくなってきたという意味の書き出しで始まる一連の記事がある。

それによれば旧藩時代は久志、金武の両間切の村々はそれぞれ共有の船を持っていたが、廃藩置県後、船舶輸送は与那原の人びとの専らとするところとなる。

金武、久志の村々からこれまで一束二銭で渡していた薪を柚山払い下げの結果その代金を払わな

ければいけないという理由で与那原にたいして二厘の値上げを通告してきたというのである。

これに対して与那原の船持ちとは現在でも需要の多い首里の造酒屋は薪の代金が高いということで燃料を石炭に替えているところがあるので今回の値上げでは到底立ち行かないという理由で不買同盟という対抗手段に出た。

不買同盟は製塩業の多い現沖縄市域の泡瀬にも飛び火する。結局この問題は島尻郡長と国頭郡長の斡旋により二銭一厘で落着きを見る。

最終的にはこの妥結をみることになったが、この一連の出来事は、両地域経済の相互依存の強さを示すものと考えることができる。明治41年の与那原と金武、久志の状況を示す記事である。

3.2.2 与那原と山原東海岸との交易品目

—「与那原港の輸出入高」『琉球新報』
明治35年1月17日—

『沖縄県史16-新聞集成(政治経済1)-』(p.362)に、明治34年1月から12月までの与那原港の輸出入高の記事が再録されている。どの品目がどれだけ億首川に運ばれてきたか不明であるが、参考のために品目だけを列挙する。

輸出 焼酎、素麺、茶、白米、昆布、食塩、大豆、石油、石灰、味噌、甘藷、豚
輸入 薪木、イーク木(モッコク)、イークチ(イークの垂木)、雑柱木、雑キチ、真竹、竹茅、木炭、樽板、製塩、エリッス(詳細不詳)、砂糖、島餅
『並里区誌』の記述で補足すると、昭和の初め頃に与那原から金武に入ってきた品目は日用雑貨、昆布、素麺、茶、反物、酒等で、移出品は黒糖、ヤマダギ(いわゆるヤンバル竹)、メイジダムヌ(販売用薪)、藁等があげられており、やはり相互に強い経済関係で結ばれていたことがわかる。

3.2.3 蔡温の山林政策

蔡温の登場によって初めて琉球王府の山林政策が本格的に始まる。蔡温の時代には既に本島中

南部の森林は切り倒され山の体をなしていなかった。蔡温は杣山の管理について七つの令達を出した。いわゆる林政八書である。林政八書とは蔡温の三司官時代に出された七つの法令と明治2年に出生された令達を加えた以下の文書である。

1. 杣山法式帳 (1737年)
2. 山奉行所規模帳 (1737年)
3. 杣山法式仕次 (1747年)
4. 樹種播植方法 (1747年)
5. 就杣山惣計条々 (1748年)
6. 山奉行所規模仕次 (1751年)
7. 山奉行所公事帳 (1751年)
8. 御指図控 (1869年)

杣山法式帳が山林政策の基本法であるとするならば以下出生したのは、それを実施するための令達である。その内容は林政の基本方針、職務、造林の方法、抱護、管理、罰則等からなる。

蔡温は山の管理体制をしき、人を配置した。山奉行、山筆者、総山当、山当、山師、山工人である。これにより御用木を指定し台帳に登録し山師、山工人の指導の下、村々の百姓にその管理をさせた。

蔡温の山林政策は琉球王府時代を通じて実施され、明治期以降、昭和35年頃までそのある部分は生きて有効に機能していた。山係、ヤマビサ、ヤマブー、ヤマフダ、入林許可などの言葉からおして慣習として残っていた。それを仕切るムラヤー（村屋）、アザジムショ（字事務所）、クジムショ（区事務所）などと呼び名は変わっても制度は生きていた。

3.2.4 与那原の金武、久志地

与那原に金武間切の材木置き場があったことは人々の知るところである。この場所は享保の頃（1727年）金武間切、久志間切からの林産物の集積所として王府によって設置されたが、土地の造成は与那原村の人々によって行われた。

『近世地方経済史料第10巻』（pp. 278-279）に享保の盛増の時の盛増差免の次の記事がある。

大里間切與那原村へ金武久志両間切材木置所分差免

この記録は与那原村の人々がこの土地を造成するために費やした労力に対する租税負担の軽減として捉えることができる。この記事から王府が金武・久志両間切からの林産物の移入に大きな関心を払い、具体的な施策を展開していたことが窺える。蔡温が杣山法式帳を出す10年前である。

『与那原町史-序説・むかし与那原-』においても「海岸から奥へ漢那小路を挟んで金武地、久志地があった」と記述されるこの場所は、現在では海岸沿いの堤防に近く、戦後の倉庫らしき建物が並んでいる。沖縄海外移民の先駆者で知られる金武村出身の富山久三は移民代理人を辞した後、与那原で酒造所を営んでいた。県会議員であった彼は亡くなるまで彼地に住んでいた。没後、遺骸は山原船^{*}で金武に送られてきた。

3.3 億首川流域の山と地名

かつて金武間切を二分して現在の宜野座村の地域を上村（ウィームラ）、金武町の地域を下村（シチャムラ）と呼んでいた。金武間切の杣山は間切内の各集落に割り当てられていた。伊藝のヤマ、屋嘉のヤマ、金武のヤマ（シンブラヤーマ）、並里のヤマ（ナンザトゥヤーマ）といった具合である。ここでは億首川流域のナンザトゥヤーマを中心に稿を進めていく。

3.3.1 億首川流域の山

億首川周辺の山々は、その殆どはナンザトゥヤーマと呼ばれる杣山と並里のムラヤマ（字山）、個人所有の山からなっていた。

流域の主な小字 小字奥首原のくびれた場所から北側半分、木登代原・志那田原・富名田原・比嘉原・名古川原の一帯に並里の杣山があったといわれている。幸地原の南側の高まりはウヤギヤーマと呼ばれ、並里のムラヤマであった。

杣山とムラヤマの管理は王府、間切番所の指導

12 * 戦前まで那覇や与那原など本島中部と、今帰仁村連天や国頭村奥などの北部、いわゆる山原地方とを往來した交易船のこと。

で百姓が夫により山養生（造林撫育）の仕事に携わっていた。（山の仕立て、下草を払う、枝打ち、御用木の搬出など。御用木、楷木など重要な木は使用目的別に樹種、木の大きさ〈幹周〉などを毎年台帳に記録するようになっていた。）

村人の山との関わりは、このような王府管轄の柚山管理だけではなかった。百姓の使う木炭、薪、家屋の用材、舟、臼、杵、砂糖車の台、鋏、鎌の柄、桶、砂糖樽、桶や樽の箍など御用木にならないものから調達されていた。

3.3.2 流域の山仕事と船舶輸送に関わる地名

ヒラシクチ 億首川河口に面したイーノ（礁池）の干瀬（岩礁）にある割れ目で山原船の出入口になっていた。このような割れ目は山からの真水が流れ込むことによって珊瑚礁が発達せずできたといわれている。ウブシで一番大きなクチだといわれている。

福花原のフナヤ 漢字を宛てると船屋となろうか。億首川の最も下流の狭まった所で深みになっており、山原船が潮の干満にかかわらず常時停泊できた。ヤマクモーに隣接して山林材の積荷や風待ち、汐待ちの場所であった。富蔵港という言い方もかつてはなされた（『中山伝信録』）。フックワンドトウという言い方もされた（「フックワンドトゥぬアジョムヌスドゥが高石ヌブトゥティスビヤムッカラヒッカラ」という俗語がある）。山原船の港にはヤマク（山仕事）の場所から直接林産物を山原船へ積み込める所とそうでない所がある。フナヤは積み込みの利便性の良い場所である。現東村（旧久志間切）の大抵の船着場は浜辺で、テンマ（伝馬船）*のはしけを使って林材の積み込みや与那原からの雑貨の荷降ろしを行っていた。

福花原のヤマクモー 与那原行の山林材の荷作り、集積の場所。億首川を利用して運び込まれ加工された。上流から満潮の時にテンマを利用して運ばれたものと思われる。伐り出した木自体で筏

を組んで流したという人もいる。山工とは蔡温の出した示達に基づき柚山養生の作業及び指導にあたった地元百姓である。ヤマクモーの地名はそれによって由来するものと思われる。東村立山と水の生活博物館の資料によれば手斧等を使って建築材に加工することを山工という。

奥首原のヤマクモー 戦後のウクビ橋（旧億首橋）の辺りにあった。上流から運ばれてきた木を販売用のタムヌ（薪）や建築材等に荷造りをする場所。

奥首原のフナヤ 旧億首橋の手前付近にフナヤがあった。ここまで山原船が遡航し、ここから与那原への林産物が積み出された。『琉球国旧記』では大久辺港と記載されており、王府時代からここが重要な港であったことが窺える。

比嘉原のヤマクモー 地元で正一橋と通称される辺りまでテンマ（伝馬船）が遡航できたと言われ、テンマに積み込まれた伐採木がここで加工され林材となった。比嘉原の田圃の辺り。

3.4 小結

- ・億首川流域と与那原との海上交通は主として流域の林産物の移出を目的として行われた。近代以降は与那原からの雑貨を積み込み、地域にもたらした。
- ・蔡温の山林政策の中で地域の百姓は造林撫育、山養生、林材の搬出などに関わってきた。1950年代まではその制度は地元の慣習として生きていた。
- ・与那原の金武・久志地の造成は王府の政策であった。
- ・億首川は林材の搬出の条件に恵まれていた。
- ・ヤマクモーは林材加工の拠点であり、フナヤは搬出の拠点であった。

* ティンマともいう。ハギ舟のうち竜舟（カール）がある小型のものを指す。



図 2.5 徳首川周辺のハル（小字）及び古地名

第三章 調査手法及び遺跡名称の整理

第1節 地区設定、調査及び資料整理の手法

今回、調査対象地域とする億首川は、源流から喜瀬武原盆地周辺にかけての上流域、現金武ダム貯水池周辺の中流域、ウクビ(奥首)の地名をもつ川の最狭部から河口までの下流域に区分される。今回の調査ではウクビを地区区分上の境界とし、中流域までを「上流周辺地区」に包括、ウクビから下流域を「下流周辺地区」とした(図3.1)。

上流周辺地区は、かつてフクヂと呼ばれた盆地状の谷底低地(現金武ダム貯水池)の周辺に広がる、丘陵主体の地域である。本島北部地域における過去の調査事例等から、耕地跡や猪垣・炭焼窯等の主に近世～近代の生産活動に関わる遺構(いわゆる生産遺跡)の分布が予想される。

尾根丘陵と、沢や谷(方言でいうサーク)とが繰り返す地形で、軍用地に接収後永く人為的な関与も殆ど無いため雑草雑木の繁茂も著しく、踏査可能な範囲は限られたものであった。伐採後に踏査を行うのが安全面及び調査精度の観点でも望ましいが、対象範囲が広域であることに加え、野生動植物の貴重種確認との兼ね合い、急斜面における土砂流出の懸念、伐採に係る関係機関との調整等の面から現実的ではなかった。そこで県内の過去調査事例の手法等を参考にしながら、踏査による確認作業は以下の2段階方式を基本とした。

①概要踏査

伐採を行わずに歩行・目視が可能な範囲で踏査

(詳細な観察を要する範囲は、貴重種確認を実施)

②詳細踏査

伐採を伴う重点的な踏査

上記の概要踏査が困難な場所でも、その後の工事等に伴う伐採段階で初めて現地確認できた場所もあった。

億首川下流周辺では、従前の踏査により7カ所の遺跡・遺物散布地が確認されているが、遺跡の性格や残存範囲等、追補すべき情報も多い。まず当時の調査状況も踏まえつつ現況把握に努めた後、地権者の同意を得られた地点で伐採を伴う詳細踏査や試掘調査を実施した。

資料整理 これまでに把握される周知の遺跡・遺物散布地の殆どが1982年踏査以前に確認されたものであり、



図3.1 調査対象地域の地区区分



012 概要踏査風景(億首川上流周辺)
013 詳細踏査に伴う貴重種確認(同上)

写真3.1 調査風景

帰属年代観等も当時採集された土器等に拠っている。

今回踏査や試掘調査を行った遺跡・散布地について、検証及び理解を深める意味も含めて、当時の採集遺物についても実測図作成等を行い掲載することとした。

* 例えば、恩納村南恩納山中の沖縄科学技術大学院大学(仮称)建設予定地における予備調査など(沖縄県立埋蔵文化財センター2005)

第2節 遺跡名称の整理

金武町の遺跡情報は1960年代の多和田^{*}のレポートが初出である。この時期は、沖縄先史時代の編年が研究の主眼であり、遺跡所在の積極的な網羅の機運は未成熟であった。

高度経済成長期に入ると仲泊遺跡の保存に代表されるように、沖縄でも開発と遺跡保護の調整の必要性が大きくクローズアップされるようになる。また、本土復帰により文化財保護の法制度も本土と同一となり、埋蔵文化財の悉皆把握が急務となった。本町でも全国レベル・県レベルでの遺跡分布調査が実施され、その成果が1967～79年にかけて報告されている[†]。この段階では、新たに6カ所の遺跡が把握されているが、十分な調査が実施されたとはいえ、充実した調査成果の獲得に向けた動きが待たれた。

1982年、県内大学の学生たちの手によって、懸案であった町内遺跡分布に関する調査が実施され、これによって本町でも保護を目的とした遺跡の所在情報の一元把握が実現した。この基礎的な調査成果に基づき、1990年、本格的な遺跡分布調査が行われ、

この段階で町内28カ所の遺跡が学術的な裏付けのもとで確認され、開発との調整のための基礎情報として今日まで活用されている。

遺跡所在に関する情報が充実していく一方、遺跡の名称に関するエラーの発生が目立ってきた。遺跡名の度重なる改称、不適切な地域名の採用などである。度重なる改称については、「宮城原遺物散布地」を例にすると現在の名称にいたるまで並里貝塚「金武村並里貝塚」「並里遺物散布地」といくつかの変遷をたどっている。不適切な地域名の採用では、小字飛留喜田原に所在する遺跡に全く別地点の小字名を冠して「池原遺物散布地」とするなど錯誤に基づく命名もみられる。

このまま放置すれば遺跡の名称に整理がつかなくなるばかりでなく、文化財保護の施策にまで混乱をきたしかねないと考え、これを機に、遺跡名のつけ方に関するルールを策定し、下図(図3.2)にまとめた。本町教育委員会では、本報告書以降、この秩序だった遺跡名称を用いることとする。

ルール		例
基本原則	原則適用	遺跡名 = 【地名】 + 【遺跡の種類名】 必要に応じて地名と遺跡の種類名の間に「の」をつけることができる
	原則適用	先謝原遺物散布地 並里の戦治原跡
	適用除外	除外ケース 処理
【地名】に関するルール	適用除外	地域において根付いた呼称があり、原則適用により却って混乱するおそれがある場合 地域で根付いた呼称を採用する
	原則適用	原則として小字名(●●原など)を漢字表記でつける
	適用除外	不整合の懸念 処理
	適用除外	原則適用で同名の遺跡となる場合 遺跡名に部地名を冠する
	適用除外	複数の小字に跨る場合 遺跡の大部分を占める小字名を採用する
	適用除外	除外ケース 処理
【遺跡の種類名】に関するルール	適用除外	地域で呼び慣らわれている、特定の範囲を指す小地名・古地名がある場合 その小地名・古地名を採用する
	適用除外	小字名より部地名で表記する方が適切な場合 部地名を採用する
	原則適用	原則として奥の2つうちのいずれかをつける
	適用除外	遺跡 遺物散布地
	適用除外	遺構、または遺物調査が過去に一度でも確認された場所。発掘調査による遺構、発見的な確認など確認の態様を問わない
	適用除外	遺構、または遺物調査が確認されていないが、過去に一度でも地表面から遺物が採集されたことのある場所
【遺跡の種類名】に関するルール	適用除外	「沖縄県埋蔵文化財発掘調査基準」(2006年 沖縄県教育委員会)の別表1および2に掲載される遺跡の種類により適切に遺跡を表記することが可能なもの
	適用除外	当該別表1および2の中から適切なもの(またはそれに準ずる町内での呼称の表記)を採用する

図3.2 遺跡名称の整理

16 * 多和田真淳「琉球列島の貝塚分布と編年の概念補遺」1960年、「琉球列島における遺跡の土器、須恵器、磁器、瓦の時期区分」1961年
 † このうち、1967年刊行の『沖縄県の遺跡分布地図』については、1977年の『沖縄県の遺跡分布』の中で書誌情報を確認したが、本報告書作成時点において、それ以上の情報を得ることができなかった。

[illegible]

- | | | |
|----------|-----------|------------|
| 1 池田運動場 | 11 穴川運動場 | 21 伊豆ヶ原運動場 |
| 2 西光運動場 | 12 トムコ運動場 | 22 伊豆ヶ原運動場 |
| 3 緑が丘運動場 | 13 青木運動場 | 23 伊豆ヶ原運動場 |
| 4 高尾運動場 | 14 青木運動場 | 24 伊豆ヶ原運動場 |
| 5 高尾運動場 | 15 青木運動場 | 25 伊豆ヶ原運動場 |
| 6 高尾運動場 | 16 青木運動場 | 26 伊豆ヶ原運動場 |
| 7 高尾運動場 | 17 青木運動場 | 27 伊豆ヶ原運動場 |
| 8 高尾運動場 | 18 青木運動場 | 28 伊豆ヶ原運動場 |
| 9 高尾運動場 | 19 青木運動場 | 29 伊豆ヶ原運動場 |
| 10 高尾運動場 | 20 青木運動場 | 30 伊豆ヶ原運動場 |

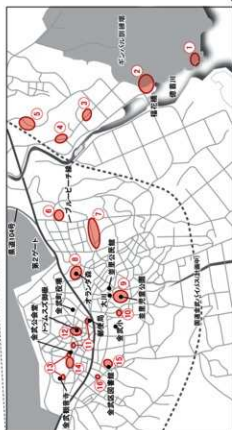
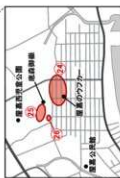
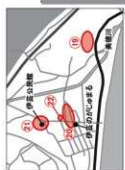


図 3.4 町内における道路の分布状況



図 3.5 調査対象地域（徳首川流域）の遺跡・遺物散布地

はじめに

本町の遺跡が旧来から把握されていた8カ所よりずっと多い28カ所であると分かったのは、1982年、県内大学考古学研究サークルの活動（以後、「82年踏査」という）の成果によるものであり*、そのレポートが「金武町遺跡概要書」（以後、「82年概要書」という）としてとりまとめられている。

この概要書の成果を、学術的に裏付けるため、1988～89年県教育庁文化課の協力を得て、28カ所の遺跡の概要調査が実施された（以後、「旧予備調査」という）。その成果は、1990年に『金武町の遺跡—遺跡詳細分布調査報告—』（以後、「90年報告書」という）として報告されている。それから20年近く経った現時点におけるこれらの遺跡の現状を把握し、より詳細に遺跡の実態解明を図るため、今回、特に開発の圧力が高まりつつある億首川下流域を中心として改めて予備調査を行った。本章ではこの予備調査の結果を、調査地ごとに報告する。

第1節 先謝原遺物散布地

億首川河口の北側には、ギンバル訓練場として米軍に使用されている標高約20～40mの台地が広がる。本遺物散布地はその南端にある河口の砂浜に位置する。

82年踏査で採集された遺物は、わずかに4点、いずれも土器の小破片であり磨耗が激しいため、原位置から流出したものと思われる。旧予備調査時点では、遺物は採集されていない。今回の踏査でも深い茂みに阻まれ踏査困難で、遺物を見つけることはできなかった。

これまでに採集された遺物の起源である遺跡は離れた場所にある可能性が高く、また年代特定には至っていない。

第2節 西先謝原遺物散布地

本遺物散布地は、さらに上流の西先謝原にある福花橋のたもとに位置し、ギンバル訓練場のある台地から下ってきた沢が億首川と交わる場所である。

今回の調査では福花橋の周辺に人力及び重機による掘削で5カ所の試掘坑を設けた。

層序は、図4.1（p.21）に記した基本層序では細分されているが、要約すると以下になる。

- ①客土 基本層序1・2層に対応
- ②砂質土層 3～6層に対応
- ③砂層 7層に対応
- ④地山 8層に対応

出土遺物は縄文時代相当期及び、弥生～平安時代



014 先謝原遺物散布地現況近景
写真 4.1 先謝原遺物散布地現況近景



015 西先謝原遺物散布地 現況近景
016 詳細踏査作業風景
写真 4.2 西先謝原遺物散布地 現況及び踏査風景



017 試掘坑 01 北壁及び東壁 018 試掘坑 01 北壁
020 試掘坑 02 東壁 019 試掘坑 02 掘削作業風景
022 試掘坑 03 東壁 021 試掘坑 02 南壁
023 試掘坑 04 北壁

写真 4.3 西先謝原遺物散布地周辺試掘調査風景

並行期の土器破片、また、磨石や叩石等の石器がみられた。

旧予備調査及び82年踏査では福花橋の近くで縄文時代相当の有文土器口縁片と若干の無文土器片が採集された。

これらの調査結果により本散布地の年代は縄文時代相当期、弥生～平安時代並行期と考えられる。

本散布地は先謝原遺物散布地と同様、採集遺物の起源すなわち遺跡の本体が採集地点から離れた場所にある可能性が大きい。遺物の出土状況を見ると、②から縄文時代相当期の土器と弥生～平安並行期の土器が出土し、その下の③からは弥生～平安並行期の土器のみが出土している。つまり上の層から古い土器と新しい土器が一緒に出土し、下の層から新しい土器のみが出土しており、層序と遺物の年代が整合していない。従って、本散布地の地層は、別の場所から滑動して堆積した崩積土（二次堆積物）であると判断できる。

なお、石器は重機掘削で出土した砂からの採集であり、出土した層が不明なため本散布地の年代を判断する材料としなかった。



024 土器出土状況（試掘坑 01、7 層）

025 土器出土状況（試掘坑 02、基盤直上付近）

写真 4.4 西先謝原遺物散布地 遺物出土状況

表 4.1 西先謝原遺物散布地 採集・出土遺物観察表（土器）

図版 番号	種類	出 土 地 点 層	器 種 部 位	観 察 結 果	備 考	
図 4.2 01	土 器	表面採集	深鉢形 口縁	縦・横・斜めの文様を施文 口唇も短文様が一本 表面淡褐色 裏面茶褐色	石灰質砂粒、植物粒を混入 両面とも指痕によるナデ	82 年踏査
図 4.2 02	土 器	表面採集	深鉢形 口縁	横ならびの 3 段の深い斜突文 工具は鹿状工具 両面とも茶褐色	石灰質砂粒、植物粒を少量混入 表面指痕のナデ 裏面は工具による横方向の調整	82 年踏査
図 4.2 03	土 器	表面採集	深鉢形 胴部	棒状工具による横方向の浅線文 表面黒褐色 裏面暗褐色	石灰質砂粒、植物粒、平状石を混入 両面とも指痕によるナデ	82 年踏査
図 4.2 04	土 器	試掘坑 01 掘削土係集	深鉢形 口縁	無文 磨耗が著しい 表面赤褐色 裏面暗褐色	細かい石灰質砂粒を含む 両面とも指痕によるナデ	
図 4.2 05	土 器	試掘坑 01 掘削土係集	深鉢形 口縁	無文 裏面に輪状接合部がよく残る 表面暗褐色 裏面に灰黄色	混和材は石灰質砂粒のみ少量 両面とも指痕によるナデ	
図 4.2 06	土 器	試掘坑 02 7 層	深鉢形 口縁	口縁が若干外反 裏面の磨面調整で「く」の字状に屈曲 両面とも黄褐色	植物粒、石灰質砂粒、角閃石が含まれる 表面指痕によるナデ 裏面は工具による横方向の調整	
図 4.2 07	土 器	試掘坑 01 掘削土係集	深鉢形 口縁	無文 表面暗赤褐色 裏面暗褐色	混和材は石灰質砂粒、植物粒を微量に含む 両面とも工具による調整 部分的に指痕圧痕が残る	
図 4.2 08	土 器	試掘坑 01 掘削土係集	深鉢形 口縁	無文 表面暗褐色裏面暗褐色、断面が黒色でサンドイッチ状	混和材は石灰質砂粒、赤色粒、角閃石微量を含む 両面とも指痕によるナデ	
図 4.2 09	土 器	試掘坑 01 掘削土係集	— 平底	底内面に調整痕が顕著 表面暗褐色 裏面赤褐色	混和材は石灰質砂粒、植物粒 両面とも指痕によるナデ	
図 4.2 10	土 器	試掘坑 01 掘削土係集	— 平底	粘土の接合部より破壊 表面明赤褐色で立ち上がり部分・断面中央は黒褐色	混和材は石灰質砂粒、植物粒 両面とも指痕によるナデ	

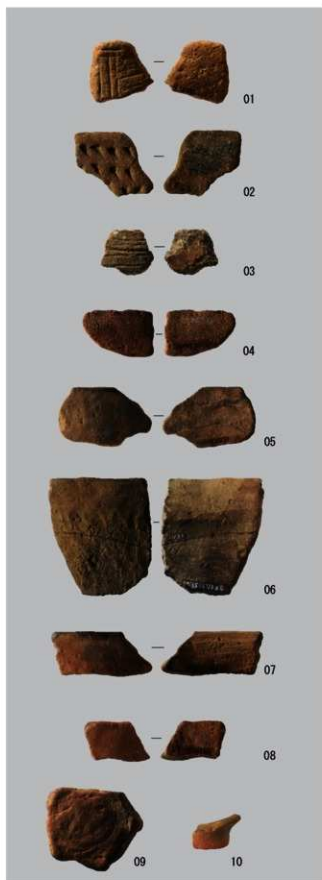
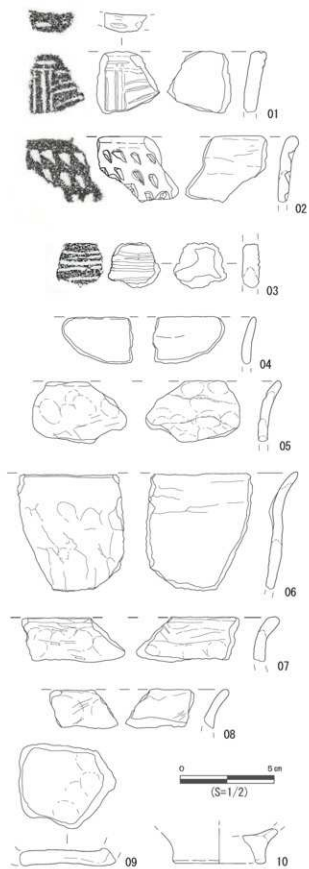


圖 4.2 西先謝原遺物散布地 採集・出土遺物（土器）

表 4.2 西先謝原遺物散布地 採集・出土遺物観察表（石器）

図版番号	種類	出土 地 点 層	器 種 部 位	観 察 結 果	備 考
図 4.3 11	石鐮	試験坑 03 棚州土係集	磨石	正面・両側面・上下部を使用 砂岩	全体的に軽微な研磨調整がみられる
図 4.3 12	石鐮	試験坑 03 2層	すり石兼磨石	正面・両側面・上下部を使用 全体的に研磨されるが使用痕は見られない	下部の使用痕周辺は薄く剥離する 底岩
図 4.4 13	石鐮	試験坑 03 棚州土係集	くぼみ石兼磨石	表面の中央部にのみ窪みあり 表面の一部に研磨面あり	磨打調整は全体的にまばらにみられる 底岩
図 4.4 14	石鐮	試験坑 01 棚州土係集	すり石	表面は自然剥離 粘板岩	両側面・上部に研磨面あり
図 4.4 15	石鐮	表面採集	石斧?	残部の形から石斧か? 石英斑岩か?	中央に磨打調整あり 研磨は弱い
図 4.4 16	石鐮	表面採集	すり石	左側面は破壊 磨り面は使用痕・研磨痕は観察されない	右側面・上下部は細く丁寧な磨打調整がなされる 石英斑岩

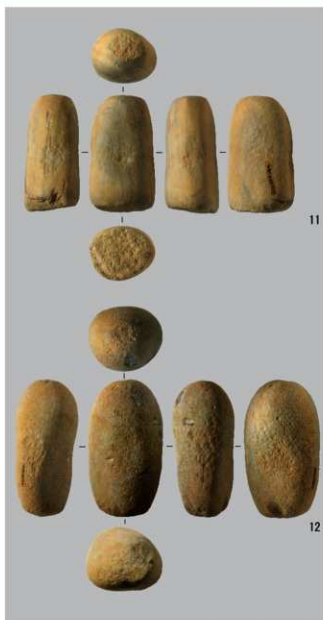
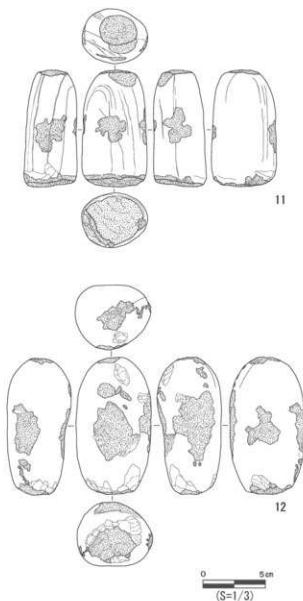


図 4.3 西先謝原遺物散布地 採集・出土遺物（石器）

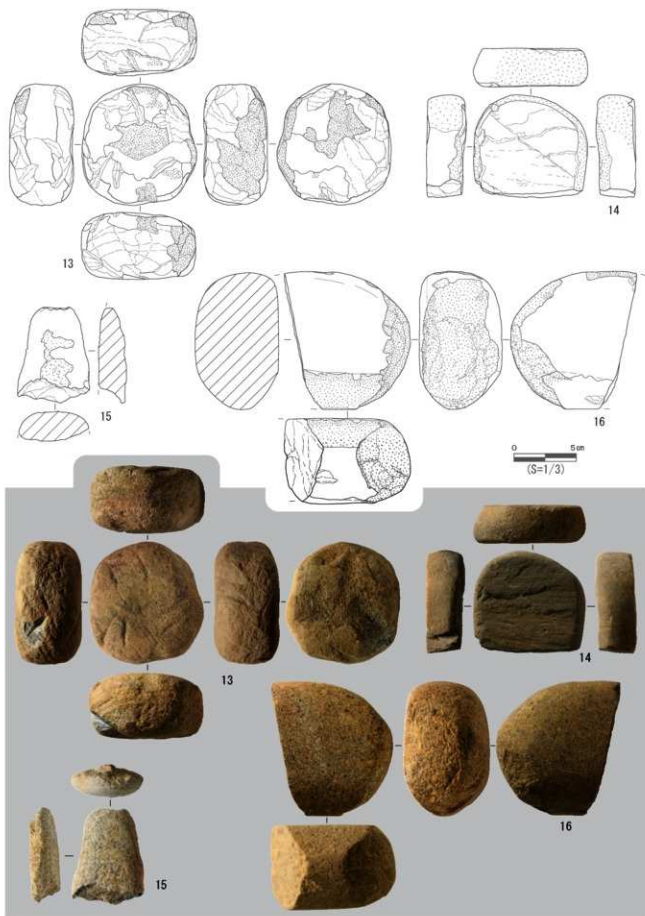


圖 4.4 西先謝原遺物散布地 採集・出土遺物（石器）

第3節 頭呂地原遺物散布地

本遺物散布地は、西先謝原遺物散布地のさらに約 500 m 上流の頭呂地原にある。散布地一帯は現在、土地改良された田畑が広がっている。

82 年概要書で、本散布地において貝塚時代前期（縄文時代後期相当）を含む土器が採集されたと報告されているが、旧予備調査では、その一帯が土地改良によって客土されていることが報告され、いわゆるアカムヌーがわずかに 1 点採集されているだけである。そこで今回の予備調査では、客土されていない場所での遺物採集を主眼とした。しかし、現時点においては、客土された範囲を目視で確認することは適わず、土器もまったく採集されず、所期の目的を達成できなかった。

今後、本遺物散布地の調査に際しては、客土の状況を把握する必要があるため、少なくとも試掘調査が必要である。

第4節 飛留喜田原 A 遺跡

本遺跡は頭呂地原遺物散布地の約 250 m 上流に位置し、飛留喜田原に所在する。

82 年踏査の際、採石工事の破壊を免れた遺物包含層の一部が農道脇の法面で確認され、弥生～平安並行期の土器破片や貝殻片が採集されている。



026



027

026 頭呂地原遺物散布地 現況近景
027 飛留喜田原 A 遺跡 詳細踏査風景

写真 4.5 頭呂地原遺物散布地、飛留喜田原 A 遺跡近景



図 4.5 飛留喜田原 A 遺跡周辺 試掘調査地点

今回の調査では、まず農道脇の法面付近の下草を刈り払い詳細踏査を実施したが、期待された遺物包含層は確認できなかった。

続いて農道脇法面の上方に接する平場で試掘可能な場所を選び試掘坑を2カ所設定した。この平場は、以前に採石工事によって造成されたものだが、造成面より下位に包含層が残存していないか確認するためである。試掘調査の結果、平場を所定の高さにするため

の石灰岩礫混じりの盛土のみがみられ、包含層を確認することはできなかった。出土した数点の遺物も盛土とみられる層からであり、本遺跡の新たな情報を得ることはできなかった。

今回の試掘調査では、填圧を受けた石灰岩礫混じりの固く締まった盛土を人力掘削することとなったため、十分な深度まで掘り下げることができなかった。今後あらためて機械等を併用した確認作業が必要である。



028 試掘坑 01 東壁
030 試掘坑 02 東壁
032 試掘地点周辺測量作業風景
029 試掘坑 01 東壁（部分拡大）
031 試掘坑 02 東壁（部分拡大）
033 試掘地点に残る採石場の名残

写真 4.6 飛留喜原A遺跡周辺 試掘調査風景

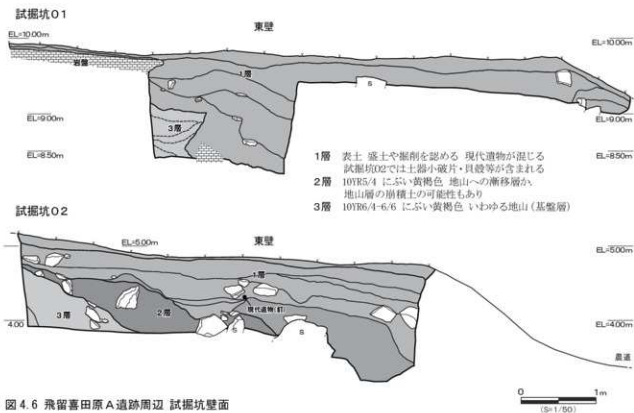


図 4.6 飛留喜田原 A 遺跡周辺 試掘坑壁面

表 4.3 飛留喜田原 A 遺跡周辺 出土遺物観察表

図版番号	図 4.7 17	図 4.7 18
種類	石器	貝製品
出土地点	試掘坑 02	試掘坑 02
出土層		
器種部位	すり石	有孔貝製品
観察結果	破損が著しいため原形不明 細かい彫打調整と研磨面がみられる 砂岩	貝種はマガキガイ 外唇部分に 15 × 17mm の隅丸方形 状の孔が穿孔される
備考		



写真 4.7 飛留喜田原 A 遺跡周辺 出土遺物

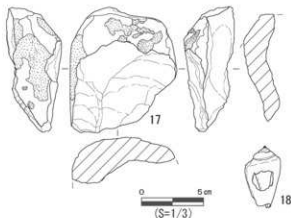


図 4.7 飛留喜田原 A 遺跡周辺 出土遺物



第5節 飛留喜田原B遺跡

旧予備調査において土器、青磁、陶磁器が、82年踏査ではこれらの遺物に加えてカムイヤギが、億首川左岸の台地上、中川部落の南側の地点で確認され、池原遺物散布地（本書より飛留喜田原B遺跡に改称）として報告された。

その後、2006～2007年に沖縄国際大学考古学研究室によって発掘調査（第1・2次）が実施されている。その際の出土遺物は概ね旧予備調査で採集された遺物と同様な内容で、弥生～平安並行期及びグスク時代の遺物であるが、縄文時代晩期相当とみられる遺物も若干ではあるが、新たに確認され、本散布地の調査の重要度が高まった。しかし、この調査では、調査区のかんりの範囲で後世の撹乱を受けた状況を認め、遺跡の実態に迫るにはなお課題が残されることとなった。

今回の試掘調査は撹乱を受けている遺物包含層の確認と同時に散布地の広がりを確認するため、現在把握している範囲の外で、重機による掘削によって3カ所の試掘坑を設けた。その結果、2つの試掘坑では地山まで撹乱が及ぶが、北側に設定した試掘坑01では撹乱が地山にまで及ばず、弥生～平安並行期とみられる遺物包含層の残存を確認できた。これにより、本散布地は従来の推定範囲より広がることも予想される。また、試掘調査地の一部は南東側が高く北西側が低い、傾斜した地形であるが、やや高所にある沖縄国際大学調査地点では包含層が撹乱され、今回の試掘調査を行った低地では未撹乱の包含層を認めたことから、今後は低所での試掘が重要な意義をもつと思われる。



035 試掘調査地点近景
036 試掘時作業風景

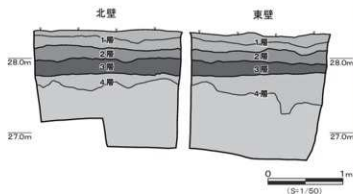
写真 4.8 飛留喜田原B遺跡周辺 試掘地点及び作業風景



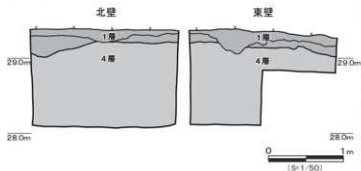
図 4.8 飛留喜田原B遺跡周辺 試掘調査地点

沖縄国際大学考古学研究室2008年一部加筆の上、今回試掘箇所を追加

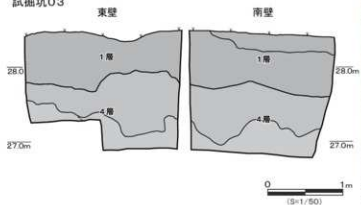
試掘坑01



試掘坑02



試掘坑03



- 1層 表土・耕作土 後世の掘削等の影響を認める層
下層の土が塊状に入る
2層 10YR4/6 褐色 しまり中程度 掘削等の擾乱はみられない
旧表土とみられる
3層 10YR3/3 暗褐色 しまり良 試掘坑01でのみ確認
壁面精査で遺物を認めなかったが 表面及び掘削土採集
の土器片等は当該層に絡着する可能性もあり
4層 7.5YR3/2 黒褐色～10YR5/8 黄褐色 地山



037



038



039

037 試掘坑 01 北壁及び東壁

038 試掘坑 02 東壁

039 試掘坑 03 南壁

写真 4.9 飛留喜田原B遺跡周辺 試掘坑壁面

図 4.9 飛留喜田原B遺跡周辺 試掘坑壁面

表 4.4 飛留喜田原B遺跡周辺 出土遺物観察表

図版番号	図 4.10 19	図 4.10 20
種類	土器	土器
地点	試験坑 03	試験坑 03
出土層	層間土埋集	層間土埋集
器種	平底	平底
観察結果	小皿 内面は指でおされ丸み 延物粒、石灰質砂粒、チャート を含む 表面明褐色、裏面明赤褐色 隅 部は黒面とも指痕によるナデ	若干磨耗 延物粒、石灰質砂粒混入 隅部は黒面とも指痕によるナデ 表面明褐色、断面中央は暗赤褐 色でサンドイッチ状
備考		

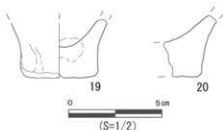


図 4.10 飛留喜田原B遺跡周辺 出土遺物

第6節 宮城原遺物散布地

本遺物散布地(並里遺物散布地から改称)は億苗川の右岸、標高約 50～60m の琉球石灰岩台地上の端に位置し、小字宮城原に所在する。

82 年概要書では土器片、石器、陶磁器類が報告され、90 年報告書で沖縄貝塚時代後期(弥生～平安時代並行期)から近世までの複合遺跡と報告した。改めてそれらの遺物を確認すると、採集された量自体少なく、石器を除き全て小破片であり、また土器片についても口縁部や底部あるいは施文部位など時期判断の材料となるものが乏しいことが分かった。しかしながら、採集土器の胎土を観察すると、縄文時代相当の土器と思われるもの、弥生～平安並行期の土器と思われるものの二者が含まれることが確認された。また、陶磁器類では近世のものだけでなく、近代の碗も含まれており、さらに、グスク時代の遺物である中国産磁器やカムイヤキなどは含まれていないことも確認された。

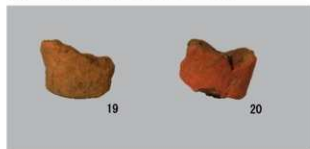
これらのことから、これまで報告した本散布地の年代に関しては、始期及び終期が異なる可能性、途中空白期が生まれる可能性を考慮して再考する必要がある。

以上の課題を念頭に置いて実施した今回の概要調査であったが、残念ながら、採集されたのは石器のみであり、土器や陶磁器といった詳しい年代を確認できる資料は採集されず、新たな情報を得ることはできなかった。

今後は、試験調査も含めて調査を継続し、本遺物散布地の実態の把握に努めたい。



写真 4.10 飛留喜田原B遺跡周辺 出土遺物



041 遺物散布地 現況近景

042 調査時遺物確認状況

写真 4.11 宮城原遺物散布地 現況近景

表 4.5 宮城原遺物散布地 採集遺物観察表

図版 番号	種類	出土 層	器 種 部 位	観 察 結 果	備 考
図 4.11 21	石器	表面採集	磨製石斧	バチ型で両刃 基部及び両側面に成形時の敲打痕あり 刀の先端は使用により濡れ、両面に使用時の磨痕 緑色片岩	82 年調査
図 4.11 22	石器	表面採集	磨製石斧	楕円方形を呈し刃は両刃 全体的に破壊が著しい 刀の先端は使用で濡れる 刀部の磨痕はみられない 緑色片岩	82 年調査
図 4.11 23	石器	表面採集	磨製石斧	基部の中央あたりから折れた石斧の破片？ 全体的に敲打調整によって形が整えられる 緑色片岩	82 年調査
図 4.12 24	石器	表面採集	石皿	皿の部分はよく使用されきれいなくぼみとなる 縁の部分は調整剥離されており若干磨耗 砂岩	旧予備調査
図 4.12 25	石器	表面採集	すり石	正面・両側面に研磨面あり 部分的に敲打調整 裏面の破壊部分は割れ面が若干磨耗 砂岩	旧予備調査
図 4.12 26	石器	表面採集	すり石	正面・側面に磨り面がみられるが磨痕はみられない 部分的に敲打調整 砂岩	
図 4.12 27	石器	表面採集	すり石	正面・側面に磨り面がみられるが磨痕はみられない 砂岩	旧予備調査

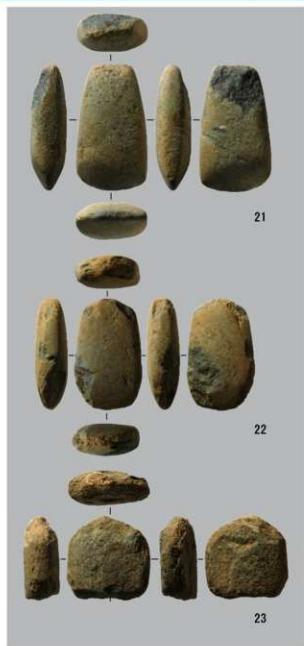
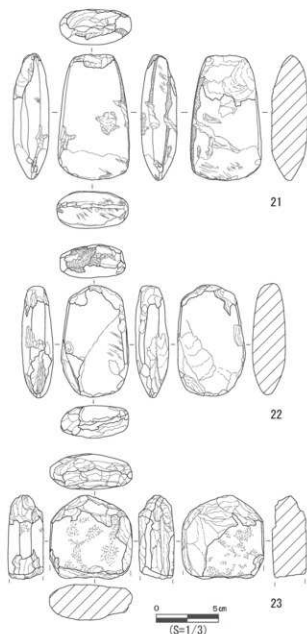


図 4.11 宮城原遺物散布地 採集遺物

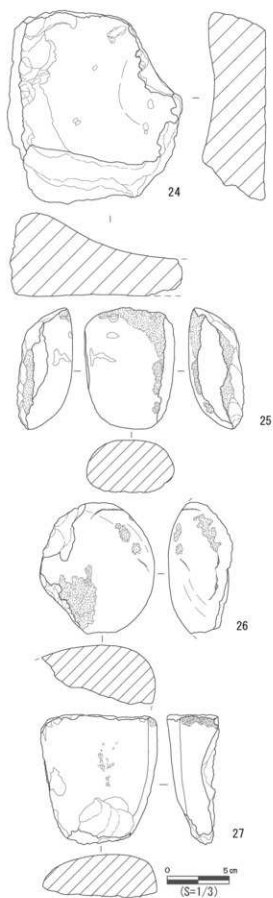


圖 4.12 宮城原遺物散布地 採集遺物

第7節 美里原遺物散布地

この遺跡は縄文時代相当とグスク時代の遺跡で、前述の宮城原遺物散布地から約300 m南側、石灰岩台地上にあり、小字美里原に所在する。町内で確認された遺跡のなかでも規模が大きく、約11,900 m²の面積を有する。

82年概要書では沖縄貝塚時代前期(縄文後期相当)と後期(弥生～平安並行)、グスク時代、近世の遺物が拾えたとあり、旧予備調査では沖縄貝塚時代中期(縄文晩期相当)、グスクと報告している。このうち、土器片に宇佐浜式土器が含まれるとされているが、改めて観察すると、小破片であるため、別の土器型式の可能性も否定できない。

2005年、沖縄国際大学考古学研究室の発掘調査で出土した遺物は、旧予備調査のときと同様、縄文時代相当とグスク時代のもので報告している。また、発掘調査では地山に達するまで掘り下げ、全ての地点で包含層が攪乱されていることが確認され、この付近

では包含層が残存する可能性は低いと報告している。

本町教育委員会では、これらの調査成果を踏まえ、今回の概要踏査を実施したが、年代を特定できる土器や陶磁器などの資料は採集できず、これまでに知られている以上の詳しい情報を得ることができなかった。

現在、本散布地一帯では宅地化が進んでおり、今後、早急に埋蔵状況を把握するための試掘調査を行う必要がある。



写真 4.12 美里原遺物散布地 現況近景

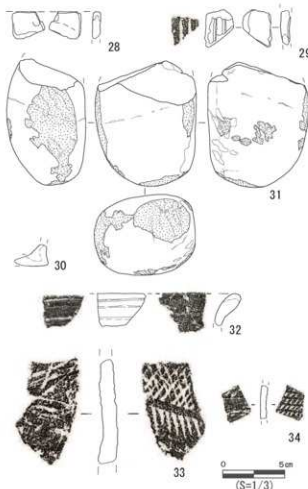


図 4.13 美里原遺物散布地 採集遺物



表 4.6 美里原遺物散布地 採集遺物観察表

図版 番号	種類	出土 地点 層	器 種 部 位	観 察 結 果	備 考	
図 4.13 28	土器	表面採集	深鉢形 口縁	無文 両面とも明褐色を呈する	混和材は磁物粒のみ 両面とも指頭によるナデ	旧予備調査
図 4.13 29	土器	表面採集	深鉢形 口縁	棒状工具による縦位の次線文を施文 表面明褐色 裏面暗褐色	磁物粒、石灰質砂粒を少量混入 両面とも指頭によるナデ	旧予備調査
図 4.13 30	土器	表面採集	平底	くびれ無い 底は小さい？ 表面明褐色 裏面明赤褐色で断面中央は黒褐色となり サンドイッチ状	混和材は石灰質砂粒のみ 両面とも指頭によるナデ	旧予備調査
図 4.13 31	石器	表面採集	すり石兼磨石	全体的に磨面がみられ下部及び両側面には敲打痕 上部の破壊後も使用しているようである	粘板岩	旧予備調査
図 4.13 32	カムイヤキ	表面採集	壺形 口縁	無文 頸部のくびれが強く口唇は精巧形状 両面とも暗青灰色、芯部は暗赤褐色	混和材は石灰質状の白色細片、半透明の光沢のある 磁物 調整は回転ナデ、へうけずり仕上げ	旧予備調査
図 4.13 33	カムイヤキ	表面採集	胴部	頸壁が薄く表面は線状、裏面は平行線状の叩き痕 両面とも暗青灰色で芯部は暗オリーブ褐色	混和材は石灰質状の白色細片少量 調整はナデ	旧予備調査
図 4.13 34	カムイヤキ	表面採集	胴部	頸壁が薄い 表面暗青灰色、裏面青灰色で芯部は褐色	混和材は石灰質状の白色細片少量 表面は棒子目状の叩き、裏面は一部にへうけ工具に よる調整	旧予備調査



044



045

044 調査員、発掘調査作業員（平成18年度）
045 試掘調査採取土壌の微細遺物選別作業

写真 4.13 調査メンバー、作業風景

第1節 生産遺跡群の概要及び分布状況

これまで未調査区域であった億首川上流周辺の調査に際し、過去県内（主に本島北部）における調査事例や当該地域周辺の古地名集成、地籍図等を参照しながら現地調査に臨んだ。目視による確認作業の結果、棚状・階段状の耕地跡、堰堤状石積、護岸状石積、炭焼窯跡、方形状堅穴石組施設、土塁、道跡など、生産活動に関連する遺構群を計14カ所で確認した（図5.1～5.3）。

上記の生産遺跡群を構成する各遺構は、尾根の頂部やその丘陵斜面に造り出された道跡（ハルミチ、ヤマミチ）を除き、現ダム貯水区域内に水没する袋状の低地（通称フクチの一带）の周囲を樹枝状に走る大小の沢、及びその周辺地形（方言でいうサーク*）を利用している場合が多い。これらの遺構は単独であるのは稀で、耕地跡等、土地利用上の主体となる遺構に性格を異にする別の遺構が複数、付帯して

あることが多い。また、別々の地点に離れてあるが、その関連性（セット関係）も考慮される遺構もある。

なお、グスク時代以前に遡り得る遺構・遺物は、踏査主体で実施した今回の調査では認めなかった。

今回報告にあたり、小字（ハル）単位で地区分けを行うとともに、対象地域周辺の伝承地名に関する調査成果を参考として、確認地点及びその付近に伝承地名がある場合は方言地名を冠するように努め、地名が冠せられない場合は所在する小字（ハル）名を冠することとした。また、当該地域の生産遺跡群を構成する個々の遺構は同様な内容のものも複数あるため、億首川上流の左岸から時計回りの方向（小字幸地原→木登代原→比嘉原→富名田原）に一連の地点番号をあわせて付した。また、同一の地点内で同様な遺構が複数存在する場合はさらにアルファベットで区別した。



写真5.1 調査対象地域（億首川上流周辺）



046 ダム水没以前の億首川上流周辺（昭和20年代）

047 億首川上流周辺 現状遠景

048 億首川上流周辺 現状近景（フクチ）

* 谷。沢筋に沿ってある低地。



図 5.1 調査対象地域的位置

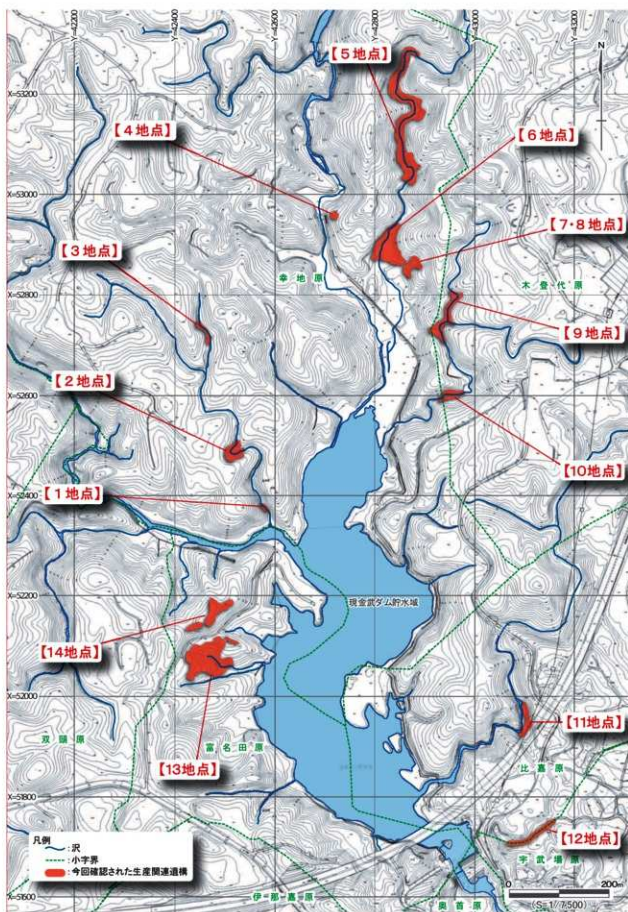


図 5.2 徳首川上流周辺における生産遺跡分布状況

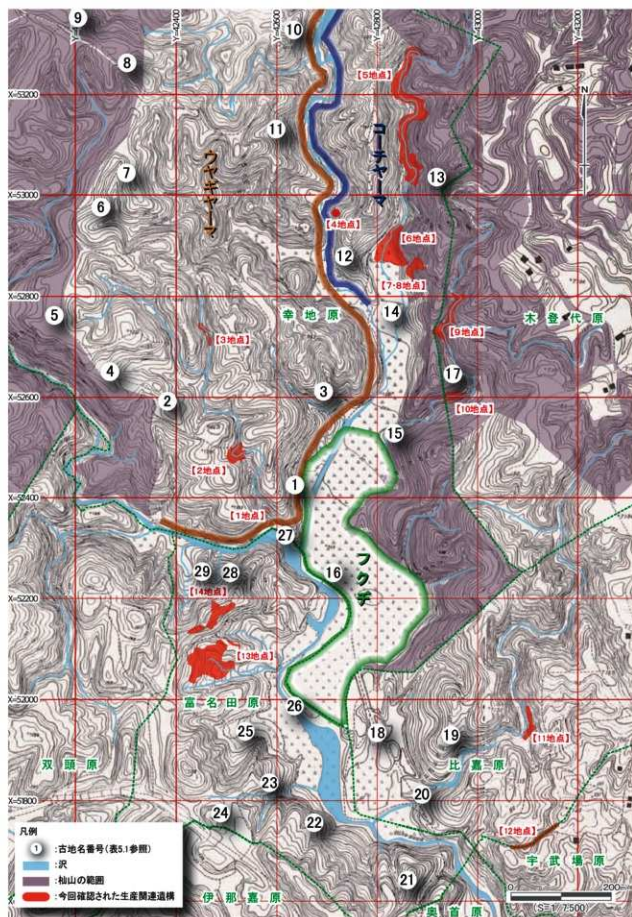


図 5.3 調査対象地域 (徳首川上流周辺) の古地名分布 (金武ダム建設前、1954 年米軍作成地形図を使用)

表 5.1 調査対象地域（徳首川上流周辺）に残る古地名

小字名	古地名	備	画
ウヤギヤマ	ホーピラ	幸地区の北部郡から南部にかけての一等の山々の呼称。ウヤギともいう。 フク子からウヤギへの地名転写。由緒は女性の神事に関するものなど伝説からとらえ一説に「転」からとも。同じオオツニー（奥比叡）で使っていたが、後に真草道が通られた。	
	ウチンダカラワカリグチ	ウヤギの山道から別れたウチンダカラ（役所の北辺りの地域）に向かう道の分岐点。付近にサーク田（沢田の田）があった。	
	タカラングワー宅田	屋号「タカラングワー」のモータ（宅田、元来田の種）があった場所。この近くに真草道が通っていた。タカラングワーヤキともいう。	
	ウヤギガマ	ガマは隠れていないが、このように呼ばれていた。	
	カナーヨシージ	田舎「カナーヨ」を歌ってはいけなさとされた場所。農しい人が死んだこの場所では「カナーヨ」の歌が聞こえてきたという説がある。	
	ナガタヌビ	サーウ。ナガマータといういい方も。水田があり、生木の枝を並べる藩の藩防止策が伝わる。沢の下流には屋号「カヌワイ」と「ウスツニー」の田があった。	
	サーシキ	サーシキ（沢敷）。その名前から茶を煮えた場所であったと思われる。	
	チャーシージ	長く連なるシージ（高段）。東端は昭和10年以降は真草道の地点となっていた。	
	タカウヤギ	ウヤギヤマの一段と高まった場所。北側の沢筋には屋号「メント」などの田があった。	
	ボンミカセ	急斜面。丸材、カヤ、タムヌを担いで降りられずここからボンミカセ（投げ下した）。	
	マデシ	新や木材などを運搬した急な坂道。通行の難所として有名であった。	
コチヤマ	コーレグスシージ	小字幸地区の南部にある一等の山々の呼称。コチともいう。 コチヤマの入口の地名。立木も余りなかった。	
	ウヤカイチ	屋号「ウヤカ」は徳山火三の屋号。明治30年頃、徳山はウヤカイチ（大黒田）に小黒を置かれておいたといわれている。	
	上コチ	フク子から続く急な坂道の急斜面。米が早く収穫できる場所。屋号「ケーバングワー」や「カヌワイ」などの田があった。昭和10年頃に「メーカ」の屋号も小黒があった。	
	中コチ	上コチとフク子に挟まれた場所でも急な坂道になっていた。ナースル（徳代）田があった。	
フク子	シヨウイサ	金沢ダム水没前。幅が狭く真草道で田が多かった。ナースル（徳代）田では良い田がなかった。昭和5年頃に潰れた。屋号「シヨウイ」の名を冠してこう呼んだ。この田が潰れたのち、ウヤギへ向かう真草道が通られた。	
ヤマクモ	エースプ	エースプ（藪藪）があった場所。付近には藪藪のある地帯まで。屋号「トクモエシ」の屋敷が構っていたという。	
	ヤマクモ	ヤマクモ（山草）は、急めた沢を急にする作業をした場所。新の末はこの近くでデンマ（伝馬）に預けられて運ばれた。屋敷や林の場所でもあった。	
	クスヌチセイゾ	クスヌチセイゾ（榎木敷）は、ヒージャの北東部のフク子に連なる急な坂道付近の地名。榎の原料となる榎木のチップを作っていたという。	
富名田原	ヒージャ	比嘉原を流れる大きな沢の下流にあたる場所。ナースル（徳代）田があった。ヒージャングワーともいう。	
	トクモエシヌダキヤマ	屋号「トクモエシ」が所有していたダキヤマ（竹林）。カラダキ（真竹）の仕立山と思われる。	
	ナガタミ	徳首川を見下ろす急斜面。	
	フナタノカピラ	サトウキビ、栗や梨などの果樹に覆われた急な坂道。沖崎田時、付近には日本軍のヒータイヤ（兵舎）や軍用倉庫があった。	
	シバキングワーサーター	屋号「カシバキングワー」のサーター（砂利場）があった。昭和11年ごろまで戦艦が行われていた。	
	ウニゴマータ	徳首川を見下ろす山の谷間の地名。屋号「タンバー」の田があった。	
	ミジグルマー	この辺りにミジグルマー（水車）があったという。田への灌漑のためとサトウキビの江戸のためともいわれている。付近に大正14年にできた真草道の地点があった。	
富名田原	ウヌツジガラ	メーダダムヌ（飯沼の郷）を比喩していた磯神を祀った場所。ウヌツジ（舟研ぎ石）があった。	
	ウダヌ	徳首川を見下ろす小字富名田原の北端あたりの地名。階段状の地形となっていた。	
	トクモエシヌダキヌチシ	小字富名田原の北西にあるシージ（田）の地名。屋号「トクモエシ」の榎木の仕立山であったという。	

調査対象地域における地形・生業等に関する地名を池田隆『里の地名』〔『里区誌』所収〕より抜粋改編して作成。

第2節 幸地原地区の生産遺跡

2.1 ウヤギのカーラ近くの堰堤状石積【1地点】

小字幸地原の西方、ウヤギ^{*}と呼ばれる丘陵地一帯を貫流する沢と億首川の合流点から約40～50mで確認した、堰堤状の野面積み石積である。V字

状に切り立つ両側の斜面立ち上がりには、ほぼ同じ高さの石積が残る。残存高は約0.6～0.8m。左右両端の高さを揃えて構築されたと想定した場合、中央付近では推定1.1～1.2m程度の高さとなる。石積背後に溜池状の落ち込みがあるが人為的な掘削か判然とせず、遺構の性格も定かではない。

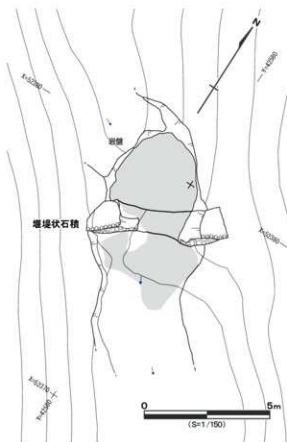


図 5.4 ウヤギのカーラ近くの堰堤状石積【1地点】
周辺 平面図



049 踏査時確認状況
050 石積遺構検出状況

写真 5.2 ウヤギのカーラ近くの堰堤状石積

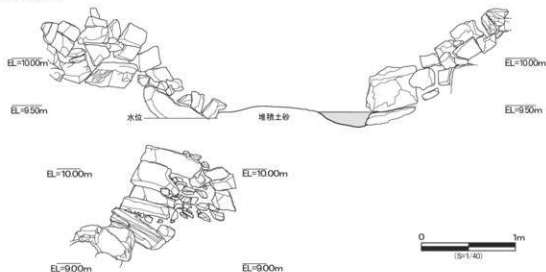


図 5.5 同 堰堤状石積 立面図・断面図

2.2 ウヤギの耕地跡【2地点】

前述の堰堤状石積【1地点】から上流へ約180 m 溯上した地点にある、耕地跡とみられる平場である。舌状に延びる尾根の裾付近を切り通して（方言でいうワイトゥイ）本来の沢の流れを変えることで、S字状に蛇行していた沢を平場に利用している。中央には切り通しの結果残った尾根が浮島状に残り、南側の斜面との間には平場を区画するように、野面積みの

石積による段の構築を認める（1号石積）。高さは約0.2～0.4 mで平坦面を維持するための土留めの石積とみられる。平場の外周付近には周囲の丘陵斜面からの浸水対策のため幅約1.0～2.4 m、深さ10数cm程度の浅い溝がめぐり、上述の1号石積に接するクムイ^{*}から沢に向かって走る。平場の北側にある斜面の立ち上がり際にも高さ0.7～1.0 m程度の石積の構築を認める（2号石積）。

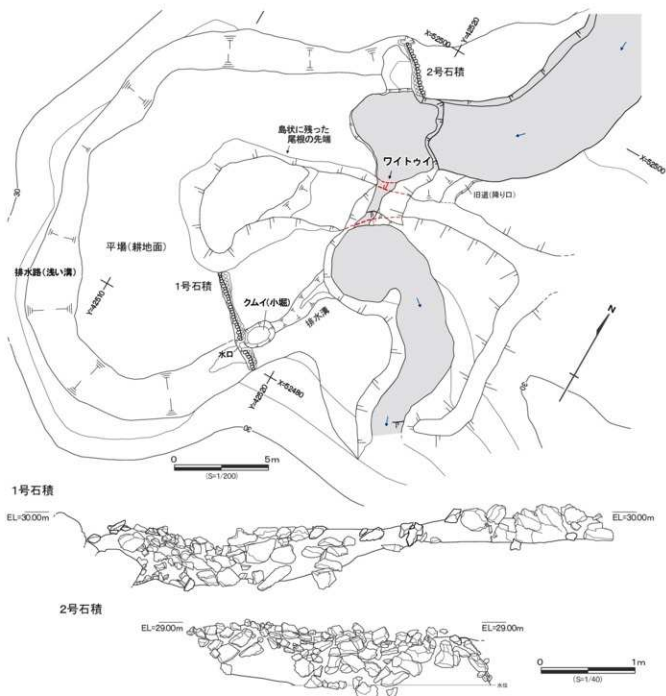
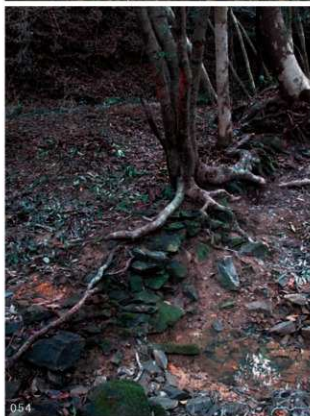


図 5.6 ウヤギの耕地跡【2地点】平面図及び石積遠構立面図

* 人工の水溜り。小堀。



051 平場跡全景（東側より）
052 平場跡全景（南側より）
054 平場内の段部石積（1号石積）及び排水溝



053 尾根のワイトウイ（割堀）
055 段部石積（1号石積）に設けられた水口
056 2号石積

写真 5.3 ウヤギの耕地跡【2地点】

2.3 ウヤギの堰堤状石積遺構【3地点】

【1・2地点】が分布する沢の上流で確認した、堰堤状の石積遺構である。【1地点】と同様、両側の斜面がV字状に切り立つ幅の狭い谷間に構築されている。

石積は、幅約4.4m、高さ約1.4m（最深部で計測）の規模で沢の流れを塞ぎ止めるように築かれ、石積の背後（上流側）は上端まで土砂が堆積している。向かって正面中央が抉れていたが、流水による決壊なのか意図的に石を外した結果なのか定かではない。石積は野面積みだが、内外に石材を積み上げながら内部に土砂混じりの比較的細かい礫を充填していく比較的確率な構築過程が窺える。上流側よりも下流側における構成石材のサイズが大きい（写真058）。

県内の調査事例を参照すると、池原上田原・仕明座原遺跡（沖縄市）の階段状水田跡に伴う石積遺構に類似する*。だが今回確認した石積では水田の痕跡を明確に認めることはできず（図5.8）、聞き取り調査でも手掛かりとなる情報の入手には至らなかった。

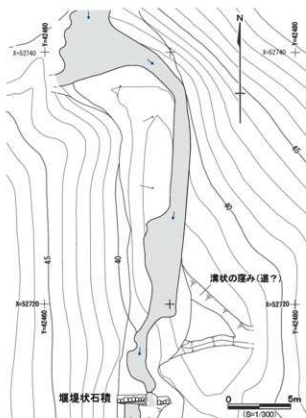


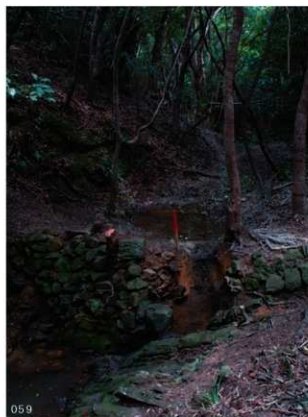
図 5.7 ウヤギの堰堤状石積【3地点】周辺 平面図



057



058



059

057 堰堤状石積遺構確認状況

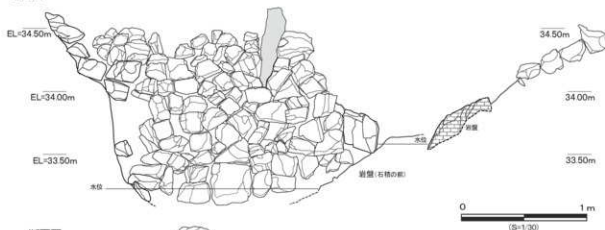
059 石積遺構周辺近景

058 石積遺構の断面構造

写真 5.4 ウヤギの堰堤状石積【3地点】

* 谷筋に段状に構築された水田跡が報告されている（沖縄市教委編 2008）。

立面図



断面図



石積内 混土層 土は2.5YR4/4オリーブ褐(1層に近い)
率大程度以下の礫が多く入る
礫の入り具合等から段階的な構築過程も窺える

- 1層 表2.5YR4/4オリーブ褐 表土～田表土
- 2層 7.5YR6/8橙～10YR6/8明黄褐 粘土質シルトしまり良
下層(3層)の土も散見 耕作面の痕跡明確に認められず
- 3層 5YR6/2～2.5YR6/2 灰オリーブ～灰黄 粘土質シルト
しまり良 上層(2層)よりザラザラした感触 地山の増積層か

図 5.8 ウヤギの堰堤状石積遺構【3地点】 立面図・断面図

ウヤギー帯で確認した堰堤状石積について、これらがどのような性格・用途で構築されたか、県内における類例をみると、沢筋に延びる狭小な空間を耕地として利用するため築かれた石積遺構(土留め)と考えることができる。

【3地点】では石積の背後に堆積土が残り、上図5.8に示すように土層の区別(分層)は可能だが、水田等の耕作行為を直接証し得る明確な痕跡を認めるには至らなかった。地籍図にもかつて耕地に利用されたりし筆は当該地点で認められない。

【1地点】【3地点】ともに石積の中央付近が快れた(取り外された?)状態であったことは遺構理解の手掛かりとなるようにも思われる。例えば、砂防施設のような直接的な耕地利用とは別の構築意図があった可能性や、同じ沢筋に離れてある耕地跡【2地点】との関連性(セット関係)も考えられ、民俗情報の収集も含めてさらなる調査を要する。

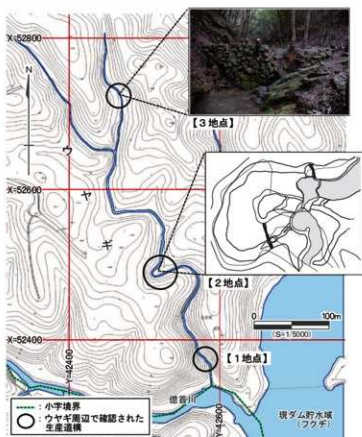


図 5.9 ウヤギー帯で確認された生産遺跡分布図

2.4 幸地原の炭焼窯跡【4地点】

上ゴーチ(上幸地)やフクチー帯へ続く沢筋の谷間の斜面で確認した炭焼窯の跡である。天井及び焚口の一部が崩壊した状態だが、窯の内壁(炭化室)は良好に残存している。窯の平面規模は長軸約3.0 m×短軸約2.2 m、縦長の楕円形状を呈する。

炭化室に接続する煙道口が3基残っている。窯の周囲には馬蹄形状にめぐる平坦な段が付けられていることから、作業時には覆い屋根等の構造物が乗っていたと思われる。焚口前には斜面を掘り込み平坦に整地した約6.7×4.7 mの作業場とみられる平場、そして眼下の沢へ降る道(ヤマミチ)の跡も残る。

大宜味村大保川上流域や恩納村大袋原の炭焼窯跡など本島北部における炭焼窯の検出事例をみると、沢筋に沿って複数の窯が比較的密に分布する状況を認めるが、今回の確認地点では周辺に他の窯跡はみられず単独である状況だった。窯周辺の精査時に本土産印判染付碗(砥部焼)、ガラス瓶等を採集した。



写真 5.5 炭焼窯確認地点 周辺現況

終戦直後に調製された米軍測量図や現行地籍図をみると、眼前にある沢筋まで耕地利用され、億首川に沿って遡上してくる里道が窯付近まで延びており、窯構築場所の選定に関与した可能性が考えられる。

なお過去の聞き取り調査では戦前この付近(上ゴーチの辺り)で炭焼きが営まれていたとの記述もあり[※]、今回確認した窯跡の可能性もある。



061 炭焼窯跡検出状況 062 焚口・窯内部(炭化室)及び煙道の配置
063 窯周辺 遺物散布状況

写真 5.6 幸地原の炭焼窯跡【4地点】

※ 前掲 p.41 の表 5.1 参照。

2.5 コーチヤマ(幸地山)の沢利用耕地跡【5地点】

現ダム貯水域に水没する盆地状低地(通称フクチ)の北、かつてコーチヤマ(幸地山)と呼ばれた丘陵地に貫流する沢筋を利用した耕地跡及び関連遺構群である(図5.10・11)。蛇行する沢と周囲の尾根が形成する狭小な空間を利用した平場跡をはじめ、護岸状に構築された石積や土塁、溝、道跡、堅穴状施設等、複数の遺構が約350mに及ぶ範囲に混在してある。耕地利用されたと思われる各平場は、その平面形状と地籍図にみる筆の土地区画形状が合致する。

以下、各遺構の詳細について分割図に沿って述べる。

図5.12は、下流側約100m範囲の平面図である。後に述べる上ゴーチの耕地跡【6地点】の北方約130～140mに位置する。当該範囲では沢沿いに延びる土塁や排水路(溝)を伴う平場跡、雛壇状の平坦面及び石積、堅穴状施設跡等を確認した。

沢の東側の丘陵斜面には切土による平坦面が幾重にも造作され雛壇状を呈する(沢に接する最下段は掘削土の盛土の可能性もある)。沢に近い下段平坦面は幅員も広いが、斜面のそれは幅狭で法面に石積を伴う。



064 コーチヤマの沢利用耕地跡 踏査時現況

065 踏査時における遺構確認状況

写真5.7 コーチヤマ(幸地山)一帯における踏査風景

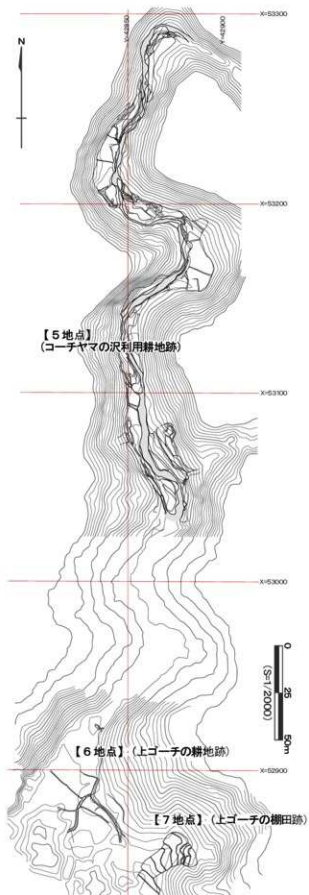


図5.10 コーチヤマ(幸地山)一帯で確認された生産遺跡



066



067



068



069



070

066 難境状平坦面全景

067 難境状平坦面

069 堅穴状施設跡

068 沢に沿って構築された石積

070 施設内壁に残る石積

写真 5.8 コーチャマの沢利用耕地跡における遺構確認状況 (1/3)

前者はおそらく通路として機能していたと考えられる。

この雛壇状の平坦面及び石積のすぐ北側には、斜面を垂直方向に掘り抜き平坦に整地した、堅穴状施設を1基確認した。切土で造り出された内壁には石積もみられる。施設内の整地面の規模は約 3.8×3.2 mで、開口部の幅は約2.8 mを測る。当該地点では他に同様な遺構は認められず、単独である状況である。小屋跡の可能性もあるいは考えられるが、柱穴や炉等の痕跡は確認できず、推測の域を出ない。県内の調査事例では池原上田原・仕明座原遺跡（沖縄市）にこ

れと似たような掘削土坑が報告されている。

対岸部（沢の西側）には南北方向に延びる細長い平場跡とともに沢筋や斜面の立ち上がりに沿うように、排水路とみられる溝や断続的な土塁がみられ、平場を分断するように沢へと流れる溝も数本走る。沢に接する辺りでは、20 cmに満たない高さが護岸状に築かれた石積も所々に認めることができる。

これらの遺構が構築・使用された時期を知る手掛かりとして、雛壇状平坦面及び石積付近で沖縄産施釉陶器皿や無釉陶器壺等を採集している（図5.12）。

表 5.2 コーチヤマの沢利用耕地跡 採集遺物観察表

図版番号	図 5.12 36	図 5.12 37
種類	沖縄産施釉陶器	沖縄産無釉陶器
出土 地点	表層採集	表層採集
器 種	皿	壺?
部 位	口・底	底唇
観察結果	口径 6.8 cm 口縁は波状口縁 表裏面ともに花弁状にけずり花びらのようになる 裏付及び裏込みに蛇の目輪はぎ部分を除き施釉 裏地は淡黄褐色を呈し、粒子はやや細かい 表面は鉄釉、裏面は透明釉（+白化粧）と焼付けされる	口径 20 cm 底面から立ち上がる部分が面取りされる 唇色は裏面暗赤褐色 裏面赤褐色 胎土に石灰質の粒がみられる 底面の一部が破裂し変形している
備考		



写真 5.9 遺物散布状況（雛壇状平坦面及び石積付近）

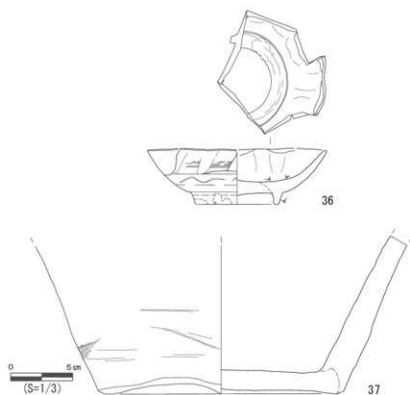


図 5.12 同地点採集遺物



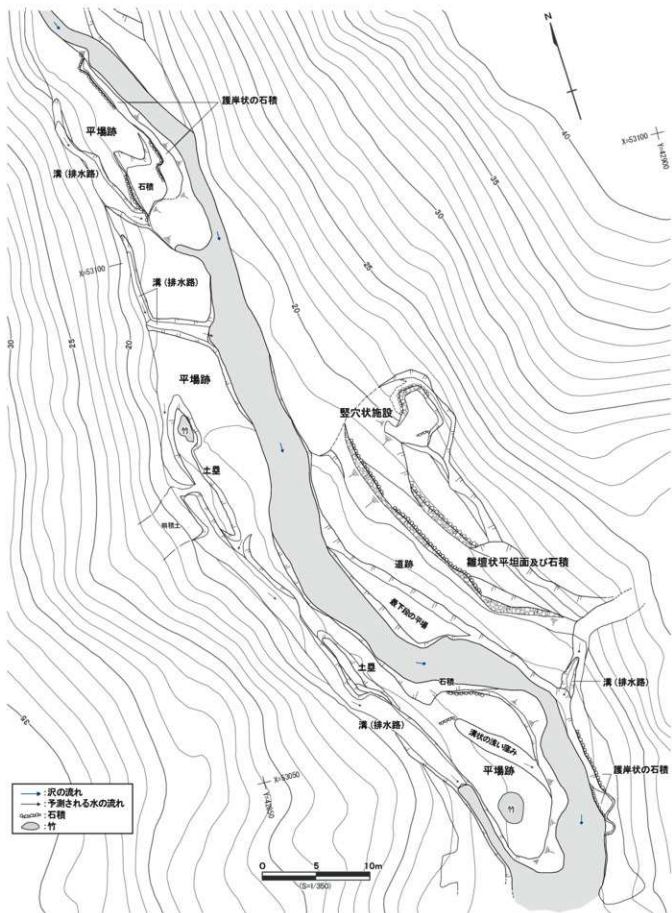


図 5.13 コーチャマの沢利用耕跡 平面図 (1/3)

図 5.13 に繋がる範囲約 120 m が図 5.14 である。蛇行する沢筋の東側にある低地を利用した耕地跡が良好な状態で残る (写真 073)。30 cm に満たない低い段で区切られた 5 ～ 6 枚の面からなる耕地跡である。段は石積がある箇所となし箇所がある。沢沿いには護岸状の石積や礫が多く入る土塁が構築されており、段に接して排水路らしき溝も所々に認められる。耕地跡の南側には成人男子がようやく通れる幅狭な道が延びており、法面には路肩保護とみられる石積が護岸状に連続して構築されている。

耕地跡を抜けて上流方向へ進むとすぐに別の平場があり、ここでも溝状遺構や土塁、護岸状に築かれた石積を認める。溝状遺構は規模が比較的大きく、延長距離約 23.2 m、幅約 2.4 ～ 4.0 m、深さ約 1.2 ～ 1.6 m を測る。平場を分断するように掘り込まれ、溝の両端はそれぞれ沢筋に接する (076)。この溝を挟むように両側には土塁が短く築かれ、上流側はこの溝を塞ぐように堰堤状の石積がある (077)。この溝状遺構の性格・用途は判然としないが、あるいは沢の増水時の分流装置のような機能も考えられる。



072 耕地跡に続く護岸状石積を伴う道
073 階段状に区画された耕地跡
074 耕地跡の段部
075 段に沿って走る排水溝
076 平場を貫く溝状遺構
077 溝の開口部を塞ぐ石積

写真 5.10 コーヤマの沢利用耕地跡における遺構確認状況 (2 / 3)

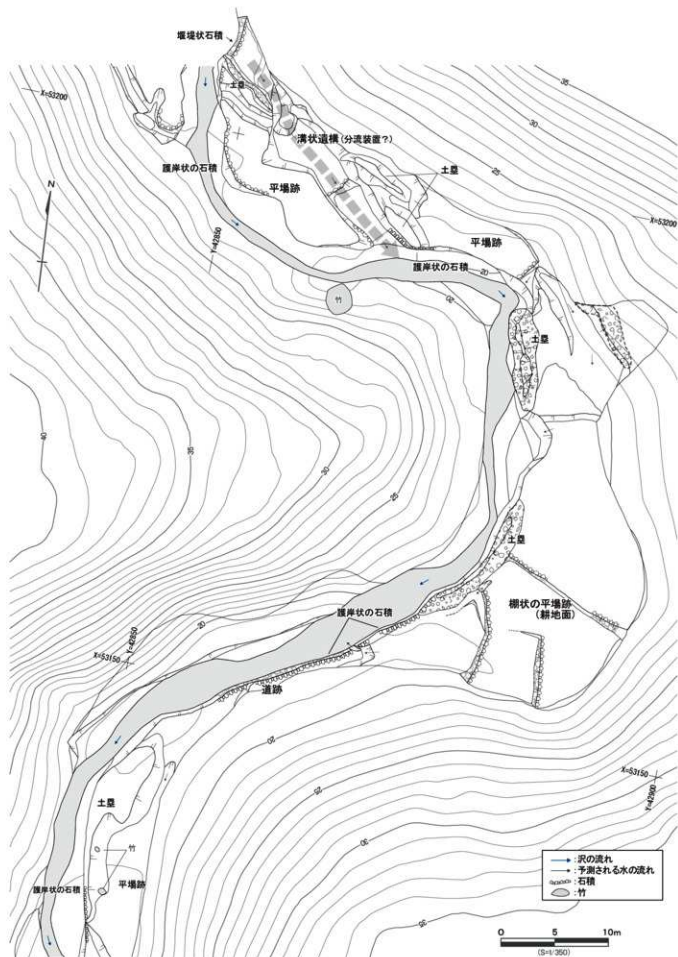


図 5.14 コーチャマの沢利用耕地跡 平面図 (2 / 3)

図5.15は当該地点の最奥部約120 m範囲の平面図である。下流側で認めた耕地跡と同様な、土塁や排水溝を伴う段状の耕地跡がよく残る(写真078)。南北に細長い平場を、石積を伴う低い段で区切った、4枚の耕地面をもつ棚状の耕地跡である。暈管状斑鉄がみられ、水田跡の可能性が高く考えられる。棚状の耕地跡が接する丘陵斜面との間で排水溝を認めたのは最上段及び最下段の耕地面のみで、ともに沢の方向へ流れるように掘り込まれている。

上流側へ進むと、沢を跨いで対岸側(東側)に護

岸状の土留め石積を伴う道跡が丘陵裾を縫うように最奥部まで延びている。石積は野面積みで高さ約0.7～0.9 m、道跡の延長距離は約30 m、幅約2.0～2.6 mである。沢がU字状に強く蛇行する最奥部付近では排水路とみられる溝が道跡を切るようにあり、土塁もみられる。溝の底面は勾配があり、護岸状石積とぶつかる個所には排水口らしき石組もある。また、東側の斜面上にはようやく歩ける程度の幅狭な平坦面(道跡?)があり、沢筋を溯上してくるルートと別に進入路が尾根上に延びていた可能性もある。



078 階段状耕地跡

079 耕地面を区画する段

080 耕地面でみられた暈管状斑鉄

081 護岸状石積を伴う道跡

082 排水溝及び水口

写真5.11 コーチャマの沢利用耕地跡における遺構確認状況(3/3)

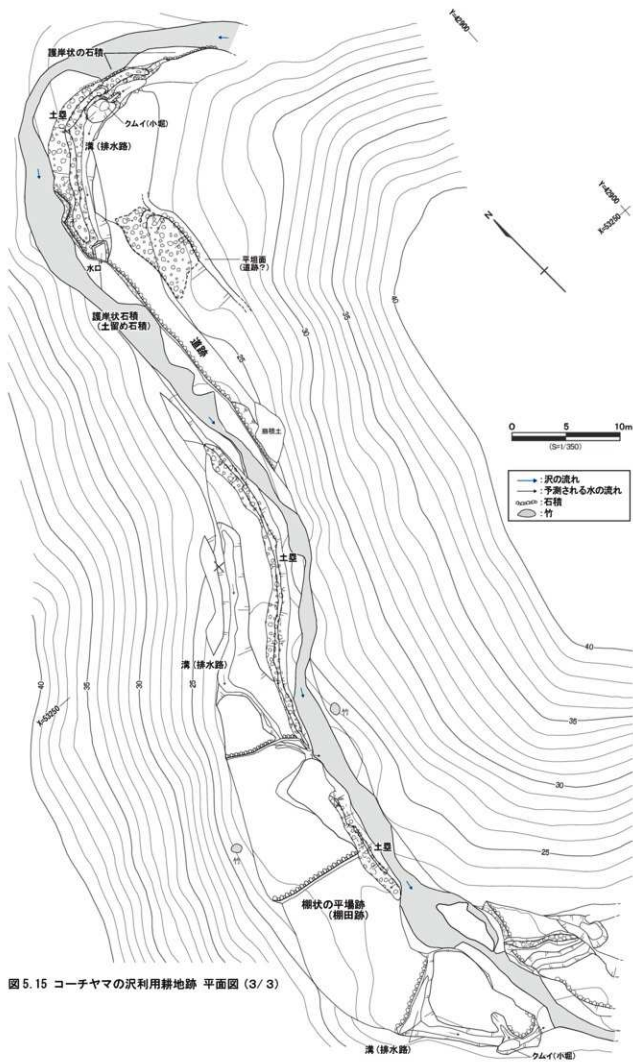


図 5.15 コーチャマの沢利用耕地域 平面図 (3/3)

2.6 上ゴーチ（上幸地）の耕地跡【6地点】

フクチや中ゴーチの地名がある、連続した盆地状低地の最奥部、通称上ゴーチ（上幸地）の一帯で確認した耕地跡である。丘陵裾のやや広まった平坦な低地を利用している（図 5.16）。全体に北側（上流側）から南側（下流側）にかけて緩やかな傾斜を認め、畦・段により区画された複数の耕作面が階段状に形成されている。耕地跡を南北方向に縦断する畔を境に、西側では 10～11 m 間隔で区画されている。

上流側の端部には沢からの取水口とみられる土塁を切った溝があり、各平場の畦や段部には続く下段の面への水口とみられる溝も認められる。南北に走る通路を兼ねた畔では板状の石を用い暗渠にしている。なお、耕地跡を区画する畦や段は地籍図にみる筆の区画形状と合致する。また、耕地跡と東側の丘陵の接点を縫うように道跡（ヤマミチ）が走り、その上方のやや広まった緩傾斜地には方形状堅穴石組施設（図 5.17）、集石土坑（図 5.18）が確認されている。



083 上ゴーチの耕地跡近景（西南方向より）

084 耕地跡及び脇を走る道跡（東方向より）

086 耕地跡を区画する水口を伴う段

085 耕地跡近景（南方向より）

087 南北方向に縦断する暗渠をもつ畦道

写真 5.12 上ゴーチの耕地跡【6地点】における遺構確認状況

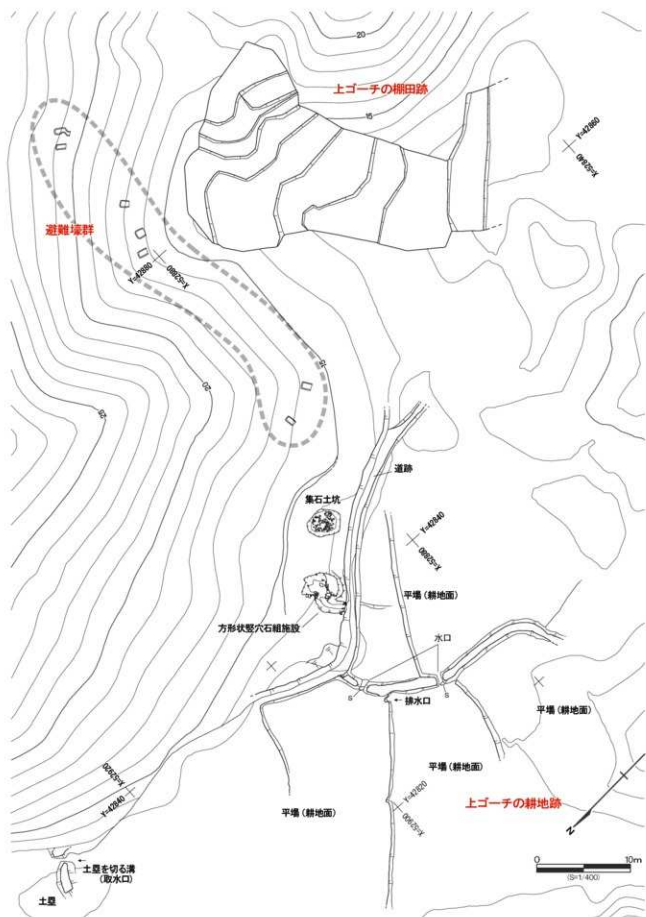


図 5.16 上ゴーチの耕地跡【6 地点】及び柳田跡【7 地点】平面図

方形状堅穴石組施設 耕地跡を見下ろす丘陵裾部付近の傾斜が緩い場所に構築されている(図 5.17)。平面観は長軸約 2.4 m 短軸約 2.3 m の略方形形状を呈する。丘陵側の斜面を掘り込み、反対側(耕地跡側)は盛土及び野面積みによる石積構築で堅穴状に整えている。

一部が開口しており耕地跡の方向に走る浅い溝もみられる。施設内部は比較的平坦である。施設内を精査したが被熱等の痕跡は認められず性格や用途は不詳である。構築・使用時期を窺える遺物として、施設周辺で沖縄産無釉陶器やガラス瓶等の近現代遺物を採集している。

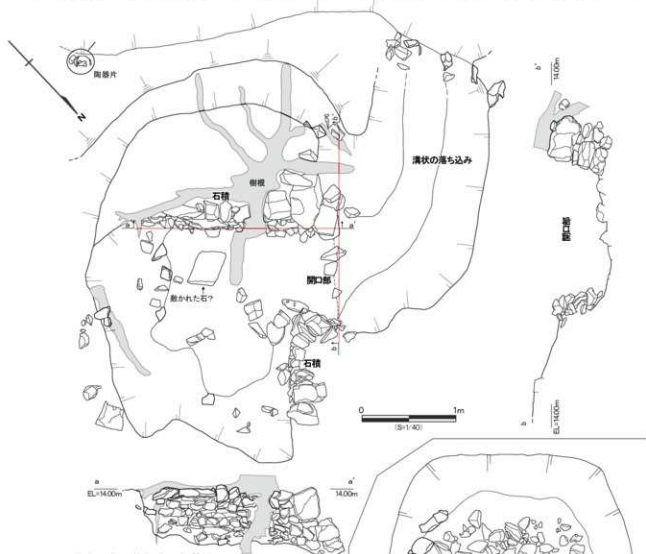


図 5.17 同地点 方形状堅穴石組施設
平面図・各部立面図

集石土坑 上述の堅穴状石組施設に近い位置で検出した性格不詳の集石である(図 5.18)。長軸約 3.6 m × 短軸約 2.8 m の楕円状を呈した浅い土坑内に大小の礫が集密する。断面観察では礫集中部の厚さは約 0.3 ~ 0.4 m。近接してある堅穴石組施設との関連性も想起されるが、構築理由や性格は不詳である。なお、集石周辺における遺物の散布はみられなかった。

耕地跡及びその関連施設とみられる堅穴石組施設・集石土坑周辺の採集遺物のうち、特徴が窺える遺物を図 5.19 (p.60) に示す。

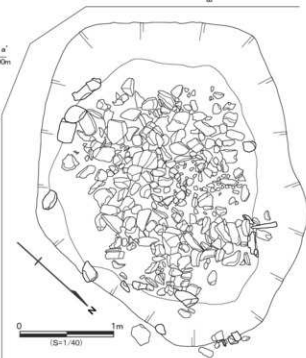


図 5.18 同地点 集石土坑 平面図



088 概観踏査時における確認状況

089 方形状竪穴施設検出状況

091 竪穴石組施設石積開口部

093 竪穴施設と道跡・耕地跡との位置関係

090 方形状竪穴施設検出状況

092 竪穴石組施設内の石積

094 道横検出後の実測作業風景

写真 5.13 同地点 方形状竪穴石組施設



095 集石土坑検出状況（右奥に方形状竪穴施設）



096 遺構検出後の実測作業風景



097 集石土坑断面

写真 5.14 同地点 集石土坑



写真 5.15 遺物散布状況（方形状竪穴石組施設周辺）

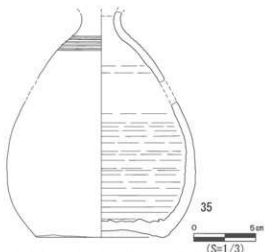


図 5.19 同地点（方形状竪穴石組施設周辺）採集遺物

表 5.3 同地点採集遺物観察表

図版番号	図 5.19 35
種類	沖縄産施軸陶器
出土層	表面採集
器種	徳利
部位	胴部・底部
観察結果	底径 10.45cm 蓋置杭？ 底面はあげ底 胴上部に5条の沈線文が施文 胴部の一部に自然釉がかかる 表面暗褐色裏面黒褐色 断面中央は暗赤褐色でサンドイッチ状
備考	



2.7 上ゴーチの棚田跡【7地点】

前述の耕地跡【6地点】の南西、歪曲した尾根が形作る狭い谷間を利用した階段状の水田、いわゆる棚田の跡である。

各段耕地面は黒色を強く帯び、踵～脛下まで沈む程めかるむが、縁の部分(畦)は比較的固く締まっており、歩行も容易である。

各段の法面に石積はみられない。雑木や葎類を伐採清掃したところ計10枚の耕作面を確認したが、下流方向にさらに面が連続してあったとみられる。各段の間隔すなわち耕地面の幅員は最大で約8.0m、最も狭い箇所では1.0mにも満たない。なお、遺物の散布は認められなかった。

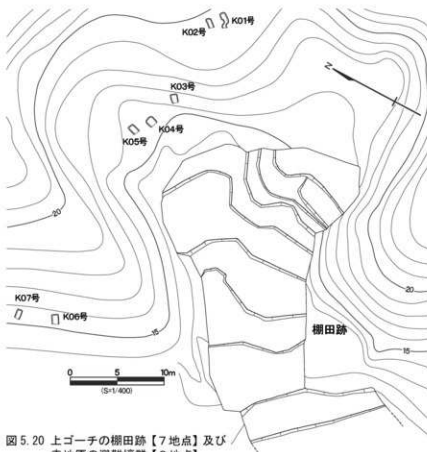


図 5.20 上ゴーチの棚田跡【7地点】及び幸地原の避難壕群【8地点】



099 伐採時の遺構確認状況

100 耕作面及び設部（伐採清掃時）



101 伐採清掃後の検出状況

写真 5.16 上ゴーチの棚田跡【7地点】

2.8 幸地原の避難壕群【8地点】

生産遺跡にはないが前述の耕地跡・棚田跡【6・7地点】を見下ろす丘陵斜面で確認したので、ここで扱う。避難壕跡とみられる掘削坑群である（下図5.21）。幸地原のアルファベット頭文字（K）に連番

を付した。崩壊が著しく内部を窺え得ないものもあるが、いずれも掘削規模は狭小であり、成人男性がようやく入れる程度である。採集遺物も無く時期不詳だが、大戦時に億首川上流の山中に避難したとの証言記録*等から避難壕として掘削されたとみられる。

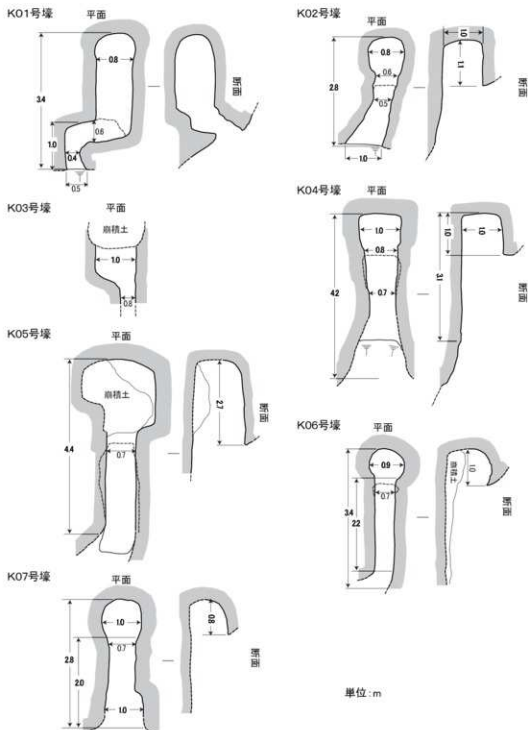


図 5.21 幸地原の避難壕群【8地点】 各壕略測図（平面・断面）



102 K01 号塚

104 K02 号塚

106 K04 号塚 (左奥は K05 号)

108 K06 号塚

103 K01 号塚入口及び内部

105 K03 号塚

107 K05 号塚

109 K07 号塚

写真 5. 17 各塚の確認状況

第3節 木登代原地区の生産遺跡

3.1 木登代原の平場跡【9地点】

前節で述べた上ゴーチ（上幸地）の耕地跡及び棚田跡【6・7地点】と尾根を隔てて東側（木登代原）を流れる沢筋において確認した、耕地利用されたとみられる平場跡及び関連の石積遺構である。複雑な曲線を描く丘陵と丘陵の谷間を利用した平場跡や沢に沿って構築された護岸状石積、堰堤状石積等を複数確認した。

なお、当該地点周辺にエースプー（藍壺）の地名が残るが、今回の踏査では該当施設の確認に至らなかった。

平場A周辺 沢の下流側に位置する、平場Aでは沢筋に沿って平場の縁部に護岸状に構築された石積を確認した。延長距離は約11mに及ぶ。略三角形形状を呈した平場の最奥部で、尾根を掘り抜いたフィトゥイ*がみられる。尾根を隔てて反対側の上ゴーチ・フクヂへと到るルートとみられる。

平場B周辺 平場Aから10数m溯上した所にある沢の合流点において、沢に接するように野面積みの石積が残る。石積の残存規模は幅約2.4m、高さ約1.0～1.2mで、北側方向からの流れを塞ぎ止めるように構築された、堰堤状の石積である。石積の背後（北側）方向にはやや広まった谷底低地が延びており、この低地を利用するために築かれた石積とみられる。また、この堰堤状石積の前方には丘陵斜面を降る進入路の路肩保護のため積みまわたとみられる石積もある。

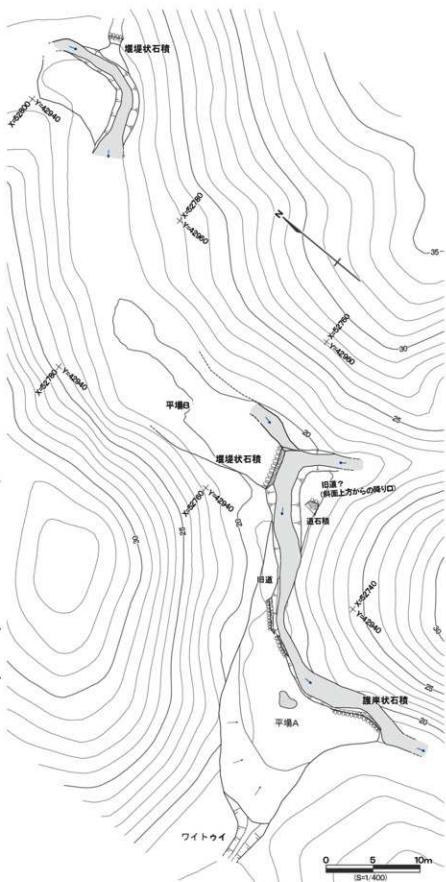
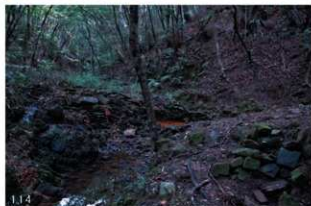
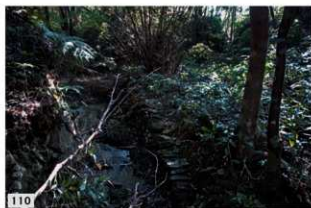


図 5.22 木登代原の平場跡【9地点】周辺 平面図



110 踏査時確認状況（平場A）
 111 平場A表面精査後全景
 112 平場Aに伴う護岸伏石積検出状況
 113 平場Aのワイトウイ（割図）
 114 平場B周辺 堰堤伏石積検出状況
 115 堰堤伏石積検出状況
 116 平場B北側の堰堤伏石積検出状況

写真 5. 18 本登代原の平場跡における遺構確認状況

平場Bのさらに奥（北側）、沢が大きく曲がる個所でも、丘陵斜面を刻む溝状の窪みを塞ぐように構築された堰堤状石積が良好な状態で残存していた。他の石積と同様、付近で調査が可能な嘉陽層の角礫を用いているが、幅約1.6 m高さ約0.8～0.9 mと比較的小規模で、その構築目的や機能は判然としない。

当該地点の現況測量図と地籍図を合わせた結果、地籍図にみる筆界との合致を認めた。なお、当該地点で遺物の散布はみられなかった。

3.2 木登代原の耕地跡【10地点】

前述の平場跡【9地点】から沢筋を下流方向へ約180 m下った場所で確認した、沢筋の低地を利用した耕地跡である。丘陵の間隔がやや開いた谷間をし字状に流れる沢の北側には上下2段の平坦面があり、0.3～0.4 m程度の高低差を持つ段部には石積も一部残存する（写真119）。耕地利用されたとみられる。平場の上段面には沢に沿うように盛土による土塁の

構築もみられるが、平場が接する丘陵斜面との間には排水施設らしき痕は認められなかった。

沢を隔てた対岸（南側）では丘陵裾と平場の間を走る排水路らしき溝状遺構、また沢筋に沿って構築された土塁がみられ、沢が流れを変える平場の西端部には土留めとみられる石積遺構も残る（図5.24）。石積は露頭した岩盤上に比較的大きな石を積み重ねた野面積みの石積で、幅約4.0 m、高さは（最も高低差がある所で）約1.6 mの規模である。なお、当該地点でも採集遺物は得られていない。

当該地点も前述の平場跡【9地点】と同様、現場で作成した測量平面図と地籍図にみる土地区画形状の合致を認めることができる。



117 平場周辺 近景

119 上段平坦面及び段部に残る石積



118 土留め石積検出状況

120 土留め石積検出状況

写真5.19 木登代原の耕地跡【10地点】における遺構確認状況

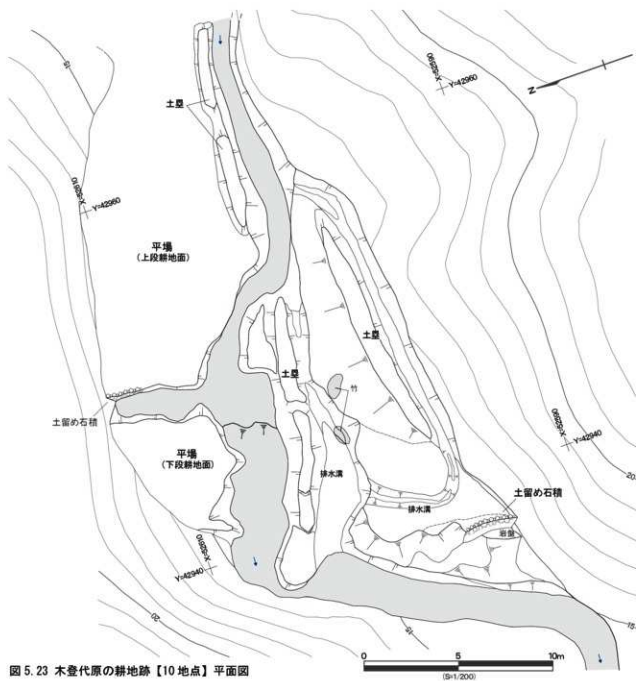


図 5.23 木登代原の耕地跡【10地点】平面図

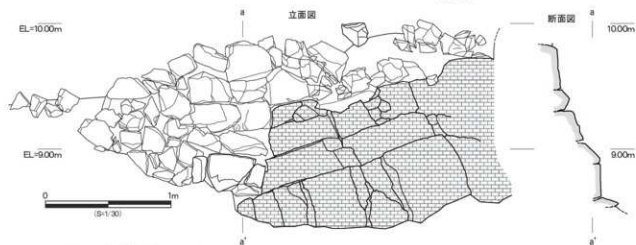


図 5.24 同地点 石積遺構 立面図・断面図

第4節 比嘉原地区の生産遺跡

4.1 ヒージャーガーの護岸状石積【11 地点】

小字比嘉原を貫流する沢筋の中程、大きく曲がる場所で確認した護岸状に構築された野面積みの石積である。延長距離は約 40 m。石積の規模をみると、上流側では人頭大程度の礫を用いるのに対し、沢のカーブ周辺ではかなり大きな岩塊が背丈を超える程まで積み上げられている。石積背後にある平場を耕地に利用するため構築されたものと推される。対岸斜面がほぼ垂直に削られている。

現場で確認された石積及び平場の平面形状と地籍図にある筆の区画形状は合致する。なお、採集遺物は得られていない。時期的には新しいようにも思える。



写真 5.20 ヒージャーガーの護岸状石積【11 地点】

4.2 比嘉原の道跡及び土塁【12 地点】

比嘉原の南端、宇武場原との境を北東-南西方向に走る尾根筋に構築された、土塁を伴う道跡である。確認した道跡の総延長は約 130 m、道幅は約 2.0 ~ 3.6 m である。路面は斜面崖側の路肩とほぼ水平な箇所もあれば(試掘坑 01)、路面部分が路肩よりやや低く溝状を呈する箇所もある(試掘坑 02・03)。

一部盛土によるとみられる土塁もあるが、尾根頂部付近の斜面を垂直・水平方向に切土して壁及び路面を造り出している。道筋の南側に土塁ないし壁が並ぶが、道跡を東に進むと途中、壁が道筋の北側に入れ替わる。道筋に沿う土塁には竹が並び、密な箇所もある。

宜野座村松田のカチバ(猪垣)や恩納村南恩納山中で確認された猪垣にも類似しており、遺構の性格として猪垣の可能性も考えた。あわせて、明治前期に県内各地を探訪した笹森儀助は著書『南島探験』において「(前略)…各村境略紛擾起ルヘント豫想セル錯雑箇所ニ於テハ、必ス其四近ニ異類ノ竹木ヲ植ヘ、豫メ紛擾ヲ防クノ策ヲ講シ…(後略)」* (笹森 1894) と、境界標識として竹を植える行為を紹介している。現場測量図と地籍図を合わせたところ、比嘉原・宇武場原の小字境界線と合致していることが認めることから、構築意図として土地区画の地上標識が考えられる。

なお、表面精査では近現代磁器を数点程度得たがいずれも小破片であり、道跡及び土塁の構築時期に関する手掛かりは得られなかった。



122 踏査時確認状況

123 道構現況測量作業風景

写真 5.21 比嘉原の道跡及び土塁 踏査作業風景

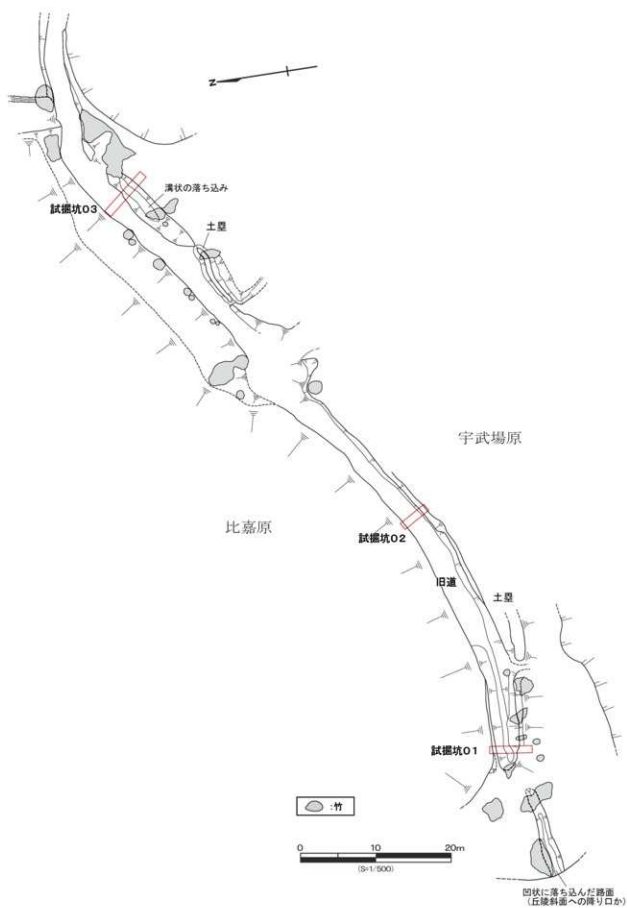


図 5.25 比嘉原の道跡及び土塁【12 地点】平面図



124 道跡及び土塁検出状況

125 試掘調査作業風景

127 道跡及び土塁検出状況

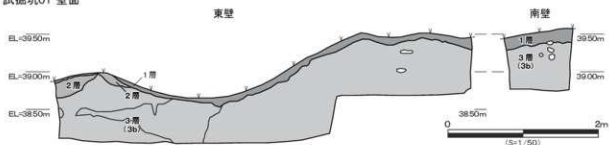
126 試掘坑 01 東壁

128 試掘坑 02 東壁

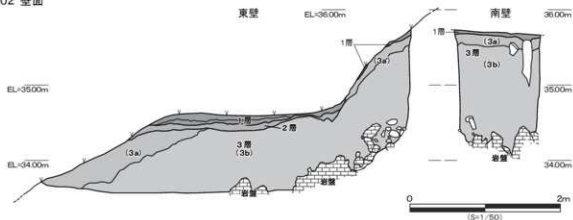
129 試掘坑 03 東壁

写真 5.22 比嘉原の道跡及び土塁【12 地点】道構確認状況及び各試掘坑壁面

試掘坑01 壁面



試掘坑02 壁面



試掘坑03 壁面

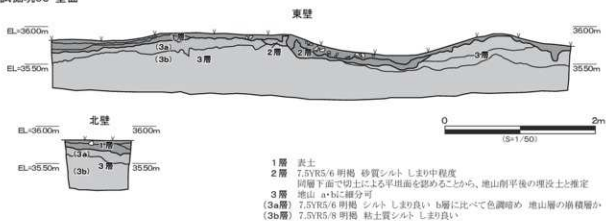


図 5.26 同地点 各試掘坑断面図

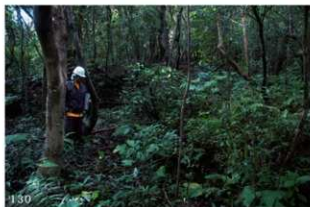
第5節 富名田原地区の生産遺跡

5.1 富名田原の階段状耕地跡【13地点】

かつてのフクチを西方に臨む、緩やかな弧を描く尾根の丘陵斜面及び谷間の低地を利用した階段状の耕地跡である。丘陵斜面を段状に掘削して耕地面を造り出しており、掘削規模から予想される相当量の掘削土は斜面下方の低地における耕地面造成に用いられたものと考えられる。上記のような耕地の造成過程は恩納村谷茶山中で検出された畑跡の調

査報告に具体的にみることができる(大袋原の畑跡)。恩納村大袋原の事例をみると、当該地点と同様な立地にあり、丘陵の斜面を掘削して階段状の平坦面を造るとともに掘削土で谷底低地を埋める状況が発掘調査で確認されている。

階段状耕地跡 ここでは大小23枚の平坦面を確認できたが、本来は、さらに下方へ耕地面が連続してあったものとみられる。耕地面積が最大のものは、地点南側の中央2枚の耕地面で(写真132)、上段の



130 調査時遺構確認状況（当該地点北側） 131 最上段面からの眺望（フクチを望む）
132 調査時遺構確認状況（当該地点南側） 133 階段状平坦面検出状況
134 耕地跡南側の土手（里道） 135 遺物散布状況

写真5.23 富名田原の階段状耕地跡 遺構確認状況

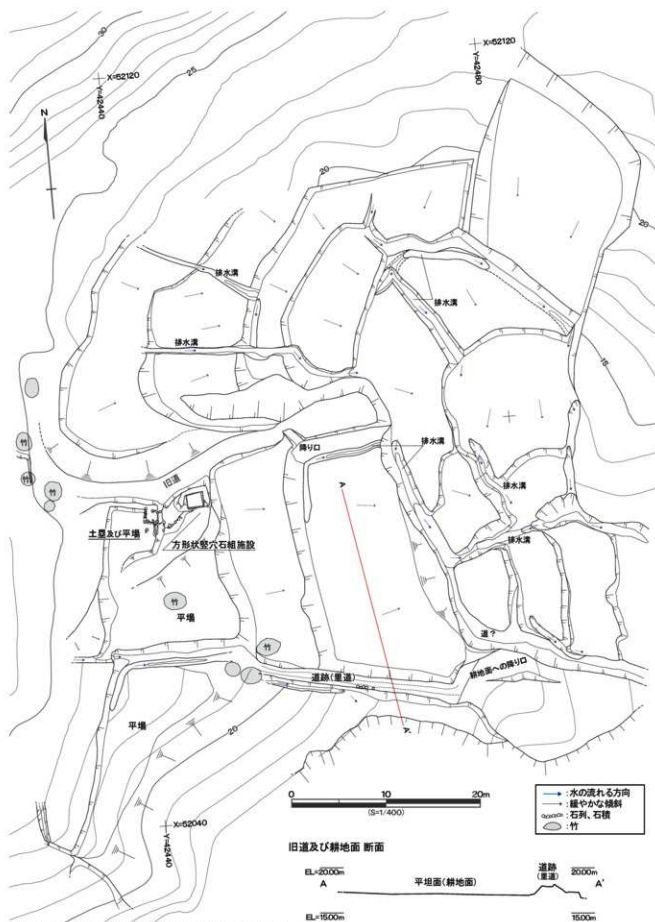


図 5.27 富名田原の階段状耕地跡【13 地点】平面図

面は約 310 m²、下段面が約 110 m²。最上段の平坦面との段差が造り出す壁と南北を走る土手状の高まりで周囲がコ字状に囲われたかたちになっている。

他の耕地面も、縦横に走る大小の溝（排水路）で区切られており、北側では緩やかな弧を描く丘陵斜面に扇状に耕地面が造り出されている。

丘陵斜面に囲われた低地部（地点東側）の耕地面は水が集まり易いため、ぬかるんでおり、排水溝も多くあるように思われる。踏査時の遺構検出状況等から、低地部は棚田、斜面上方は畑地（いわゆる段々畑）に利用されていた可能性も考えられる。特に後者の畑とみられる耕地面は、造成規模や推測される労働投下量から、自家消費的な作物ではなく、果樹等の比較的換金性の高い栽培作物が想像されるが、それを裏付けるような情報は記録や聞き取りから得られておらず、推測の域を出ない。

また、尾根側に近く耕地跡一帯を見渡せる最上段の平坦面は耕地利用ではなく平場として利用されており、土塁を伴う平場（写真 5.24、図 5.28）、方形

状堅穴石組施設（写真 5.25、図 5.29）が確認されている。なお、耕地跡周辺では本土産近現代磁器が数点程度採集されている。

土塁及び平場跡 上述の耕地跡を見下ろす最上段の平坦面で確認した、土塁及び平場跡である。緩やかな傾斜面を切土することによる壁部及び盛土による土塁に囲まれた平場の平面規模は約 4.5 m × 4.2 m で、南側に開放した造りとなっている。L 字状を呈する土塁の屈曲部分（平場の北東隅）はやや平坦かつ広がっており、周辺には基盤層砕礫（嘉陽層）がやや密に散布した状態にあった。壁と土塁で囲われた平場内を精査した結果、約 2.2 m × 2.1 m の略方形形状プランの落ち込みと、その周囲をめぐる落ち込みを認めた（写真 137、図 5.28）。試掘坑による断面観察でみると検出面からどちらにもきわめて浅い。当該遺構は眼下の耕地跡における生産活動に関わる施設、例えば小屋跡等の可能性が考えられる。なお、遺物は沖縄産無釉陶器壺、同施釉陶器碗等の雑器類が採集されている。



136 平場内の精査作業風景 137 方形プランの遺構確認状況（表土除去後）
138 土塁断面（試掘坑 02 西壁） 139 遺物散布状況（土塁周辺）
写真 5.24 同地点 土塁及び平場跡 遺構確認状況

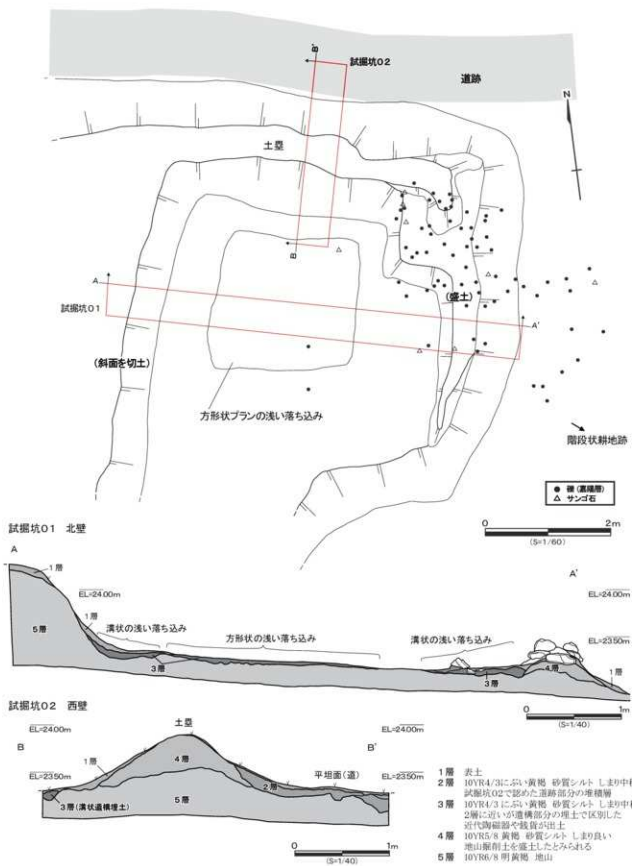


図 5.28 同地点 土塁及び平場跡 平面図・断面図

方形状堅穴石組施設 前述のコ字状に囲われた平場のすぐ東側、階段状耕地跡を見下ろす位置に構築された、平面方形状を呈する堅穴石組施設である。

切土及び盛土により堅穴状に造作後、内壁に野面積みの石積を構築しており、床面に近い下部では扁平な石や珊瑚を立てた状態であった。平面の規模は、堅穴の周囲でおよそ長軸 2.3 × 短軸 2.0 m、堅穴内の床面でおよそ長軸 1.6 × 短軸 1.3 m。半裁後の断面観察から、堅穴を掘り込んだ後に、扁平な石をかなり密に敷き詰め床面を形成している。石積上端から床面まで深さは約 0.5 ～ 0.8 m を測る。

遺構の上を覆う構造物が存在したかは不詳だが、表面精査で柱穴等の痕跡は認めなかった。遺物は堅穴内及び周囲から沖縄産無釉陶器壺やガラス瓶を表面採集したが、掘削過程での出土遺物はなかった。

隣接する平場とあわせて、眼下の階段状耕地跡における生産活動に関わる施設とみられるが、当該遺構の具体的な性格・用途は判然としない。

現場調査の段階では、①便所等の一定期間滞在に直接関わる施設、②堆肥等耕地跡の生産活動に関連する施設、③藍等換金作物の生産関連施設…等の可能性を想定し、遺構内埋土の自然科学的分析も実施したが、上記を証し得る分析結果は得られなかった(p.81 参照)。だが、現場調査後の聞き取り調査で「よその土地から来た人が猪を獲るためにこの辺りに滞在していたと聞いた事がある」との話を伺った。あるいは猪猟の関連施設(例えば屠場等)の可能性も考えられるのだが、いずれの遺構解釈もまだ根拠に乏しく、民俗情報の収集も含めて今後さらなる調査を要する。

なお、県内の過去調査事例では、池原上田原・仕明座原遺跡(沖縄市)において石組土坑の検出事例がある。当該遺跡では屋敷跡の一部と推測されるコ字状の土手に隣接して検出されている点等、今回確認した遺構との類似要素も幾つかあり、興味深い。



140 調査時遺構確認状況

142 床面検出状況

141 遺構半裁後(堅穴石組施設断面)

143 堅穴内壁石積の断面

写真 5.25 同地点 方形状堅穴石組施設

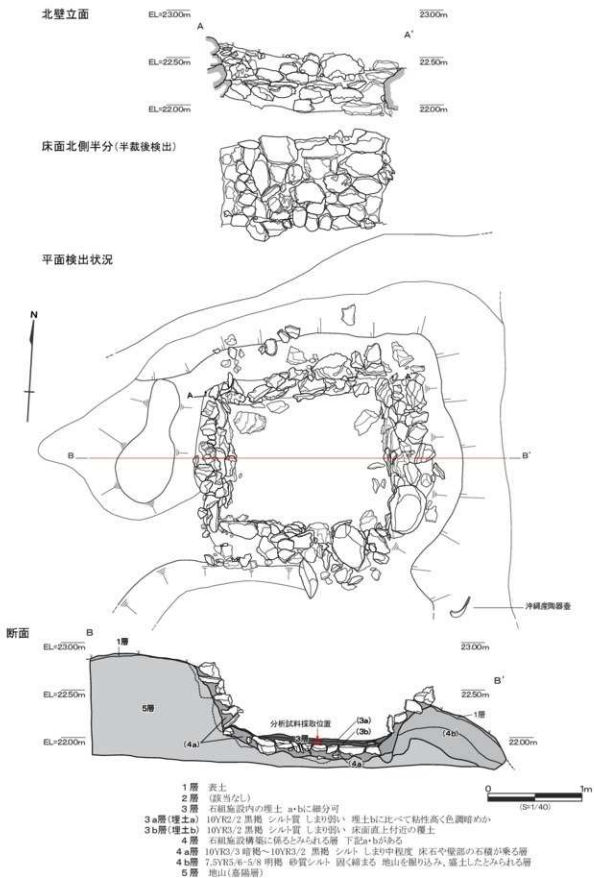


図 5.29 同地点 方形状竪穴石組施設 平面図・断面図

表 5.4 富名田原の階段状耕跡 採集遺物観察表

図位 番号	時期	出土 地点 番	器 種 部 位	観 察 結 果	備 考
図 5.30 38	染付	表面採集	碗 底部	底径 7.0cm 胴部に草花文? 胴部「松の種子」様の文様と磨蝕 内面にも磨蝕	底縁は全体に灰いが濃淡の表現技法を使用 磁胎は灰白色で微細混入物多数
図 5.30 39	沖縄産 施釉陶器	表面採集 (42 の意の内部)	碗 口縁	口径 14.0cm 口縁部わずかに外反	白化磁土+透明釉 網目状の貫入 胎土は黄味がかった灰白色 部分的に微細孔
図 5.30 40	沖縄産 施釉陶器	表面採集 (方形状登六 石組施設内)	碗 底部	底径 6.4cm 見込に蛇の目跡はぎ 量付無釉	白化磁土+透明釉 網目状の細かい貫入 胎土は赤味がかった灰白色 微細孔がまうなく分布
図 5.30 41	沖縄産 無釉陶器	表面採集	壺 口縁	口径 12.0cm 口縁外反 肩口のロクロナデ痕を文様として残す	外面にぶい赤褐色 内面黒味がかった褐灰色 胎土は緑赤褐色 1mm 程度の混入物を離らに含む
図 5.30 42	沖縄産 無釉陶器	表面採集	壺 (残存約 50%)	底径 8.6cm 底面の成形が鈍 胴部にロクロナデの磨痕	外面暗赤褐色 内面赤褐色 灰白色で不定形の磁物を離らに含む

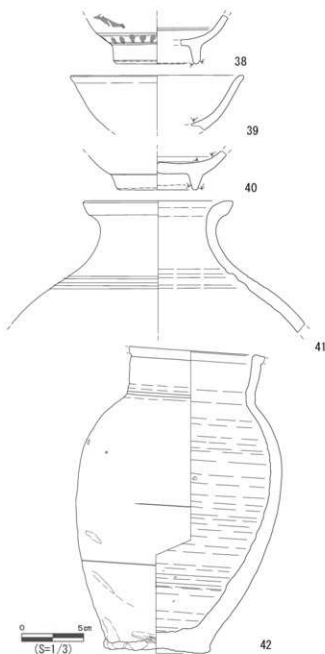


図 5.30 富名田原の階段状耕跡 採集遺物

5.2 富名田原の土塁【14地点】

前述の階段状耕地跡【13地点】の北側約100m、丘陵根尾上のやや広まった平坦な場所で確認した土塁である。急斜面を臨む縁部に沿って走る南北方向の土塁と、一段低い平坦面を見下ろす位置にある東西方向の断続的な土塁からなる。土塁周辺の平地はさほど広くないが平坦に整地された印象を受ける。土塁には構築時に植えられたとみられる竹が残る。

土塁の高さは約0.4～0.5mと比較的低い造りで、土塁で区画された平場内を猪害等から護るといった意図・機能よりも、笹森儀助が『南島探験』に記述*したような土地区画の地表標識の性格が考えられる。あるいは当該地付近での生産活動に伴う小屋等の一時滞在施設の痕跡の可能性も考えられるが、周辺の表面精査で生活雑器ほかの遺物はほぼ皆無であり、その可能性は低いようにも思われる。



144 土塁検出状況

145 土塁検出状況（ヨコ方向から）

写真 5.26 富名田原の土塁 遺構確認状況

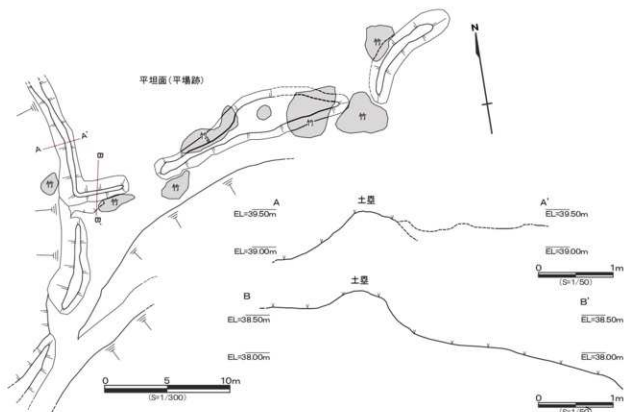


図 5.31 富名田原の土塁【14地点】平面図

*『日本庶民生活史料集成』第一巻所収 p.471

道跡（ハルミチ） 土壘検出地点（14 地点）から南西に 30 ～ 40 m 離れた場所にある、痩せ尾根の頂部に造り出された道（ハルミチ）の跡である。幅員は約 4.0 ～ 4.8 m。南側の路肩には石積が構築される。石積が残る延長距離は約 7 m、高さ約 0.5 ～ 0.6 m。



図 5.32 同地点近くの道跡 断面図

第 6 節 その他

前節まで上流周辺の生産遺跡群の詳細について地区別・地点別に述べてきたが、その他に確認した生産関連施設や関連する事柄を紹介する（写真 5.28）。

金武の導水橋 写真 147 は、現ダム貯水池の近く、ウストゥジガー・ツ斧砥ぎの川原¹⁴⁷の地名がある辺り（小字富田原の北端付近）を通る導水橋の一部である。

この導水橋は、戦後間もない昭和 20 年代、上流の農業ダムから下流域一帯へ水を引くために架設されたもので、高架構造の導水橋（写真 147）や導水溝、導水トンネル等、コンクリート造りの複数の構造物からなる。現在も一部機能している。なお、この導水橋は県内全域を対象に県が実施した近代化遺産（建造物等）総合調査¹⁴⁸でも紹介されている。

宿道跡の土留め石積 写真 148 は、小字奥首原の急な丘陵斜面の中腹で確認した、野面積みの石積である。次章で記述する近世～明治期の主要幹道である国頭方東海道跡（宿道）の推定ルートと重なる場所にある。石積は一部崩壊しているが、幅約 8.2 m、高さは約 1.0 ～ 1.2 m の規模である。石積の背後は礫や土砂で埋まり、勾配が緩くなっている。おそらく、宿道廃絶後に当該箇所を何らかに利用するため斜面を平坦地化する意図で構築された、土留めの石積とみられる。

そのほか生産遺跡群に関わる予備調査として、小字奥首原の億首川の岸辺に近い低地部で水田跡の有無確認のための試掘調査を実施したが、その痕跡を確認することはできなかった（写真 149）。



写真 5.27 富田原の土壘近くで確認された道跡



147 億首川上流で確認した導水橋の一部

148 宿道跡の土留め石積

149 奥首原における試掘調査風景（磁気探査の様子）

写真 5.28 その他上流周辺で確認した遺構及び調査風景

* 前掲 p.40 ～ 41、図 5.3 及び表 5.1 参照。

† 沖縄県教育委員会『沖縄県近代化遺産（建造物等）総合調査報告書』2004 年

付節 遺構埋土の自然科学分析

方形状竪穴石組施設 富名田原地区【13 地点】の方形状竪穴石組施設内埋土のサンプリング試料を分析した結果を表と次ページの図に示す。

花粉分析、植物珪酸体分析および種実分析の結果から、本遺構がイネなどの穀物類や藍などの工芸作物、その他農作物に関連する施設である可能性がほとんどないことが判明した。

また、土壌理化学分析及び寄生虫卵分析の結果、便所やワフルなどの施設の可能性も低いことが分かった（p.76 参照）。

表 5.5 方形状竪穴石組施設内埋土の土壌理化学分析結果

項 目	結 果
土 性	SC
土 色	10YR3/2 黒褐
有機炭素量(%)	5.31
腐植含量(%)	9.16
全素素量(%)	0.49
炭素率C/N	11
全リン酸量 P205 (mg/g)	0.88

- 1) 土性は土壌調査ハンドブック（ペドロジスト懇談会編（1964）の野外土性による。
SC・・・砂質埋土（粘土 25～45%、シルト 0～20%、砂 55～75%）
2) 土色はマンセル表色系に準じた新版標準土色帖（農林省農林水産技術会議監修（1967））による。
3) 腐植含量・有機炭素量に 1.724 を乗じて算出。
4) 炭素率（C/N）：有機炭素量を全素素量で除して算出。

表 5.6 方形状竪穴石組施設内埋土の花粉・寄生虫卵・植物珪酸体分析結果

種 類		3a 層	3b 層
花粉・胞子化石 [計数値 / 試料 10cc]			
木 本 花 粉	ツガ属	-	1
	マツ属	51	46
	不明	157	164
	ヤマモモ属	2	-
	ヒメツバキ属	70	14
	グミ属	-	1
	フトモモ科	-	1
	ウコギ科	2	1
	ツツジ科	-	1
	イネ科	22	4
	カヤツリグサ科	3	-
	キンポウゲ属	-	1
	不明花粉	19	6
	シダ類胞子	91	138
合 計	木本花粉	282	229
	草本花粉	25	5
	不明花粉	19	6
	シダ類胞子	91	138
総計（不明花粉を除く）		398	372
寄生虫卵分析 [計数値 / 試料 10cc]			
寄生虫卵分析		0	0
植物珪酸体分析 [計数値 / 試料 10 μg]			
植物珪酸体分析	イネ科葉部短細胞珪酸体	-	-
	イネ科葉身機動細胞珪酸体	不明	1
	イネ科葉部短細胞珪酸体	不明	0
	イネ科葉身機動細胞珪酸体	不明	1
合 計		1	1
総 計		1	1

表 5.7 方形状竪穴石組施設内埋土の種実分析結果

分 類 群		部位	状態	個数 土壌 100g	個数 土壌 1 kg	備 考
				[「+」を除く]		
木 本	マツ属	種子	完形	1		リュウキュウマツ?
	クワ属	核	完形		3	
	イチジク属?	果実	完形		4	
	ハスノハカズラ	核	完形		5	
	ヒメツバキ(イジュ)	果実	破片		3	
	ソウシジュ	種子	完形		1	近代の移入種
	アカメガシワ	種子	完形	1		
			破片	1		
	ホルトノキ	核	破片		2	
	タラノキ	核	完形		1	
草 本	カヤツリグサ科	果実	完形	1	1	
	ケカラスウリ	近似種	種子		1	
不 明 種 実	A ⁺	完形	132	*		
	B ⁺	完形	4	*		
	その他		1	4		
炭 化 材 [*]	炭 化 材 [*]		+	+		最大径 5mm
	炭 化 材 [*]		+	+		
	炭 化 材 [*]		+	+		
	炭 化 材 [*]		+	+		
	炭 化 材 [*]		+	+		
分析量				100. 2g	1003. 0g	

1) 種実以外は、抽出されたものを「+」で表示した。

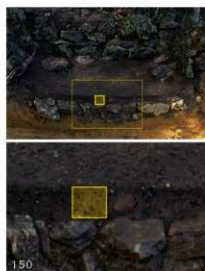


写真 5.29 試料採取位置
(方形状竪穴石組施設埋土)

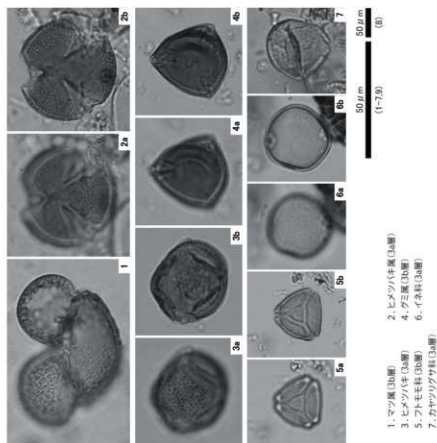


図 5.33 方形状壁穴石組施設内埋土から確認された花粉化石

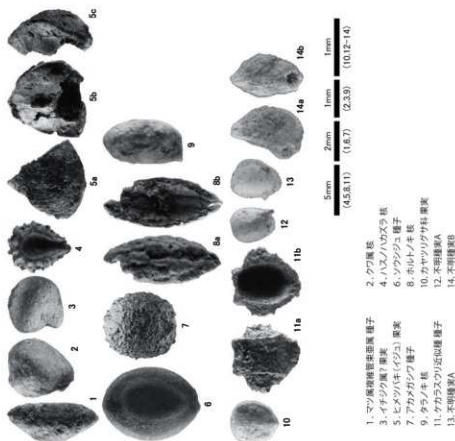


図 5.34 方形状壁穴石組施設内埋土から確認された種実遺体

第VI章 奥首周辺における交通遺跡群の予備調査

第1節 調査の概要及び経過

ウククビ(奥首)は、億首川の中程に位置する、両岸の石灰岩崖の地形景観に由来する地名である。

億首川上流周辺における予備調査に際しては、ダム建設前の航空写真や地籍図等資料を参照しながら踏査を実施した。概要踏査で大正期村道跡及び昭和戦前期アーチ橋(旧億首橋)が良好な状態で残っていることを確認するとともに、町・字誌等の過去調査資料から村道以前の主要幹道である宿道(国頭方東海道)も当該地付近を経由するルートであったと考えられることから、ウククビ(奥首)周辺における国頭方東海道跡(以下、「宿道」という。)をはじめとする各時期の道路遺構の確認作業を実施した。

以下、各時期の遺構ごとに述べる。



写真 6.1 金武ダム建設前のウククビ(奥首)一帯

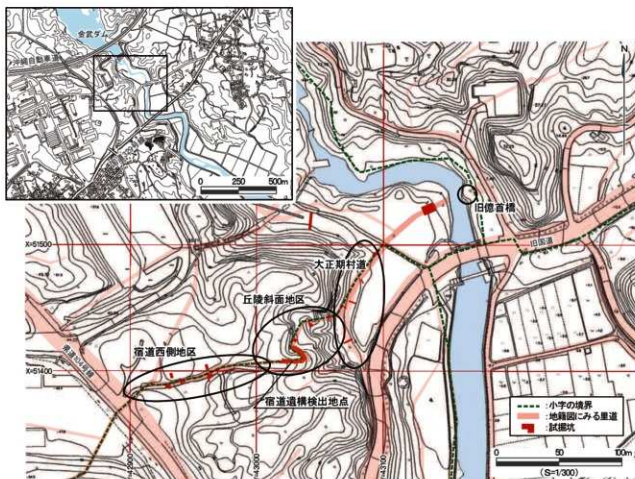


図 6.1 ウククビ(奥首)周辺における調査実施地点

第2節 国頭方東海道跡

2.1 表面踏査 小字奥首原の台地縁辺部、舌状に延びる尾根の先端において螺旋状の坂道を確認した(写真6.2～3)。露頭した石灰岩岩盤をU字状に廻るスロープ状の通路を切り出したイシエラミチ(石ころ坂道)である。

検出遺構の延長距離は約33m、路幅は約2.5m～3.5m、U字状のスロープの高低差は約6m余(尾根上で標高約33.8m、降りた所で約31.5m)を測る。

遺構は、岩盤の表面を壇状に整えたり切石を並べた階段を所々に認める。外縁部の路肩には扁平な石が積み並べられ縁取られており、道の両側に縁石を配する箇所も認める。路面は全体に凹凸が多い印象を受けるが、自然の岩盤を取り入れながら岩盤と岩盤の隙間に扁平な礎石を補い、径数cm大の砕礫が敷かれるなど、路面を整えた痕跡が窺える。

当該地周辺における往時の交通に関する文献史料をみると、明治14(1881)年の県令上杉茂憲の『上杉県令沖縄本島巡回日誌』に「(前略)坂アリ螺旋シテ下ル松木両辺ヲ囲ム 坂尽キル処一溪アリ(後略)」、翌15(1882)年の尾崎三良の巡察記録では、「(前略)峻阪羊腸*、泉夫甚ダ苦ム 峻阪ヲ下リ小流ヲ渡ル(後略)」と、金武番所を出立した一行が険しい難所を経て億首川に到る様子が記述されている。「螺旋シテ下ル」「峻阪羊腸」の描写は、実際に検出された道路遺構の線形や検出地点周辺の地形と合致しており、特記される。なお、上記の上杉県令日誌の記述から松樹が並ぶ往時の姿も窺える。

また、検出地点における道路遺構の線形と地籍図の里道や小字の境界線とが合致しており(図6.1)、周辺における遺構残存範囲やルート推定の手掛かりになる。



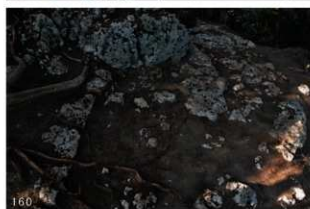
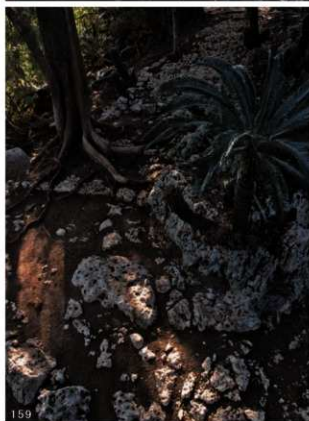
152 踏査時状況

153 概要踏査時遺構確認状況

154 詳細踏査作業風景

155 伐採後に露れた道路遺構の輪郭

写真6.2 国頭方東海道跡検出地点における踏査風景



156 遺構検出状況（上方を臨む）
157 同検出状況（上方から）
158 緑石及び階段部
159 同検出状況（カーブ周辺）
160 カーブ周辺の路面状況
161 スロープを降った箇所

写真 6.3 国頭方東海道跡 遺構確認状況

2.2 試掘調査(丘陵斜面地区) 遺構検出地点の下方に続く丘陵斜面地(以下、「丘陵斜面地区」という。)において、現況地形や地籍図等から想定される宿道(国頭方東海道跡)の延長線上で遺構の残存状況を確認するため、試掘坑01～04を設定した(図6.5)。**基本層序** 丘陵斜面地区の試掘調査では1～6層を認めた。周囲地形や鍵層と考え得る礫集中面等から、下記①～④に整理できると考えるが、丘陵斜面地での小規模な試掘でもあり、現段階での暫定的な理解

としておく。

- ① 表土や高所からの崩積土、宿道廃棄後の掘削の影響を認める層 … 1～2層
- ② 上方で確認した宿道遺構と連続あるいはその関連性が考えられる礫集中面のある層 … 3層
- ③ 上記の礫集中面より以前の層 … 4～5層
- ④ いわゆる地山 … 6層

以下、試掘坑01から順に述べていく。

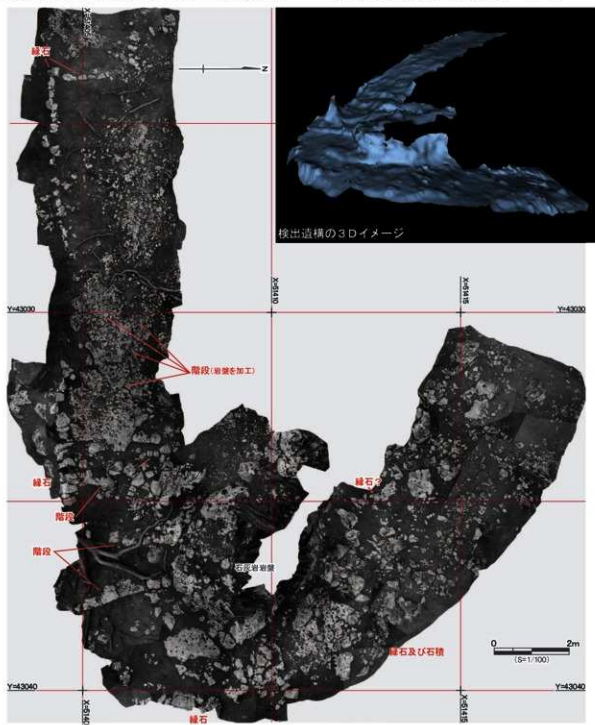
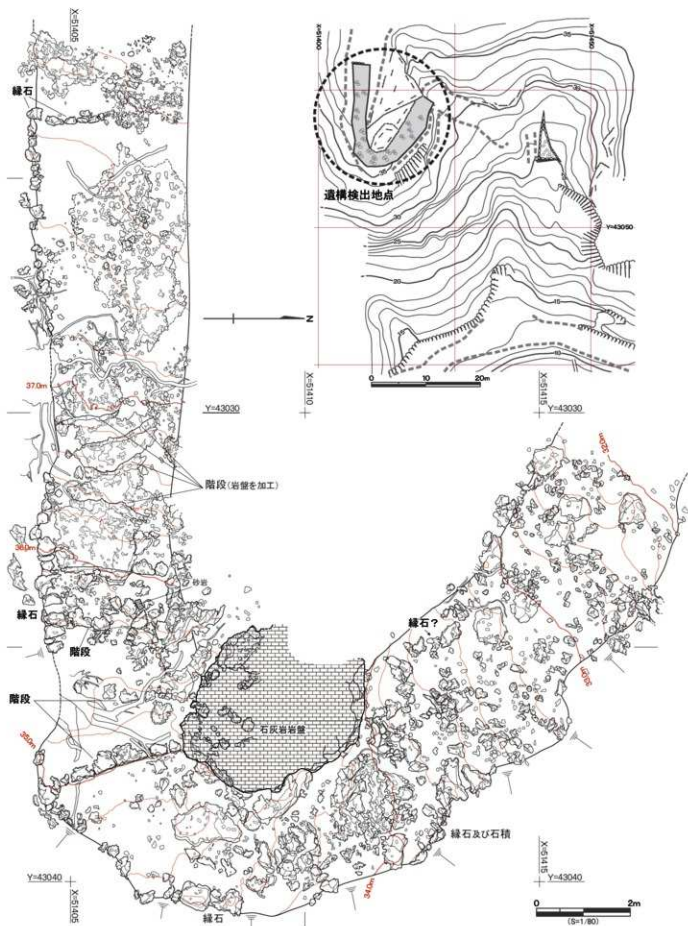


図 6.2 国頭方東海道跡 遺構確認状況(オルソ補正画像)



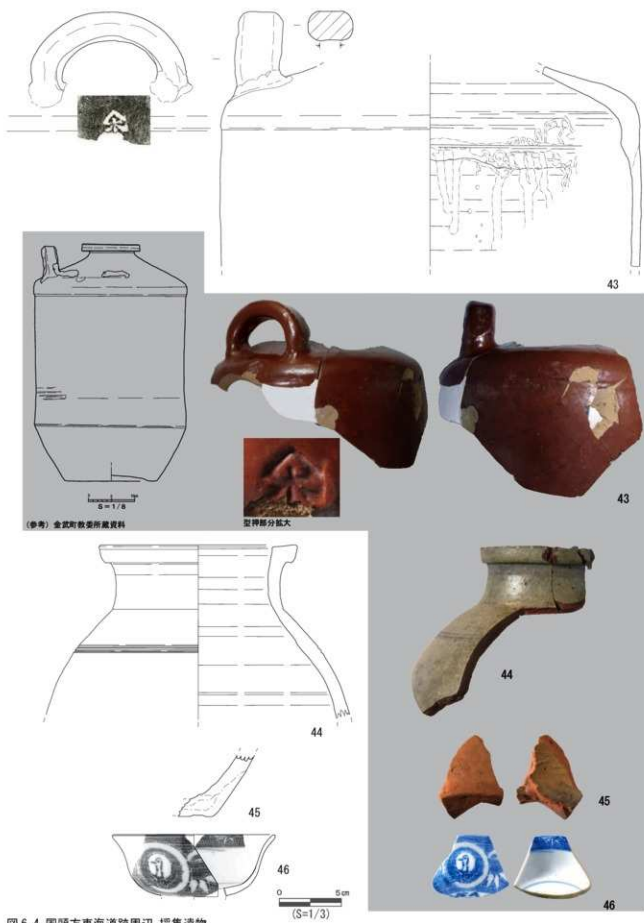


図 6.4 国頭方東海道跡周辺 採集遺物

表 6.1 国頭方東海道路周辺 採集遺物観察表

図版番号	種類	出土 場所	器 材 部 位	観 察 結 果	備 考
図 6.4 43	本土産 無釉陶器 (片断等?)	表面採集	壺 胴部	胴径 34.2 cm 肩口から口縁へずぼまる 胎土灰褐色で灰白色の磁物含む	把手が1個でその下部に型押 内外面ともにぶい赤褐色の釉 外面は先沢があり厚い
図 6.4 44	沖縄産 無釉陶器	表面採集	壺 口縁	口径 16.2 cm 肩口に口口回転を利用した2条の線 胎土粘赤褐色 白っぽい微細な混入物少量	外面薄い黄褐色の釉で弱い先沢 内面無釉で赤褐色
図 6.4 45	沖縄産 無釉陶器	表面採集	壺? 底部	器色は黄褐色ともにぶい褐色だが内面一部黒褐色 内面はナメ肌	胎土に黒っぽい混入物を確らに含む
図 6.4 46	本土産 印判手	表面採集	壺 口縁	口径 13.0 cm 地反鏡 胎土は白色 微細な混入物	外面口縁一帯部に基調の粗い点描 白旗きで鉄丸・松・竹

試掘坑 01 (図 6.6・写真 6.4) 前述の宿道遺構に隣接する位置に設定。表土と腐葉土を剥くとすぐに石灰岩の岩盤及び地山に達し、細かい礫を敷く等の痕跡等は認められなかった。いわゆる土道なのか。

試掘坑 02 (図 6.7・写真 6.5) 先に検出した岩陰露頭部におけるスロープ状の道路遺構を降つてすぐの斜面地、岩陰墓(後述の O-01 号墓)*の前方付近に設定した。

地表面下約 20cm で人頭～拳大程度に割られた扁平な石灰岩礫や細かい碎礫が敷かれたように密集する面(礫集中面)を検出した。先行掘削による断面観測の結果、礫集中面は地山面に乗るようにしてあり、レンズ状の粗密を認める。なお、出土遺物は得られていない。

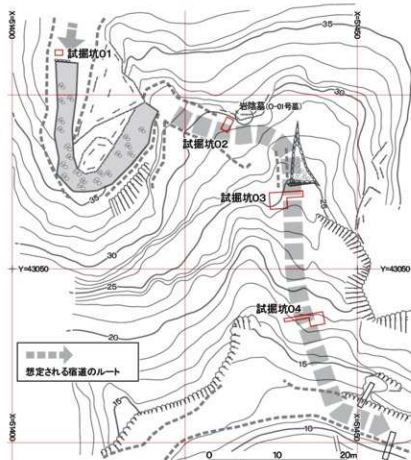


図 6.5 宿道遺構検出地点及び丘陵斜面地区試掘調査地点

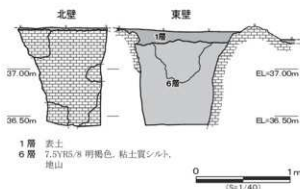


図 6.6 試掘坑 01 壁面



写真 6.4 試掘坑 01 (東壁)

* 第 VII 章第 3 節 (p.110) 参照。

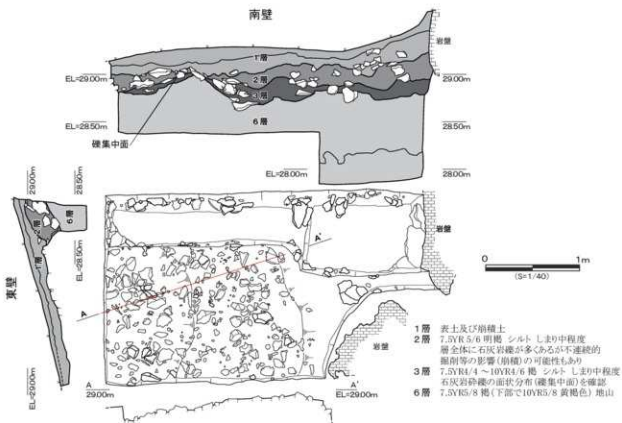


図 6.7 試掘坑 02 遺構検出状況及び試掘坑壁面



163 試掘調査作業風景



164 機集中面確認状況(北側から)



165 先行試掘による断面観察(西壁)

写真 6.5 丘陵斜面地区の試掘調査(試掘坑 02)

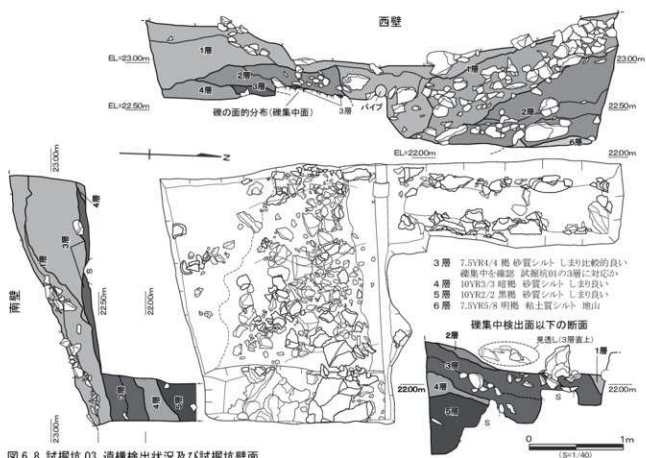


図 6.8 試掘坑 03 遺構検出状況及び試掘坑壁面



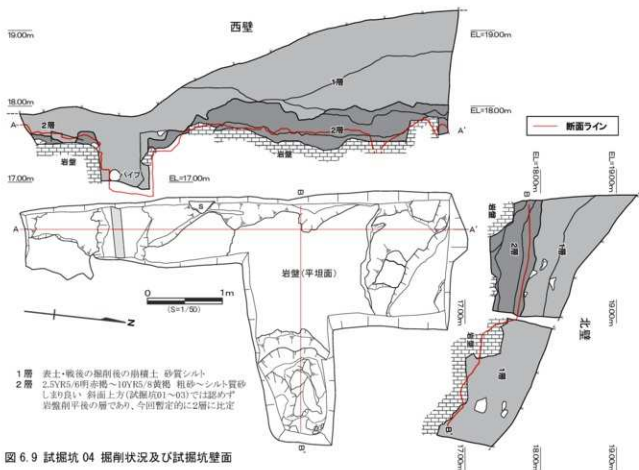
166 戦後掘削による攪乱状況

167 試掘調査作業風景

168 礫集中面確認状況(北側から)

169 遺物出土状況(4層下位付近)

写真 6.6 丘陵斜面地区の試掘調査(試掘坑 03)



170 試掘坑 04 西壁 172 西壁及び北壁
171 岩盤削平面確認状況

写真 6.7 丘陵斜面地区の試掘調査 (試掘坑 04)

試掘坑 03 (図 6.8・写真 6.6) 斜面の中程にある、宿道廃絶後に構築されたとみられる石積の脇に設定。表土や高所からの崩積土の下で扁平な石灰岩礫や角礫が多くあるが、いわゆる「起きた」礫も多々みられることから、後世の掘削後再び積み重なった結果と思われる(2層)。限られた範囲だが斜面上方の試掘坑 02と同様なありかたの礫集中面も確認した(3層)。先行試掘では礫集中面より下層(4層)から遺物(沖繩産施釉陶器・灰釉碗)が出土、その下位には黒色味を強く帯びた層(5層)もある。

試掘坑 04 (図 6.9・写真 6.7) 大正期村道跡に近い丘陵裾付近の斜面に設定。試掘坑 02・03で認めたような礫集中はみられなかった。厚い客土や崩積土の下層には斜面上方でみられなかった砂質の層があり、石灰岩岩盤に至る。岩盤上面がほぼ水平にある

状況は人為的な削平によるものと推されるが、道跡に関連するものか、その後(宿道廃絶後)の掘削の結果なのか、今後より詳細な確認を要する。なお、上記のどちらの場合でも岩盤を覆う砂質の層は宿道廃絶後の時期と理解できるため今回は2層で扱った。



写真 6.8 遺物出土状況 (試掘坑 03、4層)

表 6.2 宿道周辺試掘調査 (丘陵斜面地区) 出土遺物観察表

図版番号	種類	出土地点	器種部位	観察結果	備考
図 6.10 47	沖繩産施釉陶器	試掘坑 03 3層	碗口縁	淡褐色 灰釉碗 口径 13.6 cm 釉色は暗オリーブ色 光沢あり	層から下がわずかにすばまる 胎土は磁器質で淡黄色
図 6.10 48	貝	試掘坑 03 4層	——	クモガイ 殻高 12.1 cm 形状突起は途中から欠損するのが多い	内唇から結節にかけての体層が欠損

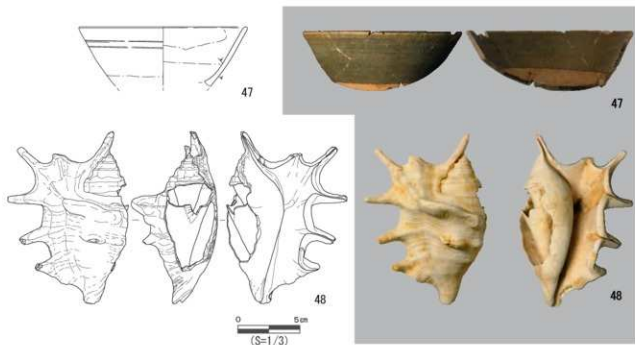


図 6.10 宿道周辺試掘調査 (丘陵斜面地区) 出土遺物

2.3 試掘調査(宿道西側地区) 宿道検出地点の西側に延びる尾根上の平坦地(以下、「宿道西側地区」という。)は地籍図で里道を認め、戦後も農道として使われ続けた場所である。この里道は上杉県令日誌*で「開墾シタル曠漠ノ圃アリ 皆蕃薯ヲ栽ユ」と記された、金武集落北方の広大な台地(現キャンプ・ハンセン)に続く。また、億首川下流周辺における縄文時代晩期相当やグスク時代初期の遺物採集地と同様な立地(石灰岩台地の縁辺部)にあることから、宿道以前に遡る未確認の遺跡がないか確認する必要がある。

当該地区では旧道(里道)を検出した後に、宿道に連続あるいは関連する遺構及びそれ以前の遺跡の有無を確認するための試掘調査を行った。

基本層序 当該地区では以下の4枚を基本とする。

- 表土、掘削造成による客土及び後世の掘削の影響を認める層 ……1～2層
- 遺構確認面を含む遺構埋没後の層(掘削の影響は及んでいないとみられる) ……3層
- 地山 ……4層



174 宿道遺構検出地点から西側地区を望む

175 宿道西側地区 旧道跡(里道)検出状況

写真 6.9 宿道西側地区現況及び旧道確認状況

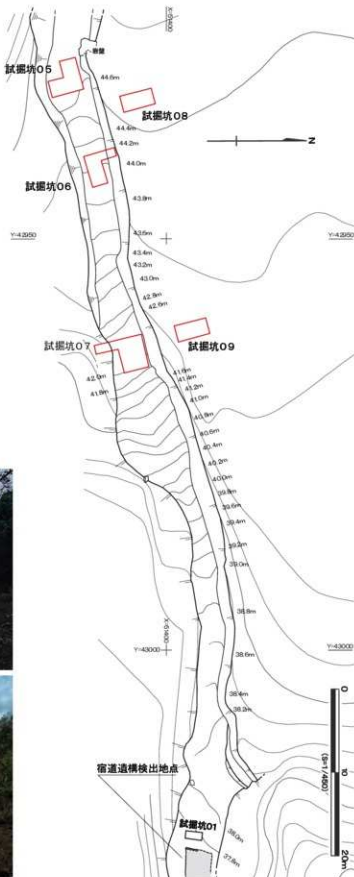
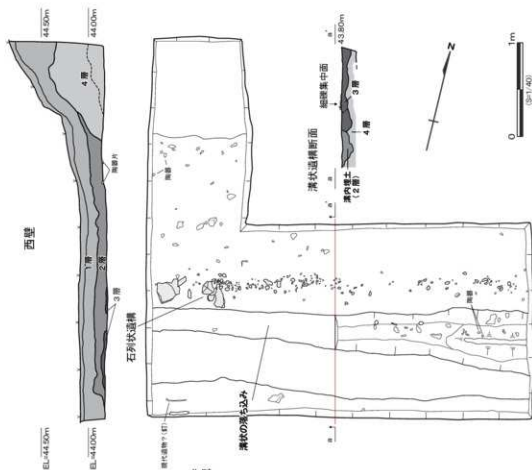


図 6.11 宿道西側地区 旧道検出状況及び試掘調査地点



- 1層 赤土、造成等による客土
 2層 10YR4/2 灰褐色の土質で、土の上部に細砂
 3層 10YR4/3-14 において、源層へ砂、砂質シルト、土の厚さ
 4層 7.5YR5/6 明褐色～10YR4/6 褐色、地山（丘陵斜面地区のB層に対応）

図 6.13 試掘坑 06 遺構検出状況及び試掘坑壁面

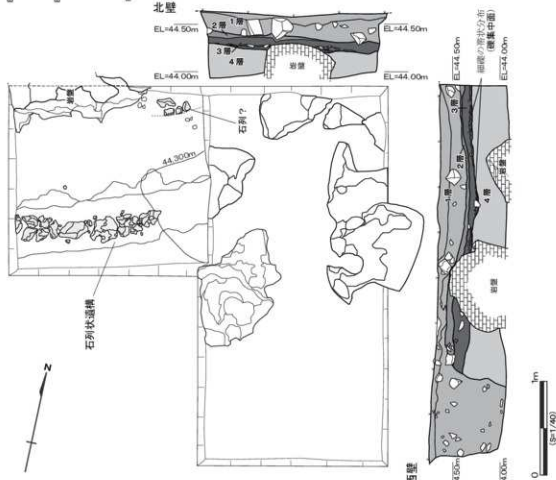


図 6.12 試掘坑 05 遺構検出状況及び試掘坑壁面



176 試掘坑 05 西壁及び北壁

177 同上 砂礫集中面、石列状道構検出状況

179 試掘坑 07 西壁

181 同上 (溝状道構付近拡大)

178 試掘坑 06 石列道構等確認状況 (奥に試掘坑 05)

180 試掘坑 08 試掘調査風景

182 旧道跡現況測量 作業風景

写真 6. 10 宿道西側地区における試掘調査風景及び道構確認状況

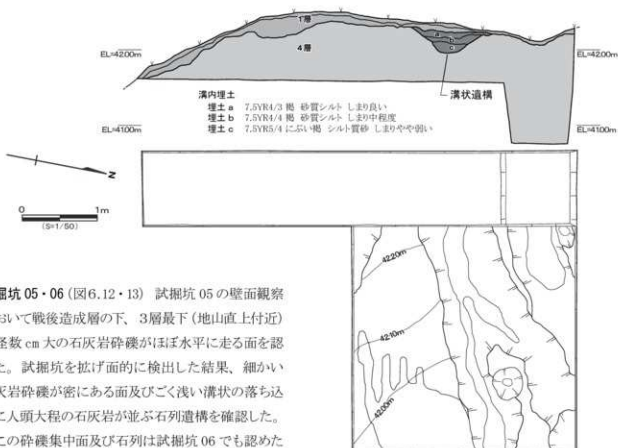


図 6.14 試掘坑 07 遺構確認状況及び試掘坑壁面

試掘坑 05・06 (図 6.12・13) 試掘坑 05 の壁面観察において戦後造成層の下、3 層最下 (地山直上付近) で径数 cm 大の石灰岩砕礫がほぼ水平に走る面を認めた。試掘坑を掘り進めた結果、細かい石灰岩砕礫が密にある面及びごく浅い溝状の落ち込みに人頭大程の石灰岩が並ぶ石列遺構を確認した。

この砕礫集中面及び石列は試掘坑 06 でも認めたが、さらに東側の試掘坑 07 では確認できなかった。壁面観察等から砕礫集中面・石列遺構は、地山を削平した面に乗るかたちであり、時期差はない印象を受ける。なお、試掘坑 06 では遺構検出面を切るように走る溝状の落ち込みも認められた (轍の跡?)。

上記の砕礫集中面・石列遺構が所期の目的である宿道 (国頭方東海道) の関連遺構であるのか、試掘調査段階では言及は難しく、さらなる検討を要する。なお、遺構検出面付近において沖縄産陶器破片や鉄釘等が出土している。

試掘坑 07 (図 6.14) 地山に (あるいは地山に達するまで) 掘り込まれた断面 V 字状の溝を認めた。溝内埋土の観察では底付近は粒径粗いことから排水溝の可能性も考えられる。遺物は得ていない。

試掘坑 08・09 (図 6.15) 旧道跡 (里道) 北側にある一段高まった平坦地に設定。試掘坑 09 では隣の試掘坑 07 と同様、地山に掘り込まれた溝状の落ち込みを認める。ただ、地山まで削平が及んでおり、遺物包含層や遺物を確認することは適わなかった。

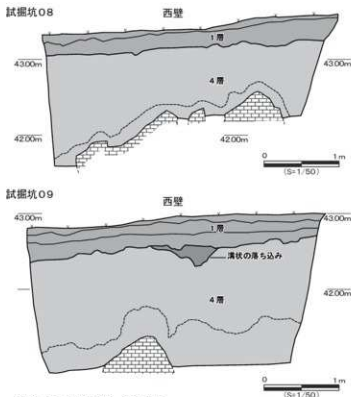


図 6.15 試掘坑 08・09 壁面

表 6.3 宿道西側地区 出土遺物観察表

図版番号	図 6.16 49
種類	牛セル
出土 地点 / 層	試掘坑 05 / 3 層
器種 / 部位	/ 瓶口
観察結果	真鍮製 長さ 7.6cm 最大外径 1.1cm
備考	

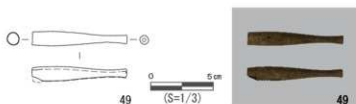


図 6.16 宿道周辺試掘調査（宿道西側地区）出土遺物

第3節 大正期村道跡

宿道検出地点から丘陵斜面を降った個所（億首川右岸の丘陵裾付近）にある村道跡である。概要踏査の初期において、地表面に村道の名残が良好に残る状況を確認した（写真 6.11）。この村道は後に触れる旧億首橋の方向へ延びていたとみられるが、川岸周辺は既に掘削造成されており、残存範囲は丘陵裾付近に限られた状況である。伐採清掃の結果、延長距離約 80m の範囲で確認した（図 6.17）。

資料に拠れば、1921～23（大正 10～12）年、屋嘉-古知屋（現宜野座村字松田）間の村道改修により開通した村道は、その後 1925～30（大正 14～昭和 5）年における村内河川の橋梁架設事業に伴って、道路も拡張整備され、郡道になったと記されている*。



183 概要踏査時現況
185 村道跡に隣接した塚跡？古墓？



写真 6.11 大正期村道跡周辺現況

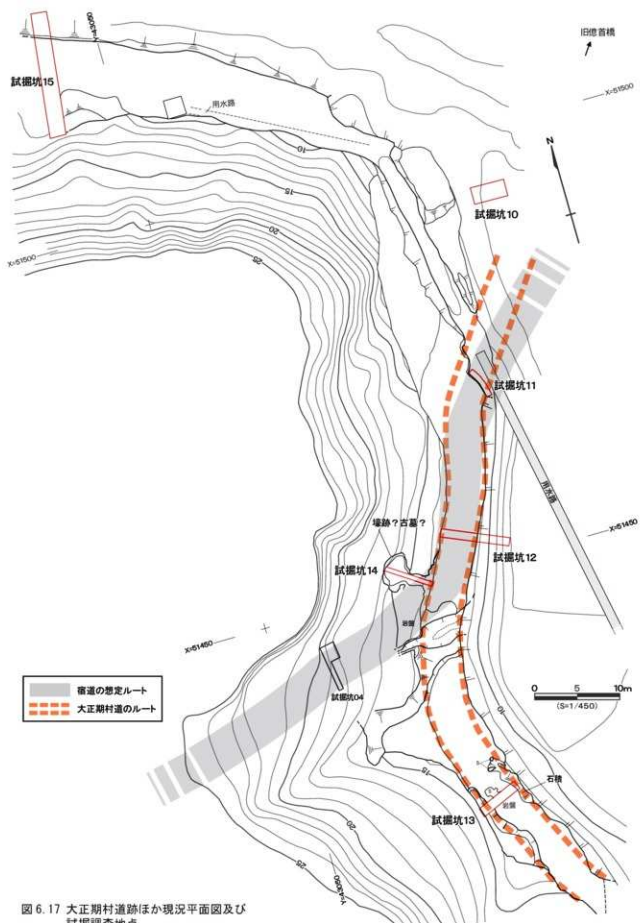


図 6.17 大正期村道跡ほか現況平面図及び
試掘調査地点



187 伐採清掃後の村道跡

188 用水路溝の壁面精査による遺構確認状況

189 試掘坑 12 東壁

190 試掘坑 12 東壁（部分拡大）

191 試掘坑 13 西壁

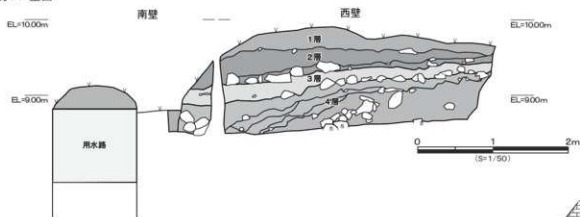
192 路肩保護の石積残存状況（試掘坑 13）

193 試掘坑 15 での道跡確認状況

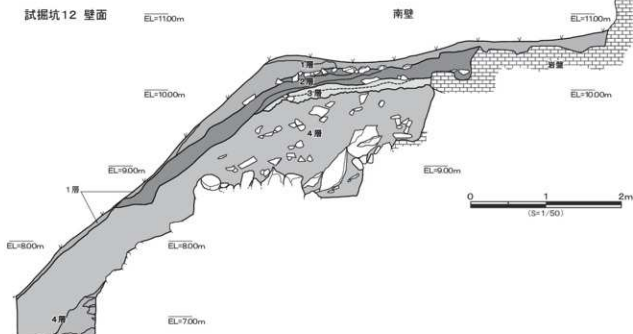
194 同 道跡確認状況及び東壁

写真 6.12 大正期村道跡ほか試掘調査（試掘坑 11～13 及び試掘坑 15）

試掘坑11 壁面



試掘坑12 壁面



試掘坑13 壁面

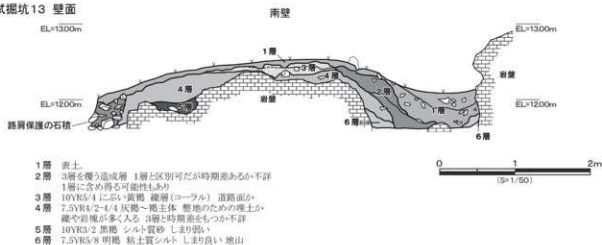
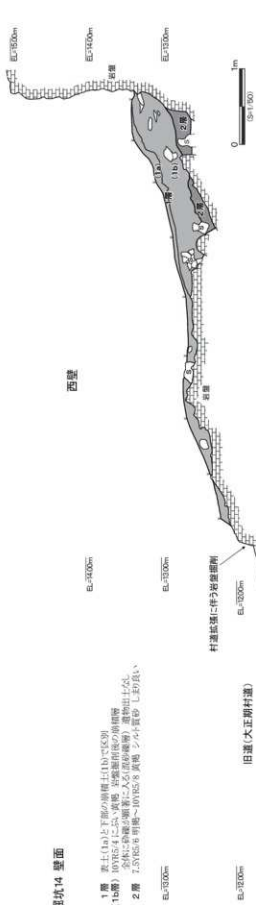


図 6.18 大正期村道跡 各試掘坑壁面 (試掘坑 11～13)

試掘坑14 壁面

- 1層 赤土 (1a)と下部の黒褐色(1b)で区別
(11層) 10YR5.4/1に近しい黄褐色 片礫混在の赤褐色
全体に砂礫と顕著に入る(厚約10cm) 遺物出土なし。
2層 7.5YR5.6 明黄～10YR5.8 黄褐色 シェルト質砂 しおり良い。

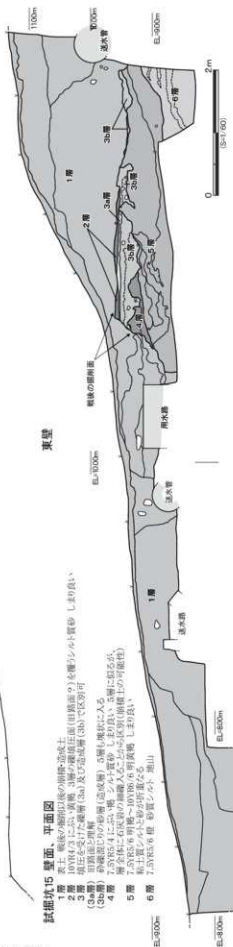
西壁



試掘坑15 壁面、平面図

- 1層 赤土 戦後の地盤改良の崩壊・造成土
2層 赤土 戦後の地盤改良の崩壊・造成土
3層 赤土 戦後の地盤改良の崩壊・造成土
4層 赤土 戦後の地盤改良の崩壊・造成土
5層 赤土 戦後の地盤改良の崩壊・造成土
6層 赤土 戦後の地盤改良の崩壊・造成土

東壁



(新遺物層用レンチ)

旧遺物(遺物)
3A層出土品

図 6.19 試掘坑 14 壁面、試掘坑 15 壁面及び旧道確認状況

第4節 昭和戦前期アーチ橋（旧億首橋）

1931（昭和6）年に竣工したコンクリート造りのアーチ型橋である。1945（昭和20）年3月、米軍の沖縄本島上陸前に旧日本軍の指示により破壊された。周辺には破壊された際の残骸が現在もなお残り、かつての戦争の記憶を留めた戦跡（いわゆる戦争遺跡）である。

コンクリート造りだが、それ以前の伝統的な石造のアーチ橋の構造も

取り入れられているとみられ、戦前の沖縄における建造技術史の観点でも貴重な実資料といえよう。残存する遺構は億首川左岸に残る橋台部で、道路の幅は5.0 mを測る。



写真 6.13 戦前の旧億首橋

なお、橋台残存部の対岸において遺構の残存を確認するため試掘調査を実施したが（写真198）、戦後の掘削造成が地下深くまで及んでおり、道路関連遺構及びその痕跡の確認は適わなかった。



196 旧億首橋確認状況



197 旧億首橋遺構精査後の状況



198 対岸部における試掘調査風景

写真 6.14 旧億首橋確認状況及び試掘調査

第七章 億首川流域における古墓調査

第1節 調査概要と墓分布状況

ウクビ(奥首)周辺より下流の地域を対象に古墓の分布調査を実施した。調査に際しては現況地籍図や町史・字誌等資料を参照しながら、伐採を伴わない概要踏査の範囲で確認作業を実施した。

確認した古墓は、位置情報(平面座標及び標高値)や立地、現況の記録、墓の構築状況や規模、被埋葬骨や関連遺物の有無等の観察を行った。位置(座標)はなるべく墓口前の中央で計測し、規模や構造に関する数値については、墓口は横幅・高さ、墓室は幅・高さ・奥行、墓庭は幅・奥行を計測した。古墓の名称については、所在地(小字・原)のアルファベット頭文字を冠して連番を付するかとした。億首川周辺における古墓分布調査はまだ途上であり(未踏査区域もあり)、将来の追加も十分予想されるた

めである。

今回確認した古墓は計21基を数える。内訳は、比嘉原地区8基、奥首原地区1基、甘喜原地区2基、飛留喜田原・頭呂地原地区11基である。古墓の形態や構築状況を概観すると、岩陰を利用した墓が殆どである。

以下、地区別に踏査時の各計測値・観察メモをカード形式で示す。

なお、位置情報の座標は平面直角座標第XV系(世界測地系、単位はm)、規模の単位はmを用いる。

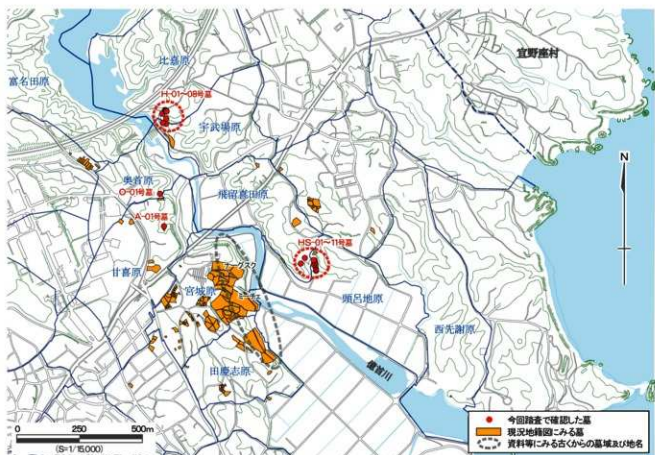


図 7.1 億首川周辺の墓分布状況(地籍図との重ね図)

第2節 比嘉原地区

ウククビ(奥首)の北東、現金武ダム堤体の東側に位置する丘陵斜面一帯で確認された岩陰利用を主とした古墓群である。今回の踏査では計8基を確認した。分布する範囲は小字宇武場原に跨るが、分布状況には粗密を認め、H-05～09号墓は隣り合うように構築されている。



写真7.1 比嘉原地区遠景

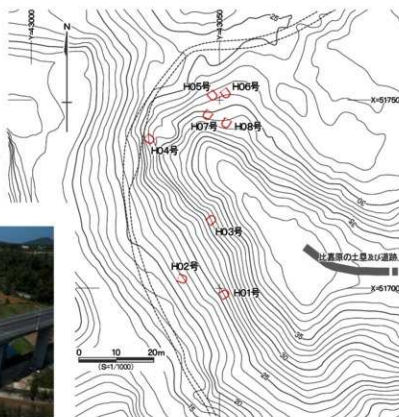


図7.2 比嘉原地区 墓分布状況

H-01号墓

位置 X: 51697.79
Y: 43051.26
Z: 25.52

立地 丘陵中腹に露頭した石灰岩

墓口の向き 南西

墓の形態 岩陰墓(墓室を開口部の前まで拡張)

規模 墓口 W: 0.8 H: 0.7 D: —
墓室 W: — H: — D: —
墓庭 W: — H: — D: —

人骨 —

遺物 —

高さ約2.7mを測る切り立つ露頭石灰岩の岩陰を利用した墓である。墓室は野面積みの石積で囲まれ、前方にせり出した外観となっている。上部(屋根)は岩陰と石積の間に石灰岩を掛けたとみられ、表面はモルタルで平滑に仕上げられている。墓口を塞ぐのに板状のコンクリート材が用いられている。踏査では墓室内に人骨や遺物を認めなかった。



写真7.2 H-01号墓
200 南から
201 北から

H-02 号墓

位 置 X: 51702.06
Y: 43040.00
Z: 22.35

立 地 丘陵中腹の傾斜地

墓口の向き ー

墓の形態 岩陰墓? (露頭岩盤の岩陰を利用か)

規 模 墓 口 W:ー H:ー D:ー
墓 室 W:1.5 H:ー D:1.5
墓 庭 W:ー H:ー D:ー

人 骨 ー

遺 物 近現代陶磁器 (花生)

01 号墓から北西方向に約 12m の位置する。露頭した石灰岩岩盤を利用した墓とみられる。石灰岩を用いた野面積みの石積で側壁を築いた後、モルタルを塗り平滑に仕上げている。上部 (屋根) は石灰岩を砂利・モルタルで繋ぎ覆っていたとみられる。本来は墓口が設けられていたと思われるが、損壊した現状では確認できなかった。



202 南から
203 西から
写真 7.3 H-02 号墓

H-03 号墓

位 置 X: 51719.18
Y: 43052.54
Z: 31.47

立 地 丘陵中腹に露頭した石灰岩

墓口の向き 南西

墓の形態 岩陰墓

規 模 墓 口 W:0.6 H:1.0 D:0.3
墓 室 W:ー H:ー D:ー
墓 庭 W:2.6 H:ー D:3.9

人 骨 ー

遺 物 ー

立面で約 4.6 m を測るほぼ直立した岩壁の窪みを利用した墓である。02 号墓から北東約 18m の位置にある。岩陰の前方に面を整えた石灰岩を丁寧に組み、墓室を造り出している。墓室上部には直方体様に整えた石材を掛けており、モルタル塗布で平滑に仕上げている。墓口を塞ぐ石も石灰岩を用いており、角が欠損しているが、本来は墓口にびたりとはまる形状であったと思われる。



204 南西から
205 北西から
写真 7.4 H-03 号墓

H-04号墓

位 置 X: 51738.87
Y: 43036.14
Z: 25.60

立 地 丘陵中腹に露頭した石灰岩

墓口の向き 北西

墓の形態 岩陰墓

規 模 墓 口 W:— H:— D:—
墓 室 W:— H:— D:—
墓 庭 W:1.4 H:— D:3.2

人 骨 —

遺 物 沖繩産無釉陶器（小型壺）

丘陵崖下の岩陰を利用したとみられる墓で、03号墓から北西に約30m、05号墓から南西約20mに位置する。墓室部における掘込の有無は踏査段階の観察では不詳。墓口は本来、野面積みの石積と砂利を練り合わせたモルタルで塞がれていたとみられるが、一部損壊し開口している。墓室内に人骨や遺物はみられない。墓前方のやや窪んだ箇所は墓庭とみられ、蔵骨器破片が墓庭周辺に散布する。01号墓とほぼ同じ標高にある。



206 北西から
207 遺物散布状況
写真 7.5 H-04号墓

H-05号墓

位 置 X: 51752.08
Y: 43048.17
Z: 28.60

立 地 丘陵中腹に露頭した石灰岩

墓口の向き 北西

墓の形態 岩陰墓

規 模 墓 口 W:— H:— D:—
墓 室 W:— H:— D:—
墓 庭 W:— H:— D:—

人 骨 —

遺 物 陶器片、ガラス製瓶・コップ

舌状に延びた丘陵先端部に露頭した石灰岩の岩陰を利用した墓である。墓口には野面積みの石積があり、一部崩れている。墓室内ではガラス瓶1点があったのみだが、墓の前方には沖縄産陶器等の破片が多量に散布している。



208 北西から
209 遺物散布状況
写真 7.6 H-05号墓

H-06 号墓

位置 X: 51751.97
Y: 43050.53
Z: 29.06

立地 丘陵中腹の傾斜地

墓口の向き 北西

墓の形態 露頭した石灰岩を利用した墓

規模 墓口 W: 0.6 H: 0.8 D: —
墓室 W: — H: — D: —
墓庭 W: — H: — D: —

人骨 —

遺物 ガラス製コップ

露頭した石灰岩を利用したとみられる墓で、05号墓の東側に隣接する。墓口に据えられた平滑な面のある石は墓の外観を見栄え良く見せ、角ばった型が残るモルタル塊は露頭した岩と墓口を塞ぐ石の上に載せられて屋根になる。これらは、外部から持ち込み墓の構成材の一部として二次利用した可能性もある。側壁は、墓口の石のサイズに合わせて野面積みで築かれており、石積の隙間をモルタルで埋めている。



210 北西から
211 周辺の墓分布状況
写真 7.7 H-06 号墓

H-07 号墓

位置 X: 51749.58
Y: 43048.75
Z: 31.09

立地 丘陵中腹に露頭した石灰岩

墓口の向き 北東

墓の形態 岩陰墓(墓口を閉じる石を付けたもの)

規模 墓口 W: 0.6 H: 1.0 D: —
墓室 W: — H: — D: —
墓庭 W: — H: — D: —

人骨 —

遺物 墓室内に陶磁器(小型の陶製家形蔵骨器)

06号墓を見下ろす位置に構築された岩陰利用の墓である。岩陰の窪みに合わせるように墓口を塞ぐ石と側壁の石積が配置され墓室が造り出されている。墓口に据え置かれた板状の石は、06号墓と同様に二次利用の可能性もあり、墓の外観を引き立たせている。側壁は野面積みの石積みで、隙間はモルタルで埋められている。線香を供えるためか墓口の前はモルタルで平滑に整えられている。墓室内には陶製の家形蔵骨器が1基みられた。



212 北東から
213 墓室内における蔵骨器確認状況
写真 7.8 H-07 号墓

H-08 号墓

位 置 X: 51747.91
Y: 43051.01
Z: 31.76

立 地 丘陵中腹に露頭した石灰岩

墓口の向き —

墓の形態 岩陰墓(岩陰内に石積を囲んだもの)

規 模 墓 口 W:— H:— D:—
墓 室 W:— H:— D:—
墓 庭 W:— H:— D:—

人 骨 —

遺 物 陶磁器

石灰岩の岩陰を利用した墓で、07号墓の東側に隣接してある。墓室は、岩陰の一部をドーム状に覆うように野面積みの粗雑な石積が築かれている。石積には自然礫の他にコンクリートブロックも用いられていることから、時期的にさほど古くないように思われる。石積の隙間をモルタルで埋めている。墓の前方にはモルタル製の香炉状の台が設置される。墓は03・07号墓とほぼ同じ標高にある。



214



215

214 西から
215 北から

写真 7.9 H-08 号墓

第3節 奥首原地区・甘喜原地区

前節の比嘉原地区と億首川を挟んで対岸に位置し、台地縁辺部の急斜面が連続する地域である。前章で述べた国頭方東海道跡に隣接する個所で岩陰墓1基、南側(甘喜原)の緩斜面地で岩陰利用とみられる古墓1基を確認した。対岸の比嘉原地区では丘陵斜面に連続的に古墓を認めたが、小字奥首原及び甘喜原で確認した古墓はそれぞれ単独で構築されており、比嘉原におけるありかたとは対照的である。



216



217

216 奥首原地区
217 甘喜原地区

写真 7.10 奥首原及び甘喜原地区遠景

○-01号墓

位 置 X: 51430.23

Y: 43029.98

Z: 27.90

立 地 丘陵中腹に露頭した石灰岩

墓口の向き 南南東

墓の形態 岩陰墓(岩陰前方を石積で囲むもの)

規 模 墓 口 W:— H:— D:—

墓 室 W:1.9 H:1.1 D:2.0

墓 庭 W:— H:— D:—

人骨・遺物 —

露頭岩盤の岩陰を利用した墓である。一部を野面積みの石積で囲むことで墓室を造り出している。石積の一部には漆喰の塗布を認める。石積は本来、開口部を覆う高さまで積まれていた可能性もある。墓室内、墓周辺に人骨や遺物を認めなかったが、国頭方東海道跡に接する場所にある点で特徴的である。ウククビー帯に関する聞き取り調査で、「宿道が通る坂にヤマトンチュ(大和人)墓と呼ばれる古墓があった」との話があり、県による「歴史の道」調査報告書でも同様な記述を認める*。宿道検出地点の周辺で確認した古墓はこの1基のみであり、上記のヤマトンチュ墓に該当する可能性も高く考えられる。対岸の比嘉原地区における05・06号墓とほぼ同じ標高に位置する。

A-01号墓

位 置 X: 51284.77

Y: 43044.71

Z: 31.08

立 地 丘陵中腹に露頭した石灰岩

墓口の向き 南西

墓の形態 岩陰墓(岩陰前方に石積で墓室及び墓口を構成)

規 模 墓 口 W:0.6 H:0.8 D:0.6

墓 室 W:1.8 H:1.2 D:1.6

墓 庭 W:2.4 H:— D:3.1

人 骨 —

遺 物 沖縄産無釉陶器(蔵骨器?)

緩い斜面地に露頭した石灰岩岩盤の岩陰を利用したとみられる古墓である。墓口を形作る切石を積んだ後、大小の石を丁寧に組み合わせた外観である。墓口前方の庭を囲むように両側には野面積みの低い石積が構築される。墓庭周辺には蔵骨器とみられる沖縄産無釉陶器壺や蓋破片等の散布を認める。墓口を塞ぐ石は取り外されており、墓室内の観察も可能。対岸の比嘉原地区03号墓及び07・08号墓とほぼ同じ標高に位置する。



218 南東から
219 石積内(墓室内)の様子
写真 7.11 ○-01号墓



220 墓口及び墓庭(西から)
221 遺物散布状況
写真 7.12 A-01号墓

110 * 参考に該当箇所を引用する。「(前略) 仲畑慶の番所をでた宿道は、スツチャー原を通り大和人墓のある険しい山あいの下り坂を降り、億首川にかかる橋を渡っていった。」沖縄県教育委員会『沖縄県歴史の道調査報告書VI-国頭方東海道・他-』1989年 p.19

第4節 飛留喜田原・頭呂地原地区

飛留喜田原B遺跡周辺における試掘調査地点(第III章第3節)の北東、迫地をめぐる斜面地において確認された古墓群である。

露頭した石灰岩岩盤を利用した岩陰墓が主で、今回の踏査では計11基の古墓を確認したが(図7.3)、周辺一帯は同様な地形が連続しており、今後さらに確認されることも十分予想される。



写真7.13 飛留喜田原・頭呂地原地区遠景

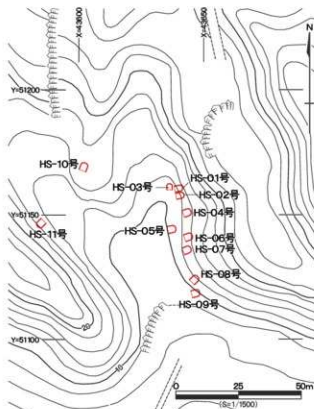


図7.3 飛留喜田原・頭呂地原地区 墓分布状況

HS-01号墓

位置 X: 51160.37
Y: 43639.94
Z: 12.14

立地 丘陵中腹に露頭した石灰岩
墓口の向き 南西

墓の形態 岩陰墓(開口部に石積で墓口を造る)

規模 墓口 W: 0.7 H: 0.8 D: 0.4
墓室 W: 2.4 H: 0.8 D: 1.9
墓庭 W: — H: — D: —

人骨 —

遺物 —

丘陵斜面に露頭した石灰岩の岩陰を利用した墓である。土砂流入が岩陰内にまで及ぶが、墓口の両側に野面積みの石積による側壁が築かれる。南側の石積ではモルタル塗布で平滑に仕上げられる。墓口が閉塞されていたか現状で確認できないが石灰岩礫の散乱状況から墓口正面も野面積みの石積が構築されていた可能性もある。人骨や遺物は認められない。墓の前方には損壊した03号墓がある。



223 南西から
224 墓室内の状況

写真7.14 HS-01号墓

HS-02 号墓

位 置 X: 51158.89
Y: 43640.51
Z: 12.12

立 地 丘陵中腹に露頭した石灰岩

墓口の向き 南西

墓の形態 岩陰墓

規 模 墓 口 W:1.4 H:0.5 D:—
墓 室 W:1.0 H:0.4 D:1.2
墓 庭 W:— H:— D:—

人 骨 —

遺 物 —

01号墓に隣接して構築された小規模な岩陰墓である。土砂流入のため構造の詳細は確認し得なかったが、石灰岩礫の散布等から石積で閉塞されていたとみられる。岩陰内（墓室内）を掘削した跡は認められないが、堆積土を除くことで墓室を拡張たとみられる。人骨その他関連遺物は認められなかった。



225 西から
226 墓口周辺（西から）
写真 7.15 HS-02 号墓

HS-03 号墓

位 置 X: 51161.21
Y: 43638.58
Z: 12.11

立 地 丘陵中程の緩い傾斜地

墓口の向き —

墓の形態 —（家型と推定）

規 模 墓 口 W:— H:— D:—
墓 室 W:— H:— D:—
墓 庭 W:— H:— D:—

人 骨 —

遺 物 近現代陶磁器（花生）

損壊して全形を窺え得ないが、残骸からコンクリートやブロックを用いた小型の家型墓とみられる。01号墓の前方数mの位置にあり、仮墓やワラビ（童）墓の可能性も考えられる。周辺には陶磁器の散布も認める。

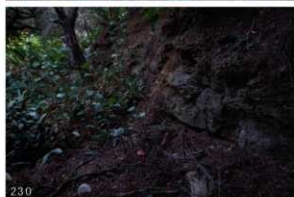


227 HS-01・02号墓との位置関係
228 確認時の状況
写真 7.16 HS-03 号墓

HS-04 号墓

位 置	X: 51151.22 Y: 43643.93 Z: 12.49
立 地	丘陵中腹に露頭した石灰岩
墓口の向き	南西
墓の形態	岩陰墓?
規 模	墓 口 W: 1.5 H: 0.1 D: — 墓 室 W: — H: — D: 0.9 墓 庭 W: — H: — D: —
人 骨	—
遺 物	—

02 号墓の南南東の方向に位置する。露頭する石灰岩岩盤の窪みを利用した墓とみられるが、全体を覆う程に土砂が流入しており詳細は不詳である。01・02 号墓とほぼ同じ標高にある。



229 西から
230 南から
写真 7.17 HS-04 号墓

HS-05 号墓

位 置	X: 51144.26 Y: 43637.67 Z: 7.30
立 地	丘陵裾に露頭した石灰岩
墓口の向き	南西
墓の形態	掘込墓
規 模	墓 口 W: — H: — D: — 墓 室 W: 2.5 H: 0.9 D: 2.2 墓 庭 W: — H: — D: —
人 骨	—
遺 物	陶磁器

丘陵裾部の露頭した石灰岩岩盤の窪みを利用した墓で、墓室構築時に一部掘削をした掘込墓とみられる。04 号墓の南西約 10m に位置する。墓室奥壁にはモルタル塗布された野面積みの石積が一部残る。墓口正面も本来は石積で塞がれていた可能性がある。周辺には陶器破片の散布も若干ある。



231 南西から
232 墓室内
写真 7.18 HS-05 号墓

HS-06 号墓

位 置 X: 51141.51
Y: 43644.59
Z: 10.16

立 地 丘陵中腹に露頭した石灰岩

墓口の向き 南西

墓の形態 岩陰墓

規 模 墓 口 W:2.1 H:1.0 D:—
墓 室 W:1.2 H:1.2 D:2.5
墓 庭 W:— H:— D:—

人 骨 —

遺 物 沖縄産無軸陶器(蔵骨器)、外国産陶器壺

ほぼ直立した露頭石灰岩の岩陰を利用した墓である。05号墓の上方に位置する。岩陰内には石積の残存も認める。墓室に人骨や関連遺物は認めなかったが、07号墓と共有する平場(庭?)で下図に示す沖縄産無軸陶器(蔵骨器)、外国産(中国産?)陶器壺を採集した。

表 7.1 H-05・06号墓周辺 採集遺物観察表

図版番号	図 7.4 50	図 7.4 51
産 地	外国産陶器	沖縄産蔵骨器
出土地帯/層	表層/表層	表層/表層
器種/部位	壺/口縁	壺/胴部
観察結果	口径18.6cm 外面黄目状の文様 胴部口口などで 無軸 緑赤褐色 断面一部暗青灰色 胎土に白黒2 種類の鉱物混入	マンガン酸鉄の模様 外面黒 褐色 内面明赤褐色 文様はラッ クワークーで縦長縦横、はり、 柱を表現 直径1.4cmの穴が2コ
備 考		



233 南西から
234 岩陰内に残る石積
写真 7.19 HS-06号墓

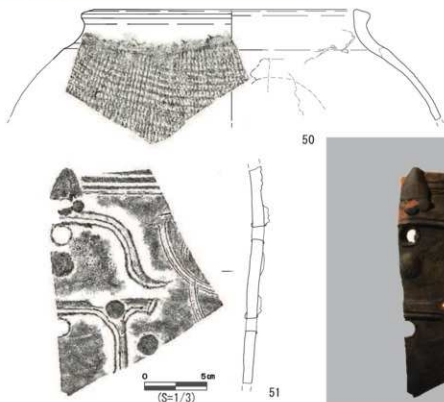


図 7.4 H-05・06号墓周辺 採集遺物

HS-07号墓

位 置 X: 51136.00
Y: 43643.92
Z: 9.08

立 地 丘陵中腹に露頭した石灰岩

墓口の向き 南西

墓の形態 岩陰墓

規 模 墓 口 W: 1.9 H: 0.8 D: -
墓 室 W: 1.9 H: 0.5 D: 1.3
墓 庭 W: - H: - D: -

人 骨 -

遺 物 -

06号墓のすぐ南に隣接する、同じく岩陰を利用した墓である。岩陰内には野面積みの石積がよく残り、墓室内を平坦に整えるためか石灰岩礫が積み並べられている。墓室周辺に人骨や埋葬関連の遺物散布は認められなかったが、06号墓と共有する平場庭?)で前掲の遺物を採集した。



235 北西から
236 墓室内

写真 7.20 HS-07号墓

HS-08号墓

位 置 X: 51123.92
Y: 43646.78
Z: 7.84

立 地 丘陵中腹に露頭した石灰岩

墓口の向き 南西

墓の形態 岩陰墓

規 模 墓 口 W: 1.3 H: 0.7 D: -
墓 室 W: 1.1 H: 0.5 D: 1.0
墓 庭 W: - H: - D: -

人 骨 -

遺 物 -

丘陵裾付近に露頭した石灰岩の岩陰を利用した墓である。07号墓の南南東に位置する。岩陰内の土砂を除去した後、周囲に石灰岩を積み墓室を造り出したとみられるが、石積らしき痕跡が一部残るだけである。墓室やその周辺に人骨や関連遺物の散布は認められない。05号墓とほぼ同じ標高に位置する。



237 南から
238 近景

写真 7.21 HS-08号墓

HS-09 号墓

位 置 X: 51118.54
Y: 43647.12
Z: 5.64

立 地 丘陵裾に露頭した石灰岩

墓口の向き ー

墓の形態 岩陰墓

規 模 墓 口 W:1.5 H:0.4 D:ー
墓 室 W:1.9 H:0.5 D:1.0
墓 庭 W:ー H:ー D:ー

人 骨 ー

遺 物 ー

丘陵裾付近に露頭する石灰岩盤の岩陰を利用した墓である。08号墓の南側に位置する。岩陰内に石灰岩礫を積み並べられており墓室の内外を区切ったものとみられるが、墓口は閉塞されていたか不明。人骨や遺物は認められない。



239 南西から
240 墓室周辺の様子
写真 7.22 HS-09号墓

HS-10 号墓

位 置 X: 51169.23
Y: 43602.55
Z: 12.02

立 地 丘陵中腹に露頭した石灰岩

墓口の向き 南西

墓の形態 掘込墓

規 模 墓 口 W:0.6 H:0.4 D:ー
墓 室 W:ー H:ー D:ー
墓 庭 W:3.0 H:ー D:3.5

人 骨 ー

遺 物 ー

石灰岩岩盤の窪みを利用した掘込墓である。01号墓の北西約38mに位置し、迫地の奥側に単独である。積み上げた切石の接合部にモルタルを塗った墓正面がある。墓室内は、モルタルを用いて側壁を塗り固め、奥の壁面の窪みを埋めて直方体様に仕上っている。床面には段が造られる。墓口を塞ぐ石は確認できない。墓室内に人骨や埋葬品は認めない。墓は、01・02・04号墓とほぼ同じ標高に位置する。



241 南から
242 墓室内の様子
写真 7.23 HS-10号墓

HS-11 号墓

位 置	X: 51147.43 Y: 43586.09 Z: 12.40
立 地	丘陵尾根の中腹にある石灰岩
墓口の向き	南東
墓の形態	岩陰墓
規 模	墓 口 W:3.0 H:— D:— 墓 室 W:2.0 H:0.5 D:1.0 墓 庭 W:— H:— D:—
人 骨	—
遺 物	—

尾根の斜面にある岩陰を利用した墓で、10号墓の南西方向、5号墓の西方向に位置する。横長にえぐれた岩陰部の壁沿いに石灰岩が積み重ねられている。集積された石灰岩の中に千枚岩も一部含まれている。墓室内には、人骨や遺物は認められない。墓は、01・02・04・10号墓とほぼ同じ標高に位置する。



243 南から
244 墓室周辺に残る石積
写真 7.24 HS-11号墓

古墓分布調査の今後の展望について

今回の古墓調査では、ウククビ(奥首)一帯や億首川下流左岸の丘陵斜面地を重点的に踏査したが、対岸にあたる川の右岸側にも小字宮城原及び田慶志原に跨る石灰岩丘陵地域がある。この丘陵斜面一帯には「ナーグスク」「ミーチュ」の古地名をもつ墓域*があり(図 7.1)、相当数の古墓の分布も予想されるが、急斜面が連続することに加え視認が困難な程に草木が繁茂している状況から、今回調査は見送った。

当該地域を含む未踏査範囲もあわせて億首川流域における古墓の分布状況を把握するための基礎調査を継続していく必要がある。



245 小字宮城原～田慶志原に跨る「ミーチュ」周辺遠景
246 宮城原の丘陵斜面地に分布する墓達墓
写真 7.25 億首川下流右岸 遠景

*『金武町誌』や地元の字誌資料でも当該地域の古い墓域について紹介している。『金武区誌戦前編』1983年、『並里区誌 戦前編』1998年 117

億首川周辺を主要調査地域として2006(平成18)～2008(平成20)年度に実施してきた埋蔵文化財予備調査について、下流周辺の遺跡や遺物散布地(第Ⅳ章)、未調査地域であった上流周辺における近世～近代期の生産遺跡群(第Ⅴ章)及び交通遺跡群(第Ⅵ章)、そして、古墓(第Ⅶ章)について記述してきた。

前章まで述べた調査成果を整理しながら若干の検討及び今後の課題等を加え、本報告の総括とする。

第1節 億首川下流周辺の先史時代遺跡

旧予備調査等で把握される億首川下流周辺の遺跡・遺物散布地7カ所について、現況の確認を行うとともに、西先謝原遺物散布地、飛留喜田原A遺跡(旧飛留喜田原遺跡)、飛留喜田原B遺跡(旧池原遺物散布地)3遺跡の実態的な把握を目的に試掘調査を実施した。

億首川河口近くの西先謝原遺物散布地で採集された縄文時代前期相当の条痕文系土器(図4.2.01～02)は、現在確認できる町内で最古の資料である。今回その埋蔵状態を確認するため初めて試掘調査を実施したところ、縄文時代(後～晩期相当)、弥生～平安併行期の土器等の遺物を認めたが、その出土状況や土層観察等から崩壊土とみられ、オリジナルの遺物包含層とは認め難い状況であった。今回の試掘地点の周辺に上述の条痕文系土器や今回得た土器の出自となる遺跡が残存する可能性があり、今後も基礎調査を継続する必要がある。

西先謝原遺物散布地より上流側(億首川の左岸)に近接してある飛留喜田原A遺跡、同B遺跡においても周辺部で試掘調査を実施した。前者では基盤層に及ぶ削平もあるが、過去の踏査による推定範囲を超えて遺物包含層が残る可能性も認めた。なお、後者の飛留喜田原B遺跡については今回の試掘では遺物包含層の確認には至らなかった。

今回試掘調査を実施した遺跡のほかにも当該地域には複数の遺跡・遺物散布地があるが、縄文時代や遺跡の性格、その実態的な残存範囲など、より詳細に把握すべき点もまだ残されている。将来の諸開発との円滑な調整を図るためにも、地域への周知活

動ともリンクしながら予備調査を継続的に実施していく必要があり、今後の課題の一つでもある。

第2節 億首川上流域生産遺跡群の予備調査

県内における近世以降の遺跡調査をみると、いわゆる近世墓や古集落(古島遺跡)、古窯等に加えて、近年では炭焼窯や猪垣等の生産関連施設や屋敷集落に関する調査事例も増えている。これまで調査未実施区域であった億首川上流周辺(現金武ダム貯水城周辺)においても、沢や方言でいうサーク*を利用した耕地跡(畑・水田跡)や堰堤状石積を主に、炭焼窯跡、方形状堅穴石組施設、土壘や道跡(ハルミチ・ヤマミチ)その他、対象地域におけるかつての土地利用や生産活動の実態が窺える多様な内容の生産関連遺構群を確認できた。

上流周辺で特に目を引いたのが、今回、堰堤状石積と仮称した石積遺構である。沢や丘陵斜面にある溝状の窪地において、水の流れを塞ぎ止めるように構築されている点で共通するが、規模や残存状況等からその性格・機能には差違を認めることもできる。沢筋の僅かな土地を耕地利用するための土留めの他に、幸地原地区のウヤギ一帯で確認した堰堤状石積(1～3地点)のように、別地点にある耕地との関連性や推測される別の構築意図(例えば、堰や砂防施設等)があった可能性も考えられる。

炭焼窯は、幸地原地区で1カ所確認した(4地点)。恩納村南恩納山中や名護市久志大川上流など、本島北部における調査事例では複数基で構成される状況を認めるが、今回確認した窯跡は1基のみであった。字誌等過去の聞き取り調査資料でも確認地点付近に戦前、炭焼小屋があったとの記録も残るが、所期の予想に比べて億首川上流周辺における実際の分布は少ない印象を受ける。

調査地域周辺にはクスヌチセイゾー(樟木製造)やエースブー(藍蓋)等、特定の生産活動や施設に関わる古地名もよく残っている¹⁾。これらの地名情報にも留意しながら現場を踏査したが、上記の生産活動に関連する遺構の確認には至らなかった。一方、今回確認した施設で気になるのが、上ゴーチの耕地跡

* 谷、沢沿いの低地。サークともいう。

† 前掲の図5.3(p.40)、表5.1(p.41)参照。

(6地点)、富田原の階段状耕地跡(13地点)で検出された方形の堅穴石組施設である。ともに耕地に近接する位置に構築される点で共通するが、性格・用途は判然としない。後者の石組施設では遺構埋土の自然科学分析も行ったが、特定農作物の生産活動や便所等の施設の可能性は低いことが分析結果から導かれる。その後の聞き取りで浮上した猪鬣園連施設の可能性も含めて、さらに情報収集する必要がある。

今回確認した生産遺跡群が構築・稼働していた主要な時期は近代以降(基地接収前まで)とみられるが、この場所がいつ頃から利用され始めたのか、地表踏査を主体とした調査成果から辿るのは難しい。現場に残存する耕地跡及び畦・段等の区画と地籍図の筆にみる区画形状が合致する箇所も複数あった。まだ確認・検証すべき課題は多いが、地籍図にみる土地区画形状には近世期地割制度の名残を色濃く残す部分も多くあると考えられ、かつてのフクヂ*周辺における沢やサークの耕地利用は明治以前、すなわち前近代まで遡る可能性もある。

上記の生産遺跡群は、開発区域内(ダム建設事業予定地)の詳細分布調査によるものだが、当然ながら踏査範囲外でも生産関連遺構が残存する状況が予想される。先人達の幾世代にもわたる経験で培われた生産技術や土地利用の実態に関する情報が急速に失われつつある今日にあって、実資料である生産遺跡の基礎調査及びその保護対応の重要性・必要性は今後増していくものと思われる。一方、今回の報告では上流域生産遺跡群＝確認地点の集合として扱ったが、埋蔵文化財として範囲の設定が困難な当該遺跡について調査手法や確認後の対応等、諸過程において残された課題も多い。

第3節 奥首^{ウツボ}の交通遺跡群について

億首川の兩岸が最も近接するウククビ(奥首)一帯において、宿道(国頭方東海道跡)及び大正期村道跡の一部、旧億首橋を確認したことは今回得た大きな成果の一つである。なかでも、明治期の文献史料に「螺旋シテ下ル」「峻阪羊腸」と描写された宿道の道路遺構が実際に検出できた点は、県内でも数少ない事例であり、特記される。山地・丘陵地が顕著な

本島北部の陸上交通事情は近代まで殆ど未発達な状況にあり⁷、U字状の道路線形や細部の階段・縁石にも急峻な斜面を往来するための工夫が偲ばれる。詳細踏査による遺構検出地点を中心に丘陵斜面地区・宿道西側地区で試掘調査を実施した結果、当該地付近における宿道のルート及び残存範囲に関する基礎的情報を得たが、構築時期や道路構造、周辺で検出された礎石中面ほかとの関わり等、その詳細は断片的な試掘ではなく本発掘調査に委ねるところである。なお、宿道西側地区と称した石灰岩台地縁辺部での試掘では先史時代～グスク時代遺跡の痕跡の有無にも留意したが、地山層まで及ぶ掘削造成のため今回確認には至らなかった。

当該調査で得られた重要な成果は、宿道が機能していた時期から現在の国道に至るまで、各世代の主要道路の変遷がこのウククビ(奥首)一帯で確認できた点である。今回の報告に際し、この交通史的意義を積極的に評価し、各期の道路遺構をまとめて奥首の交通遺跡群と呼称したい。

第4節 億首川周辺における古墓の分布調査

古墓の調査では伐採を伴わない概要踏査により、対象地域に分布する墓の位置や残存状態の確認、形態等の観察を行った。これまでの踏査で小字比嘉原・奥首原・甘喜原・飛留喜田原及び頭呂地原において計21基を目視で確認した。いずれも丘陵斜面に露頭した石灰岩岩盤の岩陰や窪みを利用した岩陰墓、掘込墓である。ウククビの北西に位置する比嘉原や、下流左岸の飛留喜田原・頭呂地原で確認した墓群は、地籍図にみる墓群と重ならない状況が認められる。空墓となっているものが多いが、蔵骨器が置かれた状態の墓も数基確認した。

億首川流域に分布する古墓群の基礎調査はまだ途上であり、今回はその中間報告である。今回報告した地区も含めて今後さらに追加されることも十分予想される。加えて、下流右岸の小字宮城原・田慶志原に跨る急な崖斜面地など岩陰墓や掘込墓を主とする墓群の存在が字誌資料や口碑でも窺え⁸、今後も当該調査を継続的に実施していく予定である。

* 億首川上流に位置する袋状の低地一帯の地域名称(前掲の表5.1参照)。現在は金武ダム貯水域となっている。

† 「金武口談」などの古謡や明治期の文獻記録からも当時の陸上交通の様子が窺える。

‡ 地元で「ミーチエ」「ナゲスグ」と呼ばれる古い墓域がこの一帯に集中する。「金武町誌」1983年、「並里区誌一戦前編」1998年など。

引用・参考文献

政府刊行物

- ・文化庁文化財保護部編『全国遺跡地図 沖縄県一史跡・名勝・天然記念物および埋蔵文化財包蔵地所在地地図』1979年
- ・沖縄総合事務局北部ダム事務所編『億首ダムの計画概要』2005年

沖縄県刊行物（発行年順）

- ・琉球政府編『沖縄県史 20—沖縄県統計集成—』1967年
- ・文化財保護委員会／琉球政府文化財保護委員会監修『全国遺跡地図（沖縄）一史跡・名勝・天然記念物および埋蔵文化財包蔵地所在地地図—』財団法人国土地理協会 1968年
- ・「沖縄県森林視察復命書」（琉球政府編『沖縄県史 第21巻資料編 11—旧慣調査資料—』琉球政府 1968年）所収
- ・沖縄県教育委員会編『沖縄県の遺跡分布』沖縄県文化財調査報告書第10集 1977年
- ・沖縄県教育庁監修『沖縄文化財調査報告（1956年～1962年）』那覇出版社 1978年
- ・「琉球行日誌」（沖縄県沖縄史料編集所『沖縄県史料 近代3—尾崎三良、岩村通俊沖縄関係史料—』沖縄県教育委員会 1980年）所収
- ・「琉球国高亮帳」（沖縄県沖縄史料編集所『沖縄県史料 前近代1—首里王府仕置—』沖縄県教育委員会 1981年）所収
- ・「沖縄本島巡回日誌」（沖縄県沖縄史料編集所『沖縄県史料 近代4—上杉景元沖縄関係史料—』沖縄県教育委員会 1983年）所収
- ・琉球政府編『沖縄県史 16—新聞集成（政治経済1）—』国書刊行会 1989年
- ・沖縄県教育委員会編『沖縄県歴史の道調査報告書Ⅵ—国頭方東海道・他—』1989年
- ・「上り絵図郷村帳」（沖縄県教育委員会編『琉球国絵図史料集 第二集—元祿国絵図及び関連史料—』1993年）所収
- ・沖縄県教育委員会編『湧田古宮跡（Ⅰ）—県庁舎行政棟建設に係る発掘調査—』沖縄県文化財調査報告書第111集 1993年
- ・沖縄県立埋蔵文化財センター編『沖縄県戦争遺跡詳細分布調査（Ⅲ）—北部編—』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第16集 2003年
- ・沖縄県教育委員会編『沖縄県史 各論編第二巻—考古—』2003年
- ・沖縄県立埋蔵文化財センター編『首里城跡 東のアザナ地区発掘調査報告書』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第20集 2004年
- ・沖縄県教育委員会編『沖縄県近代化遺産（建造物等）総合調査報告書』沖縄県文化財調査報告書第144集 2004年
- ・沖縄県立埋蔵文化財センター編『沖縄科学技術大学院大学（仮称）建設予定地の遺跡（Ⅰ）—埋蔵文化財予備調査（表面踏査）報告—』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第31集 2005年
- ・沖縄県立埋蔵文化財センター編『沖縄科学技術大学院大学（仮称）建設予定地の遺跡（Ⅱ）—埋蔵文化財予備調査（試掘・確認調査）報告—』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第36集 2006年
- ・沖縄県立埋蔵文化財センター編『基地内文化財Ⅳ—平成15・16年度基地内埋蔵文化財分布調査概要—』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第38集 2006年
- ・沖縄県『億首川水系河川整備計画』2008年

論文等（執筆者名五十音順）

- ・新垣 力／瀬戸哲也「沖縄における14世紀～16世紀の中国産白磁の再整理—付14～16世紀の青磁の様相整理メモ—」（『紀要 沖縄埋文研究3』沖縄県立埋蔵文化財センター 2005年）所収
- ・池田栄史／津波古聡「灰釉碗の話」（『沖縄県立博物館紀要』第17号 沖縄県立博物館 1991年）所収
- ・池原 隆「並里の地名」（並里区誌編集委員会編『並里区誌 戦前編』並里区事務所 1998年）所収

- ・柿田富造「焼酎瓶・硫酸瓶の変換—常滑焼を中心に—」(『産業遺産研究』第7号 中部産業遺産研究会 2000年)所収
- ・島袋伸三「金武(金武・並里)の自然」(並里区誌編集委員会編『並里区誌 戦前編』並里区事務所 1998年)所収
- ・瀬戸哲也ほか「沖縄における貿易陶磁研究—14～16世紀を中心に—」(『紀要 沖縄埋文研究5』沖縄県立埋蔵文化財センター 2008年)所収
- ・多和田眞淳「琉球列島の貝塚分布と編年の概念」『文化財要覧』琉球政府文化財保護委員会 1956年
- ・多和田眞淳「琉球列島の貝塚分布と編年の概念補遺」『文化財要覧』琉球政府文化財保護委員会 1960年
- ・多和田眞淳「琉球列島における遺跡の土器、須恵器、磁器、瓦の時期区分」『文化財要覧』琉球政府文化財保護委員会 1961年
- ・松川聖子「猪と人々のくらし—大宜味村を事例にして—」『沖縄県立博物館紀要』第31号 沖縄県立博物館 2005年
- ・宮城樹樹「いわゆるスンカン・マカイについて」(『壺屋焼博物館紀要』第3号 那覇市立壺屋焼博物館 2002年)所収

市町村刊行報告書/地域史誌関係(地域名五十音順)

- ・糸満市史編集委員会編『糸満市史—資料編12 民俗資料—』糸満市役所 1991年
- ・浦添市教育委員会編『浦添ようどれⅡ 瓦溜り遺構編—史跡浦添城跡復元整備事業に伴う発掘調査—』2005年
- ・沖縄県立埋蔵文化財センター編『大保川上流域の生産遺跡群—大保ダム建設事業に伴う緊急発掘調査報告—』大宜味村文化財調査報告書第6集 2009年
- ・沖縄市教育委員会編『取集集落に生きる—一池原上田原・仕明座原遺跡発掘調査報告書—』沖縄市文化財調査報告書第34集 2008年
- ・沖縄県地域史協議会編『シンポジウム 南島の墓 沖縄の葬制・墓制』沖縄出版 1989年
- ・恩納村教育委員会編『沖縄科学技術大学院大学(仮称)建設予定地の遺跡—埋蔵文化財予備調査及び緊急発掘調査報告—』恩納村文化財調査報告書第7集 2008年
- ・宜野湾市教育委員会編『基地内埋蔵文化財調査報告書Ⅲ 平成15～18年度基地内遺跡ほか発掘調査事業—普天間飛行場基地内—』宜野湾市文化財調査報告書第39集 2007年
- ・国頭郡教育会編『沖縄県国頭郡志』1919年
- ・名護市史編さん委員会編『名護市史本編・9 民俗Ⅰ・民俗誌』名護市役所 2001年
- ・名護市教育委員会編『クスノキ製造—久志大川ダム建設に伴う久志大川上流域生産遺跡緊急発掘調査報告書—』名護市文化財調査報告書16 2004年
- ・那覇市教育委員会編『銘苅古墓群(Ⅶ)—一天久公園整備事業に伴う緊急発掘調査報告Ⅶ—』那覇市文化財調査報告書第73集 2007年
- ・羽地大川・山の生活誌-調査編集委員会編『羽地大川—山の生活誌—』北部ダム事務所/名護市 1996年
- ・平安座自治会編『平安座自治会館新築記念 故きを温ねて』平安座自治会 1985年
- ・やんばる国道変遷誌編集委員会編『やんばる国道物語』内閣府沖縄総合事務局北部国道事務所 2005年
- ・与那原町史編集委員会編『与那原町史 序説—むかし与那原—』与那原町役場 1988年
- ・伊波普猷/東恩納寛博/横山重編『琉球国日記』(『琉球史料叢書』第三巻 1942年)所収

単行本(編著者名五十音順)

- ・池野茂『琉球山原船水運の展開』ロマン書房 1994年
- ・小野武夫編『近世地方経済史料 第十巻』吉川弘文館 1958年

- ・崎浜秀明『蔡温全集』本邦書籍 1984 年
- ・笹森儀助『南島探験』『日本庶民生活史料集成 第一巻 一探検・紀行・地誌(南島篇)』三一書房 1968 年
- ・仲田邦彦『沖縄県の地理』編集工房東洋企画 2009 年
- ・名嘉真宜勝『沖縄の人生儀礼と墓』沖縄文化社 1999 年
- ・仲間勇栄『沖縄林野制度利用史研究 一山に刻まれた歴史像を求めて』ひるぎ社 1984 年
- ・仲吉朝助『南山制度論』1952 年
- ・原田禹雄『徐葆光 中山伝信録 一新訳注版』榕樹書林 1999 年

金武町関係(発行年順)

- ・金武町教育委員会編『金武町遺跡概要書』1982 年
- ・金武町教育委員会編『金武町の遺跡 一遺跡詳細分布調査報告』金武町文化財調査報告書第 1 集 1990 年
- ・金武町教育委員会編『金武町徳首川マングローブ調査報告書』1993 年
- ・金武区誌編集委員会編『金武区誌 上巻』金武区事務所 1994 年
- ・並里区誌編集委員会編『並里区誌資料編 一戦前新聞集成』並里区事務所 1995 年
- ・並里区誌編集委員会編『並里区誌 戦前編』並里区事務所 1998 年
- ・金武町教育委員会編『金武町の井泉 一水をめぐる人々のくらし』金武町文化財調査報告書第 2 集 2003 年
- ・金武町役場企画課編『第 4 次金武町総合計画 一基本構想』金武町役場 2006 年
- ・金武町役場企画課編『平成 19 年度版 統計きん 一第 6 号』金武町役場 2008 年

学術調査報告書等(発行年順)

- ・沖縄国際大学考古学研究室編『金武町並里遺跡他試掘調査概報』2006 年
- ・沖縄国際大学考古学研究室編『金武町池原遺物散布地発掘調査概報』2007 年
- ・沖縄国際大学考古学研究室編『金武町池原(イチバル)遺跡調査概報(二次)』2008 年

展示会図録/パンフレット類(発行年順)

- ・那覇市立壺屋焼物博物館編『陶磁器に見る大交易時代の沖縄とアジア』1998 年
- ・久米島自然文化センター編『企画展 貝 一かりゆしの海』2002 年
- ・那覇市立壺屋焼物博物館編『那覇市立壺屋焼物博物館企画展 銘苅古墓群 一蘇った先祖の眠る大地』2005 年
- ・沖縄県立博物館・美術館編『博物館企画展 ずしがめの世界』2008 年

事典類(発行年順)

- ・『沖縄大百科事典』(上・中・下巻) 沖縄タイムス社 1983 年
- ・『角川日本地名辞典 47 沖縄県』角川書店 1986 年
- ・下中直人『増補 やきもの事典』平凡社 2000 年
- ・『沖縄県の地名 - 日本歴史地名体系 48』平凡社 2002 年

報告書抄録

ふりがな	ちょうないまいどうぶんかざいよびちょうさほうこくしよ							
書名	町内埋蔵文化財予備調査報告書							
副書名	億首川周辺（平成18～20年度）							
巻次	—							
シリーズ名	金武町の歴史と文化							
シリーズ番号	第4集							
編著者名	安座間充、仲間淳一、岸本利枝、富山 勇、池原 隆							
発行機関	金武町教育委員会							
所在地	〒904-1201 沖縄県国頭郡金武町字金武7758番地（TEL：098-968-8996）							
発行年月日	2010年（平成22年）3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ○°N	東経 ○°E	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
億首川上流域生産遺跡群ほか	沖縄県国頭郡金武町字金武	47314	—			2007.7/01 ～ 2009.3/31	踏査対象：61,000㎡ 試掘面積：計440㎡	埋蔵文化財分布状況把握のための予備調査 開発区域詳細
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物			特記事項
億首川上流域生産遺跡群	生産遺跡	近代	耕地跡（畑跡・水田跡）、炭焼窯跡、堰堤状石積、方形状竪穴石組施設、古道跡・ほか		沖縄産無釉・施釉陶器、本土産陶磁器・ほか			
奥首の交通遺跡群（国頭方東海道跡・ほか）	交通遺跡	近世～近代	道路遺構、橋		沖縄産無釉・施釉陶器（灰釉陶器ほか）、本土産施釉陶器（硫酸瓶）、金属製品（吸口等）			
西先謝原遺物散布地	遺物散布地	縄文時代、弥生～平安並行期	—		土器、石器			試掘調査で遺物包含層確認できず
飛留喜田原A遺跡（旧池原遺物散布地）	性格不詳	弥生～平安並行期、グスク	—		土器、貝類			遺跡の範囲が拡がる可能性
飛留喜田原B遺跡（旧飛留喜田原遺跡）	遺物散布地	時期不詳	—		土器、貝類			試掘調査で遺物包含層確認できず
億首川流域の古墓群	墓	近世、近・現代	岩陰墓、堀込墓（計21基）		沖縄産陶器、本土産陶磁器、中国産陶器			
要 約	本報告書は、億首川周辺を主な対象に実施した埋蔵文化財の予備調査成果をまとめたものである。上流周辺における近代～基地接収前の土地利用・生産活動の実態に迫る関連遺構群、国頭方東海道跡ほか、近世以降の変遷が窺える各時期の道路遺構を確認した。特に国頭方東海道跡は史料描写と合致する姿で検出され、特記される。あわせて、西先謝原遺物散布地ほか億首川下流周辺における遺跡・遺物散布地の実態的把握のため踏査・試掘調査を実施した。							

金武町の歴史と文化 第4集

町内埋蔵文化財予備調査報告書
一億首川周辺（平成18～20年度）－

発行年 2010年（平成22）3月

編集・発行 金武町教育委員会

〒904-1201 沖縄県国頭郡金武町字金武7758番地
TEL (098) 968-8996〈社会教育課〉

印刷 株式会社東洋企画印刷

〒901-0305 沖縄県糸満市西崎町4丁目21番5号
TEL (098) 995-4444